
弓使いの辿る道

baenre

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

弓使いの辿る道

【Nコード】

N0401X

【作者名】

baenre

【あらすじ】

弓を愛し、弓を引くことだけを目的にVRMMOを始めた彼は、気づけば7年もの間引きこもってゲームに精を出す毎日を送っていた。ある日を境に数万人のプレイヤーがゲームの世界に投げ出されるも、意外に落ち着いた廃人たちとともに淡々と弓を引く毎日を送る主人公。弓を偏愛する彼と廃人プレイヤーたちの冒険の物語。

ブログ（前書き）

週一くらいで更新しようと思います。文章や設定に関する感想は大歓迎です。誤字・脱字等の指摘もしてくれるとありがたいです。

ブログ

ネットゲーム『maybe world online』の中では変わり者の廃人プレイヤーとしてそれなりに認められてるその男は、しかし大方のネットゲ廃人がそうであるように現実での生活は酷いものだった。

元々彼の生家はそこそこ大きな剣道の道場であり、彼自身は弓道を好んでいたものの同じ武芸者として両親との仲はよかった。中学時代には全国大会にも出場し、ベスト16にまで進んだ彼がなぜネットゲ廃人に成り下がってしまったのかというと、高校一年の夏に交通事故によって下半身不随になってしまったからだだった。スポーツ推薦によって入った高校で非常に居心地が悪くなった彼は、自室に引きこもって当時から流行していたVRMMOに熱中しだし、現実世界で弓が引けない分仮想現実の世界では一流の弓士として活躍していた。両親はさんざん彼を説得しようとしたものの、弓道だけが生きが이었다った彼にとって、いまさら弓がひけない現実世界で暮らすなど真っ平ごめんだった。彼が引きこもってから3年目に両親も交通事故で亡くなり、彼に同情的な兄に道場の運営を任せて、いっそ仮想現実に熱中するようになった。

そんなわけで引きこもってから7年が経ち、彼は兄に養ってもらいながら仮想の世界で弓を引いていた。

『maybe world online』、通称MWOは近世ヨーロッパ風の世界と江戸時代の日本を足して2で割ったような混沌とした世界であり、剣と魔法を初めとして様々な武器が使われている。剣はもちろん、槍や槌、スリングや斧など、多種多様な武器があった。

彼自身は、当然のように弓を愛用していた。弓という武器は扱いづらいう上に魔法のような華やかさもなく、熟練度の上げにくさから愛好するプレイヤーは少なかったが、それでも彼は弓を使い続けた。彼にとってレベル上げの効率やPVPの強さなどはそれほど重要ではなく、重要なのは和弓が引けるというただ一点だけだったのだ。

射程が短く、一矢の威力も低いが速射性に優れる洋弓と違って、和弓は威力と射程には優れていたが、速射性は非常に伸びづらい。

和弓 スキルの熟練度とステータスを上げれば速射性のある程度まで高めることはできるのだが、彼は多くの矢を射ることよりも正確で威力のある一矢を射ることを好んだ。だからレベルも上がりにくくスキル熟練度の上昇も緩やかなものだったが、しかし7年もの間引きこもりとして一日中ゲームにログインしていた彼は、レベルはカンストし、和弓 スキルはトップクラスの熟練度を獲得していた。

その出来事が起こったのは、ある夏の昼下がりだった。

世間一般の学生や社会人がこぞって夏休みを満喫していたその日は、およそ3万人前後のプレイヤーがMWOにログインしていた。彼がいつものようにMWOにログインし、掲示板で臨時パーティーを募集してボスモンスター討伐クエストに参加した帰り道、とつぜん視界が白い光で埋め尽くされたかと思うと――次の瞬間にはいままで見ただけでもないようなリアルな世界が広がっていた。

「あれ、メニュー画面が開けない……おかしいな、システム上ログインしてる以上はメニュー画面が開けないと言うのはありえないん

「ただ」

即席パーティのうち、比較的若いエルフの男が焦ったように呟いた。

「運営のイベント、にしては急だし手が込んでるな。とりあえず、気味が悪いからさっさと街に戻ってしまおう」

ハーフ・オーガの男性プレイヤーが、先程までのボイス・チャットとは打って変わった低い声でそんなことを言った。

「あれ、ナオミさんもガトーさんも、声変わってませんか？」

彼、プレイヤーネーム『ディニン』は声を発した二人に尋ね——そして、ぎょつとした顔であわてて自身の咽を触り、あー、あー、と声を出し始める。

他のプレイヤーたちも自身の声が変わっていることに気付いたのか、あわてて発声を初め、混乱した表情で隣の者となにやら話しはじめる。直前まではキャラクター作成時に設定した機械的な声だったのだが、今彼らが出している声は明らかに生身の人間の声だ。

「何が起きてるのは分からんが、ガトーさんが言ったとおり気味が悪い。走れば15分もかからないはずだから、街まで戻ろう。運営に問い合わせるのは街に戻ってからでいい」

ゲオルグというプレイヤーネームの竜人がことなく不安そうに辺りを見回しながらパーティの面々を急かす。確かに、彼らが今佇んでいる夕暮れ時の森は先程までとは打って変わってリアルで、その分不気味さが増していた。

「そうですね、何が起きてるのかメインメニューも開けませんし、街に戻って情報を確認しましょう」

ディニンがそう言うと、他の面々も一様に頷いて走り出した。ディニンだけは腰につけた 無限巾着 から使い魔を召喚するための音叉を取り出し、指で弾く。

澄んだ音が森に響くとともに、森の奥から墨で染めたように真っ黒な、巨大な馬が飛び出してきた。馬はディニンの前で脚を折り、ディニンがその背に騎乗すると彼の意を受けて走り出す。

レベルが150を超え、レンジャーのジョブにつけば 使い魔 を使用することができる。使い魔は基本的に高速で陸上を移動するタイプのものと、ゆっくりと空を飛ぶタイプのものに分かれるが、ディニンが使役する ナイトメア は前者のタイプだ。使い魔には騎乗して戦闘に臨むこともでき、これはステータスや固有スキルにおいて中途半端なレンジャーが唯一他のジョブに誇れる点である。使い魔に騎乗すれば他のジョブには真似できない圧倒的なスピードで移動することができるし、モンスターから逃げることも容易になる。

ディニンが使用している上級ジョブ レンジャー は、剣と弓の2つを使いこなす、ソロでのプレイに向いたジョブだ。彼は最初弓に特化した アーチャー を選択するつもりだったが、流鏑馬というのを一度でいいからやってみたいと思っていた彼にとって、その願望を実現できる レンジャー のジョブはあまりにも魅力的だった。弓に関する固有スキルの数や命中率を左右するDEX（器用さ）の成長値はアーチャーに劣るものの、ステータスはVIT（生命力）やDEF（防御力）を捨てることでどうにか補えたし、そもそも長

距離狙撃だけを重視する彼にとってスキルの寡多はそれほど重要でなかった。

ディニンの使い魔である ナイトメア はかなりレアな種族であり、移動速度はそこそこで、トップクラスの持久力と地上から数センチ浮いていることによる乗り心地のよさが人気の使い魔だ。外見の不気味さがネックだが、性能はトップクラスだ。

街に向かって走る皆は、一様に不安げな顔をしていた。メニュー画面が開けないことやいつの間にか声が変わっていること、周りの風景が妙にリアルなこと——皆の頭の中には共通してあるひとつの仮説が浮かんでいたが、彼らはその仮説を信じる気にはなれなかった。この科学の発展した22世紀に、ゲームの世界にトリップなどありえない、と。どうせ、いたずら好きな運営が仕掛けたたちの悪い冗談なのだ——不安を紛らわすかのように、皆はそんなことを言い合って運営を批判していた。

彼、ディニンといえば、周囲を警戒しつつ黙々と遠くを眺めていた。熟練の射手であり 千里眼 スキルを持つ彼は、周囲に敵影がないか確認しながら8kmほど先にある街の門の様子に目を凝らし、なにか変わったことがないかと探っているのだった。

5分ほど使い魔を走らせ、森を抜けると、肉眼ではつきりと街の門の様子が確認できた。

この近くにある街 城塞都市マツマエ は、現在海を渡った向こうにある魔界からの侵攻を防ぐための、もっとも重要な拠点である。弧状の島国である エド帝国 に住む冒険者のうち、最高峰のレベルを持つ者たちが集まって、侵攻してくる魔物を日々撃滅している。

そんなマツマエの街の門では、明らかに高レベルと思われるプレ

イヤーたちがおよそ50人ほど集まって、ときおり寄ってくる魔物を屠りながらなにやら話し合っているようだった。ディニンがそのことをパーティの皆に伝えると、パーティの面々は情報を入手できるかも知れないと言って、少し急ぎだした。

城門前で集まっているプレイヤーたちに近づくと、彼らもディニンたちに気付いたようだった。ディニンたちのパーティのリーダー格だった、ハーフ・オーガのガトーが野太い声で近づいてきたドワーフの男に尋ねる。

「一体全体、何が起こってるんだ？ 運営から告知とかはあったか？」

「いや、こつちもそのことで混乱しててな。城門のNPCが急にいつもとパターンの違うセリフ言い出したし、AIが進化したのか受け答えも妙に高度だし、相当奇妙な事態だぜ、こりゃ。とりあえずできるだけかたまってたほうがいいだろうって、お前さんがたみにに狩りから帰ってくるプレイヤーを待ってるんだ」

両者は知り合いらしく、フランクな態度で情報を交換する。

「街には入れるみたいだが、今はやめといたほうがいいだろう。メインメニューも開けないし、運営から告知もないから、何かとんでもない事態が起こってるのかもしれないぜ」

ドワーフの男は、そう言って人ごみの中へと戻っていった。

その会話を聞いたパーティメンバーは不安な面持ちで石造りの巨大な門を見つめ、隣同士でなにやら話している。

ディニンはこの事態が運営のいたずらなどではなく、何かとんでもないことが起こっているのかもしれない、と考え始めていた。メニュー画面が開けないということはログアウトもできないということであり、いくら茶目っ気に富んだ運営でもログアウト不可の状況を作り出せば訴えられてもおかしくないのだ。何が起こっているにせよ、とりあえずは知り合いを見つけて異変に備えなければいけない。

彼がその旨をパーティの面々に伝えると、彼らはいっそう不安げな面持ちになったがディニンの意見自体には賛同した。臨時パーティを解散し、彼らがそれぞれの知り合いを探そうとし始めたとき――プレイヤーたちの集団の中から、大きな声が聞こえた。

「えー、私はギルド シュラーゲン に所属する吟遊詩人のパートレムと申します。とりあえず、私どものほうで現在起きている事態についていろいろと検証してみたので、聞いてください」

吟遊詩人のアビリティ 大声 を使用しているのか、その声は異様に大きく、それでいて耳に心地良かった。

「現在確認されている異常は、さっきまでと比べて異様なまでに周囲がリアルであること、NPCの受け答えが現在技術では不可能なほどに高度になっていること、メニューが開けずログアウトもできないこと、それにもかかわらず スキル は使用可能であること、そして――我々が生理的な衝動を感じることです」

集まってパートレムの話を聞いているプレイヤーたちは、最後の一言を聞いて衝撃を受けた。本来、MWOをはじめとするVRMM

Oでは尿意や便意、食欲・性欲などの「生理的欲求」は感じないように法律で定められている。それにもかかわらず生理的な欲求を感じるとはどういうことか、とパートレムに向かって大声で詰問するものもいた。

「ご静粛に、ご静粛に！ 私自身も信じられない思いですが、どうやらこれは本当のことのようです！ この異常な事態に巻き込まれたことで気づいていない方もいるのですが、今私は確かに尿意を感じています——皆さんのうちにも、そういった方はいるのでは？」

パートレムが大声でそういうと、何人かのプレイヤーが自分も尿意を催していることを自白した。彼ら自身信じられなかったようだが、仲間がいるとわかって自分がおかしくなったわけではないと悟り、ほっとため息をついていた。

「私がいま話したいくつかの変異から導き出せる結論はひとつ——端的に言えば、我々は今、『maybe world online』の世界にいます」

パートレムが厳かにそう宣言すると、一瞬だけ場が静まり返り——そして次の瞬間、プレイヤーたちの怒声が響き渡った。

「ご静粛に、ご静粛に！ 信じたくない気持ちはわかりますが、少なくともこの考え以外にこの事態を説明できる説はないのです！ それに、たとえ私の考えが間違っていようと、すくなくとも我々がログアウト不可の状況で、生理的な欲求を感じながら生きていかなければならないのは変わりません！」

プレイヤーたちの怒号を遮って、パートレムが怒鳴り返す。

「ひとまず、街に入って宿と食事を確保するべきです！ 今晚10時に、マツマエ中央街のギルドホールにてプレイヤーの集会を開催しようと思います！ 私たちは今から街に入って宿を取るの、皆さんもどうぞお好きなようにしてください！」

そう叫んで、パートレムとギルド シュラーゲン の面々は門を通って街の中へと入っていった。

プレイヤーたちが混乱していろいろとわめきあっている中、デインは人ごみをかきわけ、街へ入ろうと試みる。門の兵士にいつもどおりアイテム 通行許可証 を見せ、マツマエの街の中へと入っていった。

1話

（ゲームの世界にトリップ？ 馬鹿らしい話だけど、今の状況ではあながち馬鹿にできない説だな……）

武家屋敷と洋館が雑然と立ち並んだマツマエの町並みを歩きながら、ディニンは現在の状況について考えていた。

ここが異世界だろうがなんだろうが、彼としては弓が引ければそれでいい。一番困るのは、死んで弓が引けなくなることと、二度とこのゲームにログインできなくなることだ。この世界のリアリティが増したというのなら、むしろよりリアルに弓を引けるようになったということであって、喜ぶべき状況かもしれない、などと思うする。

彼は物思いにふけりつつ、知っている中でもっとも快適な宿を目指す。HP回復や生産スキルの使用のために宿屋を利用することはよくあったので、ほとんどの上級プレイヤーが宿屋の場所なんてろくに記憶していない中、彼は居心地のいい宿屋の場所を知っているのだ。

知り合いに連絡を取ろうかとも思ったが、どの道こんな大混乱の中で他人とつるんでも動きがとりづらくなるだけだろうと考え、ひとまずは宿と食事の確保を優先した。それに、メインメニューが開けない現状では 念話 は使えないのだ。

「すみません、とりあえず一週間ほど宿泊したいのですが……」

和風の宿に着いて、彼は受付のNPCに話しかけた。従来ならば

NPCの頭上にアイコンが表示されており、それを操作することで会話せずとも宿泊の手続きは取れたのだが、アイコンが表示されていない現在直接話しかけるしか方法はなかったのだ。

「素泊まりなら一週間なら金貨3枚だよ。朝食付きで金貨3枚と銀貨5枚、夕食もつくと金貨4枚だ」

「じゃあ、朝食と夕食つきでお願いします」

彼は旅館のおかみに金貨4枚を渡し、部屋に案内してもらった。お金やアイテムを重量を無視して無限に収納できる 無限巾着 は使えるようなので、お金に余裕はあるのだ。これまでは食事の必要がなかったから素泊まりで済ませていたが、パートレム氏の話だと食欲もあるようなので、食事も頼むことにした。

それにしても、以前はNPCがこんな人間くさい対応をするなんて事例はなかったはずだ、と彼は思った。大半のNPCはAIの程度が低く、数パターンのセリフしか言えないのが常だったのに、この女将はパターンになかったセリフを言っていた。一体何が起きているのだろう、と彼はそこはかとな不安を感じ、寒さも相俟って体を震わせた。

案内された部屋は小奇麗な和室で、堀炬燵の上にみかんが置いてあった。部屋の中は適度に温まっていて、居心地がいい。以前は感じられなかった畳のにおいを嗅いで、やはりパートレム氏の説は本当なのかもしれない、とふと思う。

トイレ（女将は雪隠と呼んでいた）は旅館の庭に魔法を使った水洗式のそれが詠えてあるそうで、彼は以前は使わなかったソレに少し興味がわいた。わざわざトイレに魔法を使うのかと思ったが、女将の話ではそうでもないと思病気やにおいがとんでもないことにな

る、とのことだ。そんなものと納得し、夕食までは1時間あるそうなので弓とゆがけを取り出して手入れを始める。

このゲームでは装備品は定期的に 手入れ をしないとどんどん性能が落ちていく。以前はメインメニューから 手入れ のコマンドを使って武器の手入れを行っていたが、メインメニューが使用できない現在、こうやって直接手入れをするしかない。コマンド入力による 手入れ では体が勝手に動いて装備を手入れしていたので、コマンド入力ができずとも体で覚えた動きは簡単に再現できた。

彼が使っている弓とゆがけは、どちらもかなりレアな装備品だ。弓はマツマエの防衛クエストで戦功により特別報酬として手に入れたもの、ゆがけはマツマエ近郊に出現する時間沸きbossの素材で作られたもので、どちらも射程と命中精度を高めるルーンが刻まれている。これは知り合いの 刻印術士 に刻んでもらったルーンで、一流の生産職に依頼するときの常として莫大な金額をふんだくられた。が、彼は満足している。代金に見合うだけの性能はあったし、そもそも彼女は多忙なので依頼を受けてもらえること事態が稀少なのだ。古い付き合いなので優先して依頼をこなしてくれるが、甘えすぎるのもよくないのである。人付き合いのコツは、あまり親しくなり過ぎないで淡泊な関係を維持することだと彼は考えていた。

MWOではキャラクターのジョブとして 戦闘職 と 生産職 の2つを設定することができる。レベルが上がると上級職にジョブチェンジできる戦闘職とは違い、生産職は熟練度をあげてもジョブチェンジすることはできないが、生産職の熟練度のあげにくさは折り紙つきで、彼がゲームを始める前から 刻印術士 一筋に打ち込んでいるというその知り合いもいまだ 刻印術士 の熟練度をマスタリーするにはいたらない。MWOの熟練度設定はかなりの廃人仕様なのだ。少なくとも、彼が7年間MWOをプレイしている中で何ら

かのスキルの熟練度をマスターしたという話は聞いたことがない。

ディニンの生産職は 矢師 だ。文字通り、弓矢に使う矢を生産するだけの職である。NPC売りの和弓用の矢は性能が低いし、他の 矢師 はもっぱら洋弓用の矢しか作っていないので、自分で使う矢は自分で用意することになっているのだ。

弓の手入れを終え、 無限巾着 から木材を取り出して矢の製作を始める。しばらく作業を続けてから、以前は時間が経てば消滅していた削りくずが消滅しないことに気付き、あわててゴミ箱へと捨てる。削りくずが消えないなら宿で大量の矢を製作する事はできないので、早いところ住宅を買わなければいけないかもしれない、と彼は思った。家というのは決して安い値段では買えないが、街の防衛クエストに参加したり、近場の時間沸きbossの討伐パーティーにもぐりこめばすぐにでもお金は貯まるだろう。

矢を1本だけ作って削りくずを片付けたすぐ後に、女将が夕食ができたのでお越しください、と声をかけてきた。案内されるまま夕食場へと向かい、高級感漂う座敷へと座る。座ってからしばらくして、膳が運ばれてきた。いただきますと小声で呟いて箸を取る。焼き魚をはじめとして海産物が多く、白米や酒も美味だった。彼としてはまだここがMWOの世界だと認める気にはならないが、少なくともこんな美食が楽しめるならこういう状況も悪くはないかもしれない、とふと思う。

養ってくれる兄や面倒を見てくれる兄嫁には悪いが、現実世界での唯一の楽しみといえばMWOだったのだ。たとえ現実世界に戻れなくなろうとも、MWOを楽しめるならばそれでいい。ここでは弓も引けるし、7年の廃人生活によって手に入れた技量と能力を駆使

すれば富も名声も思うがままだろう。他の何人かの廃人もきつと同じことを考えているんだろうな、と思いつつも、彼はわくわくする気持ちを抑えきれなかった。

彼の力が他のプレイヤー達から一歩抜きん出ている、というわけではない。狙撃や 釣り に関しては他のプレイヤーの追隨を許さないほどの技量を持っていると自負しているが、他のプレイヤーの追隨を許さないというよりはむしろ、他のプレイヤーがそんなことには興味を持っていないというほうが正確なのだ。彼のスタイルではソロでの経験値効率が非常に悪いし、HPもDEFもほとんど上げていないので魔法職並みの紙装甲だ。パーティプレイでも経験値は与ダメージに左右されるので、ソロよりは効率はいいもののやはりレベルアップのペースはかなり遅い。通常のプレイヤーなら2〜3年でレベルカンストできるこのゲームにおいて、一日中ログインする生活を送っていないながらレベルカンストに4年もかかったのがその証拠だ。

夕食を十分に堪能し終わると、彼は部屋に帰って出かける準備をはじめた。時計を確認すると現在の時刻は午後9時をちよつとすぎたところだったので、歩いていけば少し早いけどギルドホールには着くだろう、と考えたのだ。初めから街の中にいたプレイヤーも来るかも知れないし、それなら知り合いも何人か見つけれられるだろうと思って早めに行くことにした。

夜のマツマエは寒い。防御性は低いものの防寒の効果があるコートを羽織って、和洋の建物が混在した独特の町並みをギルドホールに向かって歩く。すると、その道中で偶然にも知り合いに声をかけられ、驚きながら振り返った。

「やあディニン、君もギルドホールに？」

彼に声をかけてきたのは、彼の古い知り合いで一流の 刻印術士として有名なリリヤだ。アバターはハイエルフの女性で、外部の外見設定ツールで作りこまれた北欧風美少女（本人談）の可愛らしい外見でも有名な職人だ。陶器のような、色白ながらもそれでいて青白さがなく肌と、淡いプラチナブロンドの髪が一部の人間にはかなり人気がある。言葉遣いや会話からも本人の性別は長いこと分かっていなかったのだが、今の声を聞くに女の子だったのだろう。ネカマと呼ばれる人種が多いMWOにおいて、女性の廃人というのは珍しい。それも、飛びつきりのマゾ職だといわれている生産系の廃人などはほとんどみかけないので、彼は非常に驚いていた。

「ああ、僕もとりのあえずはあそこに行こうと思ってるけど……やっぱりタフだね、君は」

こんな状況になっても明るい顔をしている彼女に、ディニンは呆れたかのようにそういった。彼だって人のことはいえた義理ではないが、少なくともリアルで学生をやっているなら現実世界にもしがらみは多いだろうに、と思ったのだ。彼のように高校を中退した二トには現実への未練などありっこないが、女子大生というのはもっと華やかで充実したものであるべきだと彼は考えていた。

「そうかい？ ゲームの中に集団で転移するなんて、まるで一昔前に流行った小説みたいで心が躍るじゃないか。そもそも、中学に入ってからずっとネトゲ漬けなんだ、現実から逃避したい理由だってあるに決まってるさ」

「まあ、僕だっていわれてみればそうかもしれないけど。そういえば、スキルは使えるみたいだけどもう試した？」

彼にとって現実世界の話題はあまり好ましいものではなかったの
で、強引に話題を変える。

「うん、生産スキルなら問題なく使えたよ。システムアシストはな
いけど、ルーンの一覧表を見ながら金属板に刻んでみたら問題なく
作動したから、むしろ自由度が広がったんじゃないかな？ 当面は
前みたいに滑らかな動きができるようにならないといけないけど、
それができるようになれば今度は新しいルーンの組み合わせを作っ
たり、今までルーンを書けなかったものにもルーンを書けるかもし
れない」

刻印術士 というのは、既存の装備品や一部のアイテムにルー
ンを書き込むことで様々な恩恵を付加する生産職だ。生産職にして
は珍しく材料費がいらないので、熟練度を上げればボロ儲けできる
のだとリリヤは言っていた。熟練度の上がりづらさと作業の地味さ
から人気がない職業なので、リリヤのように高い熟練度のプレイヤー
は数が少なく、それでいてデメリットなしに装備を強化できるの
でマツマエのような廃人の街では引っぱりだこだ。

彼らは一体全体何が起こってるのだろうかと話し込みながら、マ
ツマエ中央街のギルドホールへと向かう。

プレイヤー用の銀行と掲示板、それとモンスターの素材の換金所
が設置されているギルドホールは、大手ギルドの集会やプレイヤー
同士での待ち合わせなどにも使われていた。移動門 と呼ばれる、
大都市同士をつなぐワープ装置が設置してあることもあって、だい
たい200人は収容できるのではないか、というほどに広い場所だ。

「まだ30分前なのになかなり混んでるなあ……」

「そうだね、いくら夏休みでもログインしていたのはせいぜい2万人。このチャンネルのマツマエ近郊に限れば500人もいないはずなのに、もうギルドホールからは人が溢れてる。後ろからもプレイヤーが押しかけてることを考えると、明らかに異常だ」

ギルドホールが見える通りに出たディニンがギルドホールの様子を確認すると、ホールからは既に人が溢れている様子だった。思わず呟いた一言に対して、リリヤも同じことを思ったようだった。

「お集まりいただいた皆さん、よく聞いてください！ 我々の予想以上に集まった人数が多いようなので、集会は街の門の外で行います！ 繰り返しします、集会は門の外で行います！」

ギルドホール周辺について5分ほど経つと、ギルドホールの中からパートレム氏が出てきてそう叫んだ。

彼らは顔を見合わせ、おとなしく門の外に出ることにした。ギルドホール周辺に集まった100人超のプレイヤーはいつせいに門を目指し、途中ですれ違うプレイヤーもその群衆に加わり、門に着くころには集団は500人はいるのではないか、というほどに膨れ上がっていた。シュラーゲンが門のNPCを説得したらしく（以前はそんな仕様はなかったが）、プレイヤーはチェックなしに外に出ることができた。

外に出て、シュラーゲンの面々が用意している木製の演台の傍に彼らは並んで立った。他の知り合いを探そうとしたのだが、現実世界の通勤ラッシュを髣髴とさせる人の波に押し流され、はぐれないようにするので精一杯だったのだ。彼としてはいくら現実世

界に未練がないとはいえ、少しでも知っている人間と一緒に居るほうが心強い。

ほとんどのプレイヤーが外に出てしばらくすると、パートレム氏が演台に上がってきた。手にはなにやら紙の束を持っている。

「ご静粛に、ご静粛に！ お集まりいただいたプレイヤーの皆さん、はじめまして。私はギルド シュラーゲンのサブマスター、パートレムと申します」

パートレム氏がそう叫ぶと、プレイヤーたちの喧騒はだいぶ収まった。それでもざわめきやひそひそ声は絶えないが、パートレム氏の大声は問題なく聞こえる。

「この奇妙な事態がおきてから、既に6時間が経ちました！ この事態が運営によるイベントではなく、なんらかの事故であるというのは既に自明であります！」

ざわめきもだんだんと収まっていき、プレイヤーたちは固唾を呑んでパートレム氏の言葉に聞き入る。

「現在判明しているのはここが現実世界と同じようにリアルな世界であり、我々も現実世界と同じように尿意を催したり、食欲がわいたり、痛みや快感を感じるということです！ 我々のうちにはまだ食事を取ってない方もいるでしょうが、いずれそういった方々も空腹を感じて食事をする必要に迫られるでしょう！ 要するに、今現在私たちプレイヤーは、この世界に生きているのです！」

芝居がかった口調でパートレム氏が叫ぶ。プレイヤーたちは不安げな顔でパートレム氏を見つめるばかりだ。

「何が起こっているのかは知りませんし、恐らく知っているプレイヤーはいないでしょう。ですが、私たちが今この世界に生きていて、食べたり飲んだりする必要があるということだけは確かです！つまり、現在の状況を要約すると――私たちは、MWOの世界にやってきたんだと考えるのが正解なのです！」

彼にとつては、ある程度予期していたことなのでそれほど衝撃的な内容でもなかった。彼が隣のリリヤを見ると、彼女は肩をすくめて言った。

「リアルなんてどうでもいい人間に言わせれば、楽しいゲームがよリリアルになったってことでいいこと尽くめじゃないか。少なくとも、こつちでは金持ちでいられるんだから」

「まあ、ログアウトできてもMWO潰れだから別にいいんだけどね。とりあえず、手持ちのいらない素材を全部換金して来るかな」

周囲のプレイヤーたちは絶望したかのようにがっくりと膝を突くもの、ヒステリックに運営を罵るもの、お祭り気分で楽しそうな顔をしているものなど様々だ。廃人が多いマツマエだからこそ明るい顔のプレイヤーも多いのだろうが、初心者が多いキョートや中級者の街であるエドはもつと悲惨な顔をしたプレイヤーが多いのだろうか、などと考える。

「先程、我々の仲間がモンスターの討伐に行ってきました！ わかった事を報告いたしますと、どうやらモンスターとのバトルは従来どおり行えるようです！ ただし、メニュー画面から使用していたスキルは初動を自分でトレースすると使えるようになっており、モンスターも倒しただけでは素材は手に入らず、解体する必要がある

ようです！ 今のところ死んだらどうなるかは分かっていませんが、今後狩りを行う場合は従来よりマージンを取ったほうがいいでしょう」

パートレム氏続ける。

「皆さんもある程度は貯金があるでしょうが、しかしいつかはそれも底をつくでしょうし、防衛クエストが発生するかも知れないということを考えると、戦闘には慣れておいたほうがいいでしょう！ そういうわけで、これで私ども シュラーゲン からの報告を終わりたいと思います」

そういつて、パートレムは演台を降りた。

「戦闘に慣れておく、っていうのは悪い考えじゃないな。死んだら怖いから、知り合いを何人か探して一緒に狩りをしようと思う」

門を抜け、街へ戻ってからディニンはリリヤに話しかけた。

「そうだね、僕も久々に狩りにでも行くかな……知り合いを見つけ、声をかけておくから、明後日の朝9時に工房に来てくれる？」

生産系のプレイヤー、それも売れっ子の 刻印術士 ともなれば顔は広い。メンバー集めは彼女に任せて、彼は帰って寝ることにした。明後日の狩りのために矢も余分に用意しておきたいし、今日は色々なことがありすぎて疲れたのだ。

「わかった。じゃあ、また明後日」

「またね」

彼はそう言っ、旅館の前でリリヤと別れる。彼女の淡いプラチナブロンドの髪から漂う、なんとも言えないいい匂いを楽しめなくなるのは残念だったが、夜のマツマエは寒いのでさっさと旅館に入り、旅館の中にあるという温泉に入った。

異世界の温泉は中々に気持ちよく、露天風呂から眺める三日月は最高だった。外は寒かったが、だからこそ少し熱めの露天風呂はたまらなかった。風呂上りに鏡で見た、エルフのAvatarは中々にイケメンで身長も高く、いつそもとの世界に戻りたくはないな、などと思ってしまった。

結局その日は部屋に帰ってしいてあった布団にもぐりこみ、歯も磨かずに寝てしまったのだった。

2話（前書き）

設定語り多くてすみません。次の話からは設定語りも減るとおもいます。

2話

この世界に来てから3日目の朝、彼はリリヤの工房へと向かって
いた。

昨日はもっぱら情報収集に専念し、いくつかの重要な情報を集めてきたが、今日はこの世界に来てから初めての実戦の日だ。リリヤの集めたパーティメンバーはまだ知らされていないが、普段からマナーのなっていないプレイヤー相手には商売をしないという彼女なら、信頼できるメンバーを集めてくれているだろう。

昨日集めた情報の中でもっとも重要かつ衝撃的だったのは、この世界でも 大侵攻 と呼ばれる現象が存在する、ということだった。MWOにおいて 大侵攻 とは要するに大規模戦闘クエストのきっかけとなる一種のイベントフラグで、1〜3ヶ月の周期でランダムに発生していた。このフラグが発生すると、街の外に発生したモンスターが大挙して街を攻めてきて、6時間ほど連続でプレイヤーが街を防衛する、通称 防衛クエスト が発生する。 防衛クエスト では街の中にモンスターの進入を許すと武器屋や防具屋が使えなくなったり、ギルドホールが破壊されてモンスターの素材が換金できなくなったりとリスクが大きいので、プレイヤーたちは必死に街の防壁の外でモンスターを屠り続けるのだ。もちろん、普段よりは若干弱めのモンスターが恐ろしい速度で沸き続けるので、廃人たちにとってはとても美味しいイベントだと認識されている。彼もまた、防衛クエスト ではさんざん経験値を稼いでいた。敵軍の指揮官や 防衛クエスト でしか沸かない魔術師系・僧侶系のモンスターを倒すと、莫大な経験値がもらえるのだ。狙撃に特化した彼は、安全な物見矢倉から狙撃で経験値を稼ぐのが常だった。

彼がリリヤの工房に着き、ドアベルを鳴らすとしばらくしてドア

が開いた。ドアを開けたリリヤ曰く、彼以外のプレイヤーはもう来ているらしい。どうやら、時間ぎりぎりに来たのがまずかったようだ。

「どうも、遅れてすみません」

地下の工房に入った瞬間、6人のプレイヤーが一斉に視線を向けてきたので、丁寧に挨拶をする。初対面での挨拶が大事、というのはVRMMOでは常識だった。

「じゃあ、メンバーはそろったことだし、改めて自己紹介をおねがい」

リリヤがそう言うと、リリヤを除く6人のプレイヤーはそれぞれ自己紹介をした。

「はじめまして、 剣客 のアキヤマです。 種族は人間、ステはSTR - AGI型です」

着流し姿の、20代後半くらいの大柄な若者だ。 剣客 は全ジョブ中屈指の 刀 スキルの伸びを誇り、ステータスの伸びやスキルの種類がいまいちなかわりに、圧倒的な剣技を誇る、クセの強いダメージディーラーだ。

「どうも、 テンプルナイト のモンジャです。 人間種族で、HPとDEFメインに振ってます」

中肉中背の、白銀の騎士甲冑に身を固めた若い男だ。 テンプルナイト は壁職のうちでもっとも過酷な職として知られているが、固有スキル リジエネーション を使いこなせば頼もしい壁役と

なる。

「アストロマンサーのグスタフです。ハイエルフで、INT極振りです」

線の細い、見た目十代後半くらいのプレイヤーだ。アストロマンサーは少々変わったタイプの魔術職で、従来の一般的な魔法スキルが伸びにくい代わりに、ジョブ固有の魔法である占星術を扱える。占星術は詠唱がトップクラスに長く、また消費MPも馬鹿みたいに多いが、その分威力は高く攻撃範囲も広い。

「ダークプリーストのアンドウです。人間です。こっちのスズキとは古い付き合いです」

小柄だががっしりとした体格の、20代前半ほどの男がそう言った。ダークプリーストは通常の回復魔法に「敵からHPを吸い取る」という特性を付与できる、攻撃と回復を同時に行える職業だ。

「ダークナイトのスズキです。ノスフェラトウで、VIT・DEF型です。アンドウともどもよろしくおねがいします」

長身で黒い甲冑に身を包んだ男が自己紹介した。兜のおかげで声がかくぐもってわかりづらいが、どうも女性の声に聞こえる。ダークナイトはテンプルナイトと同じく壁職の1つで、範囲攻撃で敵のターゲットを取ることに秀でている。敵からHPを吸い取る固有スキルをもっているので、VIT重視の育成をするプレイヤーが多い。

「ルーンフェンサーのミーナです。種族はエルフ、ステ振りはAGI・STR型です。よろしくおねがいします」

何度かリリヤと一緒にいるのを見たことのある女性プレイヤーが挨拶をした。小柄だが眼光鋭く、白の軍服を着てサーベルを佩いている。ルーンフェンサーは素早さ重視の魔法剣士で、剣技スキルと魔法スキルの両方に成長補正があるが、ステータスは低い。

「レンジャーのディニンです。種族はエルフ、得物は長弓です。よろしくおねがいします」

彼が最後に自己紹介をした。得物は長弓、といった瞬間に集まったプレイヤーたちはものめずらしげな目をしたが、特に追求したりはしなかった。MWOではネタに走ったキャラクターやどうでもいようなことにこだわったプレイスタイルのプレイヤーも多数存在するので、マイナーな武器を担いでるくらいではそれほどめだたないのだ。

「一応、ここにいるみんなはそれなりに強くて信用が置けるから、安心してくれていいよ。じゃあ、今日はマツマエ平原で一日狩りしようと思う。門の近くに弁当を売ってるNPCがいるって聞いたから、お昼ご飯はそこで買おう」

リリヤがそう言うと、集まったプレイヤー達は皆頷いた。

「正直戦力を用意しすぎたかなとも思ったけど、死んだらどうなるかはまだわかってないんだし、今日はマツマエ平原以北にはいかないうちにしようと思う。で、狩りでのロールとしては、壁役がモンジャさんとスズキさん、ダメージディーラーがアキヤマさんとミーナ、補助と囲まれたときの殲滅がグスタフさん、釣りと索敵がディニン君で回復がアンドウさん。それでいいかな？」

リリヤが確認し、集まった面々は同意した。ディニンも特に異論はないので頷いておく。

「じゃあ、出発しようか。各自スキルの使い方はわかってるよね？」

最終確認を済ませ、一行はリリヤを先頭に工房から出た。ミーナがリリヤの横を歩き、男性プレイヤーはその後ろをぞろぞろと付いていく。こんな大人数で移動すれば目立つかも知れないとディニンは思っていたが、同じことを考えたプレイヤーは多いらしく、ほかのプレイヤーパーティが門を目指して歩いているのをそれなりに見かけた。

「そういえば、皆さんはもう 色街 の噂聞きました？」

ネトゲ廃人らしく装備やスキル、ステータス育成について語り合いながら歩いていたとき、突然グスタフがそんなことを言った。

「色街？ 確か、存在するけど入れない施設だったんじゃないの？」

先頭を歩いていたリリヤが、興味津々といった様子で振り返って聞きただした。ディニンは、またリリヤの悪い癖が出たか、と心の中のため息をつく。彼がリリヤのことをネカマだと思っていた理由のひとつは、リリヤが性的な話に人一倍興味を示すからだだった。女性といえば兄の嫁くらいしか接点がない彼にとって、下ネタが好きな女性というのはどうにも想像しがたい生物だったのだ。

「友人が昨日見てきたんですけどね、どうやらプレイヤーも利用可能になっているようです。ついに童貞を卒業できた、って喜んでましたよ」

ハイエルフの美少年アバターが童貞云々などと発言するのは、特殊な性癖を持った人なら興奮することこの上なしだった。それはともかく、ネトゲ廃人というのはそのほとんどが童貞である。当然、彼らの食いつきは凄まじかった。

「マジか！ ちょっと行ってくる！」

ダークプリーストのアンドウがそう叫んで駆け出そうとする。が、相方のスズキに股間を蹴り上げられ、うめき声を上げてその場にうずくまった。男性プレイヤーは気の毒そうな目で彼を見つめ、リリヤは面白がるような目を、ミーナは絶対零度の目をアンドウに向けた。

「へえ、面白そう。女の子でも入れると思う、ミーナ？」

「常識的に考えて無理でしょ、リリヤ。少し頭冷やそうか？」

無邪気に笑ってそんなことを訊くリリヤに、呆れた表情でミーナが返す。

「冗談だつて。まったく、そんなだからいつまでたっても彼氏の一人もできないんだよ？」

クスクスと笑うリリヤに、真っ赤になって詰め寄るミーナ。他の面々は、美少女が顔を近づけている様を見て、これはけしからんぞと思い、じっと2人を凝視していた。

ミーナをからかいながら愉快そうに笑うリリヤ、色街についての情報交換で盛り上がる男性プレイヤーとそれを冷たい目で見るスズ

キ——非現実的な事態に巻き込まれているにもかかわらず、彼らは
明るかった。

やがて門に着き、門番に手続きを取って門の外へとでる。途中で
買った弁当は各自 無限巾着 に収納し、それぞれが自分の得物を
手に取っていた。魔法職の面々は唇を湿らせ、ふところから呪文集
を取り出して暗記できているかチェックする。呪文集は呪文を覚え
ることに自動で詠唱が記される便利なアイテムだが、これを手にと
っている状態では呪文は発動しないのだ。魔法を発動させるには、
呪文集をしまつて呪文を唱えなければいけない。

門の外はプレイヤーで溢れていた。これがほかの街ならこうはい
かなかっただろうが、しかしマツマエは廃人の街だ。ニートとフリ
ーターがプレイ人口の八割を占めるといわさされるマツマエには、
ゲームの世界に來たことを怖がるような人間はほとんどいなかった。

「やっぱり混んでるかー。ディニン、どっちのほう为空いてる？」

リリヤがディニンに問いかけてくる。彼は 千里眼 を発動させ、
半径5kmほどを見回し、どこが空いているのかを見極めようとし
た。以前まで、フィールドはいくつかのエリアに区切られ、エリア
の境界には光の壁が設置されていてその向こうに干渉することはで
きなかった。だが、今では光の壁は存在せず、その向こう側を見渡
すこともできるようになっている。

「西部の丘の方は人がいないみたいだ」

「おけー、じゃあそっちへ行こう。先導お願い」

「了解」

ナイトメアを召喚し、騎乗して周囲を警戒しながらパーティを先導する。 レンジャー は戦闘能力こそ高くないものの、固有スキルの 気配察知 によって斥候としての能力には優れている。ソロでプレイすることも多かったディニンの 気配察知 スキルはそれなりに高く、半径1km以内なら目を向けなくても敵がどこにいるのかを把握できた。

ゆっくりと馬を進めさせ、 千里眼 で 気配察知 の範囲外の敵を探る。

15分ほど歩いていると、ようやくプレイヤーたちの姿を見ないようになり、モンスターを遠くに視認できた。

「しかし、前と比べて沸きが以上に少ないな。何が起きてるんだ？」

ディニンのすぐ後ろを歩いていたミーナが、ふと漏らした。

「エリアとエリアを区切る壁もないし、やはり以前とは仕様が違うのか。まあ、安全性が高いという点では悪いことではないが、しかし沸きが少ないのはゲーマーとしては不満を感じるな」

ぶつぶつと独り言を言うミーナと、それを聞いて考え込む一行。

「とりあえず、青鬼が遠くにいるみたいだ。釣つとく？」

ああでもないこうでもない議論を始めた一行に、ディニンは尋ねた。700mほど先でうろついている青鬼は、この一行なら楽に倒せるモンスターだ。いきなり襲い掛かってきても撃退できるだろうが、彼ははじめての狩りなら安全性を重視すべきだと考えてい

た。

「おお、やつとですか。僕は大丈夫ですけど、皆さんはどうですか？」
ハイエルフの美少年アバターが、杖を握りなおしてそう言った。補助魔法を使えるので、それを使うつもりだ。少なくとも、アストロマンサーの占星術は詠唱に4〜5分はかかるので、たかが1体の雑魚モンスターに使うことはない。

一行は口々に賛同したので、ディニンはナイトメアから降り、背負っていた弓を構える。

弓を使う上で、レンジャーとアーチャーはチャージと速射の2つの固有スキルから1つを選ぶことを強制される。チャージは長弓向きのスキルで、弓を構えてじっと力をためることで、力をためた分だけ射程と威力を伸ばすスキルだ。ためられる時間は最大で1分、スキルの再使用には3分が必要になる。速射は短弓向きのスキルで、スキルレベルに応じて一度に複数本の矢を放てるようになるスキルだ。

ディニンは当然チャージを選択している。8尺5寸の大弓を構えた彼は、チャージを発動させ、青鬼を狙い始める。

一行はいい意味での緊張感に包まれ、ディニンの射を見守る。MWOにおいてスキルレベルを一定以上まで上げれば現実世界の達人など足元にも及ばないほどに美しい武芸を習得できるのは有名な話だが、その例に漏れずディニンが弓を射る姿も凜として惹きつけられるものがあつた。

当のディニンといえば、心の中で歓喜に打ち震えていた。

以前はいかにリアルに迫っていても所詮は仮想現実、現実で引く弓に比べれば機械的でまったく味わいがなかったのだが――今彼は、現実で弓を引いたときと同じ感覚を味わっていた。木でできた弓がしなり、握りからは弓の息遣いを感じられる。

かつてないほどの高揚感に包まれながら、ディニンは青鬼に狙いをつけ、剣尻形の甲矢を射た。

放たれた矢は音速を超えて青鬼に迫り、その腹を射抜いた。すると、青鬼は衝撃で後ろに倒れる。

起き上がった青鬼は怒りに吼え、腹から飛び出した矢を引っつかみ、一気に抜く。ディニンが、そんな行動はAIには登録されてなかったはずだと首をかしげたその瞬間、青鬼の腹から勢いよく血しぶきが飛び出した。

「なるほどなるほど、これはリアルだ」

青鬼が矢を引き抜き、怒り狂ってこちらに突撃してくるさまを見て、ディニンが笑いながらつぶやいた。かつてないほどリアルに弓を引けた彼は、その高揚感からグロテスクな血しぶきを見ても平然と笑っている。

「皆、どうやら今の仕様だと斬ったら血が出るみたいだ。気分を悪くしないように」

ディニンが乙矢を番えながら皆に警告した。すると、何がおかしいのかリリヤがクスクスと笑う。

「どうしたの、リリヤ？」

「いや、アレだよアレ。斬ったら血が出るって言ったら、転生イベの『殺す覚悟』を思い出しちゃって」

リリヤが笑いながらそう言うと、武器を構え、呪文を唱え始めていた一行は一様に皆噴出した。ディニンもまた、愉快すぎる思い出を思い出し、頬が緩む。

「漆黒の断罪者」ギルガメッシュ・スメラギ・ローゼンバーク……」

黒い甲冑に身を包み、大剣を鞘から抜いたスズキがぼそりとつぶやく。すると、皆こらえきれなくなっただけで笑いだした。

「カノッサ機関、魔眼の使徒」

ミーナがつぶやき、皆はさらに大爆笑する。

一行が血を流しながら迫り来る青鬼の前にゲラゲラと笑っているのは、上級職にランクアップする際に登場するNPC、「漆黒の断罪者」ギルガメッシュ・スメラギ・フォン・ド・ローゼンバークの痛々しい言動を思い出してのことだ。

運営が遊び心だけで作った「漆黒の断罪者」ギルガメッシュ・スメラギ・フォン・ド・ローゼンバークは、夕日を浴びると虹色に光る銀髪に金と銀のオッドアイ、背中には黒と白の2枚の羽を生やし、カノッサ機関のエージェントを名乗るNPCだ。その数々の迷言から、某掲示板では凄まじい人気を誇るNPCである。

「殺す覚悟」とは、漆黒の断罪者「ギルガメッシュ・スメラギ・フォン・ド・ローゼンバーク」がプレイヤーたちに向かって一方的に説教をするという謎イベントの最中に使われた、彼の代名詞ともいえる言葉だ。

げらげらと腹を抱えて爆笑するプレイヤーたちに、憤怒に駆られた青鬼が突進する。もはや 千里眼 を使用しなくても十分に視認できる距離であり、さすがに一行も笑うのを控えて迎撃の準備をした。

ディニンはもう一矢を射て、後方へと引き下がる。接近されれば自分は一撃死するだろうし、さすがに死ぬのはごめんだった。以前と同じ仕様なら死んでも神殿で生き返るのだが、今は死んだらそのまま生き返れない可能性もあるのだ。

ディニンが引き下がると、 テンプルナイト のモンジャとダークナイト のスズキが鬼の眼前へ進み出る。

3mを超える巨躯の青鬼が、右手に持った棍棒を振り下ろす。風を切って真上から振り下ろされた棍棒はしかし、スズキの掲げた大剣によって止められる。両者の腕力は一瞬だけ拮抗し、すぐにスズキが青鬼の棍棒を弾き飛ばした。盾を用いない壁職が好んで用いるパライ スキルだ。

棍棒をはじかれた青鬼は、体勢を立て直すと再びスズキに向かって棍棒を振り下ろす。が、今度は テンプルナイト のモンジャが籠手はめた両腕を十字にして棍棒を受け止めた。

棍棒を受け止めたモンジャはダメージを受け、痛みに顔をしかめる。しかし テンプルナイト の固有スキルである リジエネーション によって、たちまち傷は癒えた。

着流し姿の 剣客 アキヤマが長刀の柄に手をかけて進み出たのを見て、魔法職の面々は今回は出番がなさそうだと肩をすくめ、杖

をおろした。

アキヤマが進み出てきたのを横目で確認したモンジャは、受け止めていた棍棒を押し返し、バックステップですばやく離脱する。

青鬼は今度こそ生意気な人間をたたき殺そうと、棍棒を振り上げ――そして、絶命した。目にも留まらぬ速さで抜かれた長刀が、青鬼の首を飛ばしたのだ。

首から血を噴き出して、青鬼の巨体が倒れる。アキヤマはそれを見ながら平然と血振りを済ませ、長刀を鞘に納めた。

パーティの面々は血だまりに倒れる青鬼を見ても特に顔色を変えず、これでは素材の剥ぎ取りが面倒くさいなあ、などと愚痴を言っていた。

「しかしアキヤマさんすごいっすね。居合い スキルどのくらいですか？」

アストロマンサー のグスタフが、杖で青鬼の死体をつつきながら言った。

「 剣術 スキルが261、 居合い は185だよ。しかし、前までとはどうにも斬った感触が違うわ。手ごたえがあってちょうどいい感じ」

アキヤマが答えた。斬った感触を確かめるかのように、楽しそうな微笑を浮かべながら手を握ったり開いたりしている。

「しかし、本当にリアルだな。血は本物らしいし、骨も見える」

首の断面をしげしげと眺めて、ミーナが言った。

小柄な女の子がしげしげと怪物の死体を眺めているさまはどこか狂気を感じさせるが、一行は特に何も思わなかった。VRシステムが一般化され、18歳以下お断りなホラー系のコンテンツでは、五感をフルに使ったVRシステムによって心臓麻痺で死亡する利用者が大勢出ている。現代の若者はそのほとんどが怖いもの見たさにVRのホラーコンテンツにチャレンジした経験があるので、VRMMOのユーザーはグロには耐性があるのだ。いまさら死体の一つや二つで騒ぐ人間はいないだろう、と皆は思っていたのだった。

3話（前書き）

ポイントが予想以上に増えててビビりました。お気に入り登録してくれた人に悪いんで更新のペースを速めることにします。

3話

一日の狩りを終えた一行は、意気揚々と街へと帰る途中だった。モンスター素材の剥ぎ取りに関して水魔法で血を洗い流してから狩猟用のナイフで行うのが効率がいい、という結論が出た。慣れない作業には皆戸惑ったが、今日一日狩りと剥ぎ取りを続けたことでそれなりに手際はよくなっていた。

ディニンは馬上でうつとりと弓を抱きかかえ、肌触りのいい弓の表面を撫でて目を細めていた。

この世界は実に素晴らしい。本物の弓を引くことなど当にあきらめていた彼だが、思いがけずこうして弓を引くことができ、ここ数年でもっとも幸福な気持ちだった。弦を鳴らしてうつとりと音に聞き入り、弓を撫で回す。現実でもよく弓を撫でて気を紛らわすことはあったが、弓が引けるという実感をかみ締めながら弓を撫で回すのとはまったくベクトルの違う行為だな、と彼は頭の片隅で考えた。

一行はそんな彼にドン引きしている——わけもなく、普通におしやべりを楽しんでいた。

何せ彼らは皆廃人。マツマエの街にはパンツ一丁で街を走り回るガチムチな筋肉ダルマや、男の老ドワーフにゴスロイドレスを着せて楽しむような連中だっているのだ。それに比べれば美青年エルフが弓を撫でてうつとりしているくらい、どうってことはなかった。

「しかし、本当にここはMWOの世界なんですかねえ」

アストロマンサーのグスタフが、しみじみとつぶやいた。

「ん？ここがリアルじゃまずいこともあるんですか？」

弓を撫で回していたディニンは隣を歩いていたグスタフのつぶやきに耳を止め、訊いた。

「いえ、個人的には大歓迎なんですが。ここは衛生環境もいいし、最初から金持ちだから生活もあつちよりはよほどいい。底辺高校のクズ学生でしたから、エリートでいられるこの世界は非常に居心地がよさそうです」

でも、と彼は続けた。

「ずいぶん昔に流行った小説とかでは、ゲームの世界にトリップしたら自治組織が云々、っていうのが定番じゃないですか？ 僕はそれが嫌なんですよね」

「ん、治安がよくなるなら別にいいんじゃない？」

「確かに治安はよくなるのかもしれませんが。でも、忘れてませんか？ 公式設定だと、ここはトウキョウ幕府の治める街で、れっきとした藩主もいる封建制度の敷かれた街なんですよ。そこに日本人を、しかも力を持った日本人を放り込んだらどうなるか、わかりますよね？」

グスタフがつらつらと推測を語るうちに、一行は彼の話に聞き入っていた。

「公武合体運動が成功して、和洋折衷を方針に発展した明治時代に魔法の要素を足したものの、というのがこのゲームの舞台設定でした。冒険者は政府直属の開拓者という位置づけで、魔物に占拠されたエゾ島を取り戻すのがMWOのグランド・クエストだったはずですよ。」

そんな世界で、僕たちプレイヤーがマツマエを占拠して民主制を敷いたら——トウキョウ幕府との戦争になることは間違いありませんね。建国したばかりの国ですから、内乱で土地を奪われたなどあっては大いに面目を失うはず。幕府は躍起になって戦争を仕掛けてくるでしょう」

ハイエルフの美少年が語る未来予想図に、皆はつばを飲んで聞き入っていた。

「確かに、我々プレイヤーのポテンシャルをもつてすればトウキョウ幕府との戦いには勝てるかもしれませんが。しかし、幕府を倒してしまえば、欧米列強が進軍してくることは間違いありません——ですから、プレイヤーが自治組織を起こすのはかなり危険です」

「君、本当に底辺高校生？ 実はエリートなんじゃない？」

リリヤが真顔で尋ねた。

「いえ、正真正銘底辺校ですよ。それはともかく、それでも自治組織を起こそうとする動きは起こるはずですよ。もちろん、僕と同じことを考えてそういう人たちをいさめるプレイヤーもいるでしょうが、皆さんは、街の路地裏は見ました？」

グスタフが、急に問いかけてきた。皆は突然の問いかけに戸惑い、互いに顔を見合わせた。比較的落ち着いた聞いていたディニンが代表して答える。

「いや、見てないけど」

「一回見てみると世界が変わりますよ。老若男女の死体がそこらじ

ゆうに転がってましたし、歴史の教科書にしか載ってないような『飢えた孤児たち』がわんさかいました。街の決まりで孤児は路地裏から出てはいけないそうで、疫病の蔓延した路地裏はがりがりに瘦せた子供で溢れてましたよ。あれを見て改革を志さない日本人はいないでしょうね」

本当にひどい有様でした、とため息をつくグスタフ。

「まあ、そんなわけで僕は憂鬱になっています。孤児たちのいる路地裏に立ち入ることは許されていないそうですから、僧侶系ジヨブのプレイヤーが彼らを癒すことは難しいでしょう。というかそもそも、マツマエは食料が足りてないらしいので彼らの腹を満たすのは難しいでしょうね。根本的に街の仕組みを変えないと孤児を救うことはできないでしょうが、さっき言ったようにそれも不可能に近いです。どうしようもないですね」

嘆息するグスタフと、救いのない話に黙り込む一同。重苦しい沈黙が場を支配した。

皆一様に難しい顔をして街へと歩き続ける。グスタフの言ったことを真剣に考えるものもいれば、それが自分の生活にどういう影響を及ぼすかを考える者もいた。

ディニンは後者だ。彼は弓が引けて生活が保障され、旨いものが食べられればそれで言うことはない。彼にとっては赤の他人がどうなるうが、そんなことより弓の弦の具合のほうが重要だ。しかし、もしもプレイヤーたちが自治組織を起こし戦争を始めるようなことがあれば面倒くさいことになる。と彼は考えていた。

彼には知識はない。高校を中退したため、日本史の知識など忘却のかなただ。ペリーが来航したのは江戸時代だったか明治時代だったか、そんなことすら忘れている。弓に関する知識ならどんな人間

にも負けないと自負しているが、そんなことはこの問題において役に立たない。

彼には思考力がない。偏差値は低くとも頭の回転が速いグスタフとは違い、彼の思考は鈍重でキレがない。一流の弓士の常として集中力は尋常ではないが、しかし思考力はない。

だから、彼は自分にできることはなにもないと結論を出し弓を撫で始めた。

ディニンが弓を撫で回し始めたのを見て、一行は苦笑する。

「まあ、一国の政治について考えるなんてネトゲ廃人にあるまじき行為ですよね」

空気を悪くしたことを気にしたグスタフが、場を和ませようとそんなことを言う。

「そうかもね。少なくとも、屑大学生が悩んだくらいでどうにかなる問題じゃあない」

リリヤがそう言って苦笑すると、一行は皆苦笑いした。廃人の街の中でもさらに廃人度の高い一行は、いずれもニートかフリーター、底辺学生なのだった。「boss狩るから仕事辞めてね」という発言には「もう辞めてますから」と答えるのが、マツマエのプレイヤーたちである。

一転して和やかな空気で談笑しながら、一行は街へと向かう。既に日は暮れていて、グスタフが杖の先に灯した魔法の明かりによつ

て一行は歩いていった。マツマエの街には電気はないので夜の闇の中では見えないが、ディニンの千里眼 スキルは暗視もできる仕様になっている。ほかのプレイヤーたちはそのほとんどが日暮れ前に帰ったが、一行はディニンのスキルのおかげで日が暮れても狩りを続けることができたのだ。

門に到着すると、門番が申し訳程度のかがり火を焚いていた。そんなに小さい火なら焚く意味ないだろ、と一行は心の中で突っ込む。門を抜けたところで一行は解散し、明日の同じ時間に狩りをすることを約束してから各自は帰途に着いた。

ディニンとミーナはリリヤの家と一緒に夕食をとらないかと誘われたので、夜のマツマエを3人で歩く。月明かりを頼りに和洋の建物が混在した街を歩いていると、3人は不思議と心が落ち着いていた。現実世界の日本では、どんな田舎でもこれほど暗くはない。これでもかというくらい街灯が設置されている22世紀の日本では、今の3人が体験しているような夜の暗闇はとくに絶滅して久しいのだ。3人は今まで味わったこともない漆黒の闇と銀色に輝く月に言葉ではあらわせない美しさを感じていた。

ディニンの右隣を歩くりリヤは全くの無警戒だが、ミーナは若干彼のことを警戒している様子だった。女性プレイヤーというのはえてしてそういうものだ、とディニンは思っているので、特に腹を立てるようなことはない。

「しかし、マツマエは寒いね。昼はそうでもなかったけど夜は冷える。海が近いからかな」

ひゅう、と一陣の風が吹きリリヤが体を震わせて言った。

「海が近いと冷えるのか。知らなかった」

ディニンは感心したかのように呟き、空気の匂いを嗅ぐ。そう言われれば潮の匂いがするような気もした。

10分ほど歩くと3人はリリヤの家についた。リリヤの家はこじんまりとした洋館で、3人が門の前に着くと老執事が内側から門を開け恭しく礼をした。

MWOでは課金によって個人でNPCを作り、家に配置することができた。この老執事はリリヤがこだわりをもって設定したNPCで、外装のデザインは知り合いのデザイナーの卵にやらせたのだとディニンは聞いたことがあった。細い体躯と灰色の髪、右目のモノクルが渋いその執事は3人をリビングへと通し紅茶を振舞った。

「晚餐はすぐに支度します。どうか今しばらくお待ちください」

丁寧にお辞儀をして老執事は去っていった。ディニンは出された紅茶を啜り、一口サイズのクッキーを味わった。渋めに入れられた紅茶とメープル風味のクッキーは中々に美味で、上品な陶器製のティーセットが3人の目を楽しませた。

「ほんと、こつちに来てからは至れり尽くされたりだよ。家事は一切する必要がないし、出てくる料理は全部美味しいし、もう一生ここにいたいね」

上品な所作で紅茶を啜り、リリヤが言った。その様はまるで一枚の絵画のようで、ディニンは一瞬だけ見惚れてしまった。

「そうね、私もどっちかって言うて帰りたくないかも……大学は留

年の危機だったしなあ」

部屋の隅にある暖炉に椅子を向け暖まっていたミーナがぽつりと洩らした。昼間の凜とした姿はどこへやら、暖炉に手をかざして背中を丸める姿はまるでネコのようだと言った。ディニンは思った。

「ミーナ、語学はほんとだめだからねー」

リリヤがクスクスと笑う。笑われたミーナは少しだけ赤くなり、言い訳をした。

「英語なんて仮想敵国の言語じゃない。なんでやらなきゃいけないのよ」

「いや、その理屈はおかしい」

わけのわからない理屈にディニンは思わず突っ込んだ。リリヤとミーナが彼に向かって振り向き、すぐにリリヤがニヤリとする。よくぞ突っ込んだといわんばかりの笑顔だ。

「どんなに馬鹿なアメリカ人でも英語は話せるんだから、成績が悪い言い訳にはならないよ？」

リリヤが追撃をかけ、論破されたミーナはうなり声を上げて頭を抱える。その様がおかしくて、ディニンはくすりと笑いを洩らした。

「こちらが晚餐でございます。今日の献立は、帆立貝、仔牛の頬肉の煮込、ブラウンジエ風ジャガイモ、ブルーベリーパイ、冷やし力

マンベール、1853年もののシャトー・ラトゥールとなっております」

老執事がちらりと目配せすると、厨房から10人ほどのメイドが出てきて手馴れた手つきで晚餐の用意をはじめた。

晚餐の準備が済むとメイドたちは下がり、老執事も部屋を退出した。

テーブルマナーについては3人とも素人だが、幸い部屋には3人しかいないのでマナーなどは気にせずに和やかに談笑しながら晚餐を楽しんだ。先程のやり取りでミーナの警戒心も幾分かは薄まったらしく、ディニンの冗談に愉快そうに笑っていた。笑うとできるえくぼが昼間の堅苦しいイメージとギャップを感じさせ、なんとも可愛らしいとディニンは思った。

ナイフとフォークをカチャカチャと鳴らし贅沢な料理を味わう。いずれの料理も彼らが現実世界では食べたこともないような美食で、一口食べるごとに彼らは目に見えて機嫌がよくなっていった。昼間は堅い口調だったミーナも少し女の子らしい砕けた口調に変わっていたが、ディニンが考えるにそれは口当たりのいいワインが犯人だった。ミーナはアルコールになれていないようでどんどん杯を空にし、そのたびに浴びるようにワインを飲んでいった。ぶどうの芳醇な香りを楽しむためにゆっくりと口の中で転がして味わう二人とは真逆の飲み方だ。ディニンは、明日の狩りにはミーナは参加できないかもしれないと考え始めていた。

「どうする、泊まっていく?」

夕食を食べ終わり十分に歓談してから、リリヤは問いかけた。

「いや、遠慮しておくよ」

酔いつぶれてソファで寝ているミーナを横目で見て、ディニンは答えた。淡白な付き合いを好む彼は、今日はどうも親しくしすぎたなど反省していた。楽しくなかったということではないのだが、親しくなりすぎると友情は続かないものだとは彼は知っていた。特に男女の友情などはとても脆いものだから、慎重に距離を調節しなければと彼は思っている。

「じゃあ、また明日」

「うん、また明日」

挨拶をして老執事に見送られて洋館を出る。

ディニンのアバターはどうやらアルコールには強いらしく、かなり飲んだにもかかわらずほとんど酔いはなかった。それでも少し気分は高揚しているので、彼はマツマエ郊外にある弓道場へ向かうことにした。

どんな武器でも大きな街には専門の訓練施設が設置しており、和弓のための弓道場もマツマエには存在する。武器の訓練施設はいずれも 空間拡張 の魔法がかかっており外見からは想像できないほど広がった。もっともマツマエのような廃人の街では訓練施設を利用するプレイヤーはほとんどいないので、弓道場はいつもがら空きだ。

VRMMOでは従来のMMOに比べてマップの広さが尋常ではないが、しかし廃人と呼ばれる人種は例え利用しない施設であっても

正確に場所がわかるほど街の地理を熟知している。NPCの使い走りをするクエストはマツマエでもそれなりの数があったし、そういったクエストは手軽な上に報酬が結構いい。ディニンもまた街の地理は隅々まで熟知していた。

やがてディニンが弓道場の入り口にたどり着き、中に入ると――全く予想していなかったことに、弓道場には先客がいた。

「ようディニン。そろそろ来ると思っていたよ」

手にした洋弓から手を離し挨拶をしてきたのは、レンジャーでダークエルフのドリストだ。ディニンと同じレンジャーではあるが、この男は偃月刀の二刀流にこだわりを持っているらしく弓を使うディニンとは全く違うプレイスタイルのプレイヤーだった。

「ドリスト！　なんでまたこんなところに？」

ディニンは驚いて問いかける。同じレンジャーであるという親近感からか、ディニンはドリストとはそれなりに仲がよかった。それだけに、こんな夜更けに彼が弓道場にいるのが不審だったのだ。

「いやなに、メインメニューが開けなくなってからずっと知り合いに会えなくてね。ギルドのメンバーは皆ログインしてなかったし、ここで待ってればそのうちお前が来ると思ってたんだ」

ぼりぼりと頬をかいてドリストは言った。

「よかったら、明日から一緒に狩りにいかないか？　金貨に余裕はあるんだが、腕が落ちるのが心配だな」

ドリストは腰の剣帯に挿した2本の偃月刀をカチャカチャと鳴らし、好戦的な笑みを浮かべた。相変わらずこの友人は戦闘狂のようだと嘆息しつつ、ディニンはうなづいた。

「いいよ。明日はリリヤと彼女の知り合いたちと狩りに行くから、君も付いてくるといいと思う。彼女とは知り合いだろ？」

「ああ、常連さ」

偃月刀というのはそもそも中盤で手に入る武器であり、通常はドリストのような廃人が使う武器ではない。が、ドリストは偃月刀に対する並々ならぬ執着から莫大な時間と金をかけて偃月刀を強化しまくり、マツマエ近郊でも十分に通用するレベルまで攻撃力を高めていた。偃月刀の刀身にはリリヤによってみっちりとルーンを刻み込まれており、強化に使われた金属や魔力結晶の色もあいまって神秘的な美しさがある。

「それじゃあ、明日の9時にリリヤの工房に集合だから、忘れないようにな」

「了解。なんにせよ、知り合いに会えて良かったよ。ひとりだとうにも心細くていけない」

嬉しそうな顔をしてそう言ったドリストとともにディニンは宿へと帰る。ドリストの宿はディニンの宿のすぐ近くらしいので、連れ立って帰ることにしたのだ。

気付けば月は雲に隠れ、代わりに雲の合間から満天の星空が顔を出していた。現実では見ることでないような綺麗な星空にうつとりとため息をついて、2人はしみじみとした気持ちで宿へと帰っ

て
い
っ
た。

4話

第四話

巨軀の大鬼が振り下ろした大剣が青くぎらついた偃月刀に受け流され、華奢なダークエルフの操るもう1本の偃月刀が鬼の首を切り裂く。頰動脈を切り裂かれた鬼は首から血を噴出しながら、怒りに咆哮した。

怒りに吼えた鬼が再び大剣を振り下ろす。が、ドリストは紙一重で大剣を避け、両の手の偃月刀で斬撃の乱舞を繰り出す。瞬く間に鬼は全身を切り裂かれ、おびただしい量の血を流して倒れ伏した。

ディニンが視線を左にやると、アキヤマが巧みに長刀を操り、鋭い太刀筋が鬼の首を飛ばしたところだった。返す刀でアキヤマは接近してきた鬼の腕を切り飛ばし、そこから更に刀を翻して鬼を屠った。

遠方から駆けてくる鬼の数を少しでも減らそうと、ディニンは矢を射る。チャージによって通常よりも速く飛んだ矢は、駆けてくる3匹の鬼のうち一匹の喉を貫き、斃した。

倒しても倒しても湧き続ける鬼たちを前にして、3人は初めは歓喜していた。アキヤマとドリストは戦い続ければ戦い続けるほど新しい技巧を身につけつつあると実感できることに、ディニンは全力で狙える的が湧き続けることにそれぞれ原始的な歓びを感じていたのだ。しかし、1時間あまりも戦い続けている彼らは、戦うのがい加減面倒くさくなってきていた。

ディニンは再び弓を引き絞り、今度は チャージ を使わずに矢を射る。左手に握った弓の感触、右手のゆがけ越しに伝わる弦、矢が放たれるたびに弦が鳴らす味わい深い音。それら全てがディニンを歓喜させ、狂喜させていた。

アキヤマとドリストは、既に2人とも返り血で全身が真っ赤に染まっている。モンスターの血にまみれながら楽しそうに笑う2人は、剣を振るたびに自分の技量が上がっていくのを感じていた。以前のようなスキル熟練度が上昇する感覚ではなく、敵を屠るたびに自分の剣筋が冴え渡り、より滑らかで無駄のない動きが身についていく感覚。2人はその感覚にどうしようもない快楽を覚えながら、しかし冷静に剣を振るっていた。

和弓スキル 影縫い を発動させ、ディニンは接近してきた鬼の影を射抜いて足止めした。全身を金縛りに襲われた鬼は怒号を上げるが、しかしドリストの偃月刀によって喉を十文字に切り裂かれ、絶命した。

もう1匹の鬼は仲間を射殺した卑怯な狙撃手を誅殺せんと棍棒を振り上げディニンに突進するが、横から襲ってきた白刃に棍棒を握る手の親指を落とされ、棍棒を取り落とした。鬼の指を切り落としたアキヤマは一旦鬼と距離を取り、挑発するかのように刀の切っ先をゆらゆらと揺らす。それを見て憤怒した大鬼は左手で棍棒を拾い、アキヤマに突撃するが――素早く繰り出されたスキル 三連突き によって絶命し、巨体が音を立てて地に倒れた。

遠方からは新たに6体の鬼が駆けてくる。3人はいい加減に面倒くさくなってきたが、しかし迎撃する準備を始める。ディニンは、

なにかいけなくてこの面倒くさい事態に陥ってしまったのかと、一日を振り返り始めた。

その日、ディニンは非常に不快な目覚めを迎えた。目覚める予定の時間よりも大分前に、人々の喧騒によって目が覚めてしまったからだ。

あまりにも外が煩いので布団から起き上がって窓を開けると、そこで彼は信じられないものを目にした。

窓の下では、色とりどりの装備に身を包んだ人間達がやかましく騒ぎ、叫び、パニックを起こしていた。

ディニンは 千里眼 を発動させ、もう少し詳しく様子を探る。すると、彼はショックで目が覚めるくらい驚いた。公道でパニックに陥っているのは、なんとプレイヤー達だったのだ。一見して高級品とわかる戦闘用の装備に身を固めた彼らが慌しく道を行き交い、お互いに蒼白な顔で情報交換をしている。時折誰かが金切り声を上げたり泣き出したりする様を見て、彼は本当に驚いた。

中には楽しそうな顔で鼻歌を歌いながら歩いているものや俯いてなにやら考え事をしている様子のももいたが、いずれにせよディニンはなにかとんでもない事態が起こったのだろうと感じ取った。

何が起きているのかを知りたい気持ちもあったが、彼はひとまず顔を洗って朝食をとることにした。彼は寝巻きから戦闘用の軽装備に着替えて、食堂に行こうとする。が、部屋を出た瞬間、1人のプレイヤーが慌しく階段を駆け上がってくるのを視界に捉えた。

「おいアンタ、もう聞いたか!？」

「さっきから一体全体何の騒ぎなんだ？」

息を切らして尋ねてきた男に質問をする。気分を切り替えようと部屋を出た瞬間に他人に話しかけられ、彼は少し苛立っていた。

「さっき野良パーティ組んで早朝狩りに行ってきた連中が戻ってきたよ、北の砦の近くでプレイヤーの死体が見つかったんだ！死体も運ばれてきて、こりゃプレイヤーに間違いないってことで騒ぎになってるんだよ」

「なんだって？ 本当なのか、それは？」

半ば予期していたことではあったが、ディニンは反射的に聞き返す。

「嘘だと思っんなら門の前の広場を見てくるといい。死んだ連中のギルメンがまだ回りに居たはずだ」

「……そうか、ありがとう」

「なに、いいってことよ。お前さんも狩りに行く時は気をつけろよ、要するにやられたら死ぬってことなんだからな」

男が慌しく自分の部屋に駆け込んだあと、ディニンは朝食を取るために食堂へと降りていった。

少なくとも予想できなかったことではない、と彼は考える。モンスターが血を流して死ぬ様を見てきて、自分達がこうなる可能性がないはずがない、と彼は思っていたのだ。ディニンにしてみれば昨日のグスタフの話のほうがよほど衝撃的だったし、そもそもよっぽど下手を打たなければ死なないはずだと彼は考えている。だから、驚くことはあってもそれほど衝撃を受けるわけではなかった。

途中で出会った女将に食堂に案内され、座敷に座って朝餉を食す。大根の味噌汁をすすり、塩鮭を箸でほぐしてご飯に乗せ、口いっぱいにはお張る。鮭の塩味と白米は大変相性がよく、ご飯を一膳おかわりしてしまった。マツタケの茶碗蒸しもたいへん美味で、上手い食事を取り終えたディニンはニユースを聞いてから高まっていた気分が少し落ち着くのを感じた。

部屋に戻って時計を確認すると、現在時刻は八時三十分である。今から出発すれば約束した時間の前にリリヤの家に着くだろうと考えて、彼はコートを羽織って宿を出た。

喧騒は幾分か収まっており、泣いたり叫んだりしているプレイヤーはディニンの見る限り見つからなかった。しかしディニンがすれ違うプレイヤーたちはどこか忙しく、焦っているかのように見える。

背中に背負った弓の感触を好ましく思いながらディニンが歩いていると、彼の前方から一人の紳士が駆け足でやってきた。時代がかったスーツに山高帽をかぶり、手にはステッキを持っている。立派な髭を蓄えているその壮年の紳士の風貌から、ディニンは成熟した

知性を感じた。一見NPCのようにも見えるが、しかし紳士の握っているステッキには 刻印術士 の手がけたものとわかるルーンが刻まれていた。

プレイヤーにはあまり見ないタイプの外見をしているその紳士の顔をまじまじと眺めていたディニンは、少しいらだっている様子の紳士に睨まれた。

「なにかね。用もないのに人の顔を眺めるのはやめてくれたまえ」

「あついえ、どうもすみません」

ディニンが詫びると、紳士は鼻を鳴らしてそのまま歩き去った。

今のは失礼だったなと反省しつつ、背負った弓の感触を楽しみながらリリヤの家へと向う。横柄な言い方に腹が立たなかったわけではないが、少なくとも悪いのは完全に自分だったのだ。言い方がどうであれ、それに腹を立てるのは筋違いだろうと彼は考えた。

8尺5寸の大弓を背負った彼はいつもならすれ違うプレイヤーにちらりと目を向けられることが多いのだが、今日ばかりはそんなこともなく、彼はそのことを嬉しく思った。目立ちたいがためにネタ装備に走るプレイヤーを否定するわけではないが、彼としては目立つために大弓を担いでるかのように思われるのは嫌なのだ。

リリヤの家に着くと、昨晚と同じように執事が門を開け彼を中へと通した。地下の工房に降り、リリヤに声をかけた。

「おはよう、リリヤ。外が騒がしいけど、もう聞いた？」

「聞いたよ。だから、今日の狩りは中止することにした。グスタフ君は色々と活動を始めたみたいだし、他の皆も本格的に知り合いを探し始めたからね」

「なるほど」

ディニンはギルドに所属せず、野良パーティやソロを中心に活動していたので特に知り合いを探そうとは思わなかったが、やはりこういう状況に置かれれば皆さびしくなるのかもしれないと思った。

せつかくの異世界なのに弓道場で弓を引くのももったいないかな、と彼は考えた。かといって現状では一緒に狩りに行く仲間もおらず、ソロでは死ぬ危険性が高い。はてさてどうしたものかと彼が考え込むと、彼の背後から大柄なプレイヤーが入ってきた。

「リリヤさん、やっぱり今日は中止ですかね？」

部屋に入ってくるなりリリヤに問いかけたのは、先日リリヤたちと一緒に狩りをした 剣客 のアキヤマである。

「さすがにこの状況じゃあね」

肩をすくめて言ったりリリヤに、気落ちした様子でアキヤマが返す。

「そっか、残念だなあ……」

そんなアキヤマの様子を見て、ディニンは彼に声をかけた。

「アキヤマさん、それなら僕と一緒に一狩りどうです？」

「おお、それはいいですね。でも、2人だけだと少し不安が残りますか」

ディニンの提案にアキヤマは嬉しそうな顔をして賛同し、それから不安げな顔で疑問をぶつける。彼もまた戦闘狂の気があるが、さすがに死ぬ危険がある以上それなりに慎重にはなるらしい、とディニンは思った。

「1人、回避盾に心当たりがあります。彼もそろそろここに来るでしょうから少しだけ待ちましょう。リリヤ、大丈夫？」

ドリストのことを思い浮かべながら、ディニンはリリヤに問いかけた。リリヤは机の上で作業をしながら首肯したので、近くの壁に寄りかかってドリストを待つことにする。

「なるほど、回避盾の方ですか。どんな人なんです？」

「二刀流の レンジャー で、結構なバトルマニアですね」

ディニンが答えると、アキヤマはそれは気が合いそうな方です、と呟いて薄く笑った。やはりこの人もバトルマニアなのかとディニンが心の中でため息をついたとき、工房に1人のダークエルフが入ってきた。ダークエルフはリリヤを見つけると2言3言の短い会話をしてから、ディニンたちのほうへと向き直る。

「狩りは中止なのか？ 残念だな」

「いや、君さえよければこっちのアキヤマさんと一緒に狩りに行くと思うってたんだけど、どう？」

がっかりした様子で話しかけてきたドリストにディニンは誘いかけた。

「マジか！ 行くわ！」

一瞬で元気を回復したドリストにディニンは微笑する。この友人の素直なところは好ましいが、こういう無邪気なところはダークエルフのアバターには似合わないと思っている。

「 剣客 のアキヤマです。STR・AGI型です」

アキヤマが右手を差し出して自己紹介をすると、ドリストも右手を握り返して自己紹介をした。

「 レンジャー のドリストです。AGI特化です」

2人はがっちりと握手して、互いに相通じるものを感じてニヤリと笑いあう。

「それじゃあ狩りに行こうか。じゃあね、リリヤ」

「ん」

リリヤは机の上に置いた羊皮紙になにやらルーンを書き込んでいく様子だった。邪魔をするのも気が引けたので、早速打ち解けて武器の話に興じている2人と連れ立ってディニンはリリヤの家を辞去した。

「しかし、まさかデスゲームを実際に体験できるなんて夢みたいだ

よな。ゲーム世界にトリップなんて前世紀の発想だったけど、こんなにわくわくするんだな」

ドリストが楽しそうな顔で言った。アキヤマが確かに、と賛同する。デイニンも黙って頷いた。

さすがに皆落ち着き始めたのか、街を走り回るプレイヤーの数はかなり減っていた。その代わり、デイニンたちが歩いていると道の端や広場などでプレイヤーが集まり、何かを話している現場を何度か見かけた。彼らはいずれもお互いに顔見知りらしく、漏れ聞こえてきた会話を聞く限り同じギルドのプレイヤーのようだ、とデイニンは結論した。

「ギルド、か……」

道端で話し合う集団を見て、ドリストがぼそりと呟いた。失ってしまったものを思い出して寂しさを感じているのだろう、とデイニンは推測した。ドリストはギルド内では頼りになる前衛として皆からも慕われ、随分と楽しそうにしていたものだ。彼にとつて、所属していたギルドを失うというのはかなりの苦痛だったろう、とデイニンは同情した。

「そういえば、ギルドホームはどうなってるんだろう。まだ使えるのか？」

アキヤマが誰にともなく、そう聞いた。

ギルドホームとは、文字通りギルドで購入できる家のことだ。家とはいってもマツマエに立ち並ぶ長屋や武家屋敷、洋館のような「家」ではなく、ギルドホール中にあるホーム入り口から出入りできる空間のことだ。ギルドに一定の金額を支払うことで、支払った金

額に応じたグレードの空間が提供される。

「ホームはまだ使えるぞ、この事態が起きてから真っ先に確かめたから。最近はホームを持つてるギルドはあそこを寢床にすることが多いみたいだ」

アキヤマの問いにドリストが答えた。

「うちのところはアイテム保管庫や金庫の中身はそのままだったし、床においてたアイテムも消えてなかった。なかなか広かったから、整理すればすぐにでもつかえるようになる感じだったな」

寂しげな表情でドリストは言った。

「ギルドホールで確認した限りでは、この世界だとギルドの加入手続きはギルドホールの受付でやってるらしいね。ちなみに、うちのギルドの名簿を確認したら俺ひとりだけだった。ログインしてなかった奴らは初めからいなかったことになってるみたいだったよ」

ディニンとアキヤマはどちらもギルド参加経験が無いので、あいまいな顔で頷いた。

ドリストの語るギルドについての情報に耳を傾けながら、3人はマツマエの外へ出る門へと向かう。途中ですれ違うプレイヤーは、やはり血相を変えて走り回っているものがほとんどだった。それを見た3人は、この程度で慌てるなんて修行が足りないな、と彼らを鼻で笑う。

門の警護をしている兵士に 通行許可証 を見せ、3人は街の外

へと出た。

マツマエ平原はもっぱら薄い色の芝生に覆われた、なだらかな平原である。丘や川も存在するが、特筆すべきことは何もない。弱い風が芝生を揺らし、真新しい草のにおいを感じさせた。

昨日とはうって変わって閑散とした様子のマツマエ平原では、15分ほど歩くとディニンのスキルを持ってすぐにモンスターを見つけることが出来た。さっそく弓に矢を番え、チャージを発動させる。

弦を引き絞って標的たる赤鬼をぐつと睨みすえると、次第に視界が狭まっていき、ついに赤鬼以外は目に入らなくなる。現実世界で極度に射に集中する時と同じ現象だ。懐かしいその現象に歓喜が湧き上がるが、弓を引くために訓練された彼の精神は揺らがない。夜空にぼつんと浮かぶ満月をイメージして波立つ心を落ち着かせると、だんだんと周囲の音が聞こえなくなっていく。

彼の世界から音が消え、そこに赤鬼しかいなくなってから数瞬――「中る」という未来図を完全に思い描けた瞬間、矢は弦を離れて音の速さを超えて飛んでいった。

少しだけ山なりの軌道を描き、音速を超えるスピードで赤鬼に矢が迫る。すさまじい勢いで疾る矢はたちまち1kmの距離を飛び、赤鬼の頭を抉り抜いた。脳漿と血が飛び散り、赤鬼は倒れる。

赤鬼が倒れたことを確認して、ディニンはそのことを2人に伝えた。すると2人は自分達にも戦わせろ、と文句を言ってくる。

戦闘への期待からかあらぶっている2人をなだめ、それならばと手当たり次第に目に付いたモンスターに弓を射かけ、こちらへ誘導する。

ちなみに、3・4 kmも先のモンスターが矢がいられた方角を正確に理解できるわけは、僕が使う矢の素材にある。僕は和弓の矢を生産する際にはかならず神木・魔力樹の類を使うので、それらを用いた矢は空中に魔力の残滓を残すのだ。モンスターはそれを頼りにたとえどんなに遠くから矢をいられてもこちらを追跡することが出来るらしい。

そして、そのことをディニンが思い出したときにはもう遅かった。以前はエリアを区切る光の壁の為に長い射程を活かしきれていなかったディニンだが、今はもう光の壁は無いので最大6 kmの射程を充分に生かして矢を射ることが多い。そして、その最大射程を生かして矢を射れば、当然平原にまっすぐ6 kmの魔力線が出来上がるわけで。ディニンたちは、複数張り巡らされたバカみたいに長い魔力線にぶつかったモンスターたちは、ディニンたちのところへといつせいにやってくる。

逃げようにも、ディニンが360°。八方に矢を射てしまったため、何処へも逃げられない。

かくして、物語は冒頭へとつながり、ディニンたちは次々に襲ってくる魔物の群れに辟易することになるのであった。

5話（前書き）

i P h o n eで書いたら指がつかまりました。アイタタタ

5話

無限に沸き続けるかのように思えたモンスターたちは6時間あまりも戦い続けるととうとう沸かなくなり、ディニンたちは疲れてその場に座り込んだ。

「ふう……まったく、大変な目にあった」

モンスターの血で真っ赤に染まった草原に座り込んだディニンがため息をついた。200本以上あった矢は尽き、慣れない剣を握って戦っていた彼はとても疲れていた。

「楽しかったけど、さすがにこれはキツイわあ……」

ダークエルフ特有の白髪を返り血で真っ赤にしたドリストが言った。彼自身も戦闘中に何度か敵の刃を受け、回復アイテムで全快してはいるものの全身はすっかり真っ赤だった。

「しかし、これだけ疲れてもすぐに動けるんだからすごいよな……」

刀にこびりついた血を落としていたアキヤマがふと呟いた。確かに、アキヤマの言うとおり6時間もの間戦い続けたにもかかわらず彼らはそろそろ立ち上がれそうなくらいに体力を回復させていた。

ディニンが周囲に人もモンスターもいないことを確認すると、彼らはおもむろに服を脱ぎ、無限巾着から着替えを取り出した。タオルに水代わりの回復薬をしみこませ、全身を拭く。全身にこびりついた血をすべて拭き終わるころには、各自10枚以上のハンドタオルを真っ赤に染め上げていた。

「それにしても、前とはずいぶん違う戦い方ができるようになったよな。自由度はあがったし、急所を斬れば前よりもあっけなく死ぬし」

着替えながらドリストが言った。彼の言うとおり以前はドリストの攻撃がクリティカルヒットしても死ななかったようなモンスターでも、喉を切り裂かれると出血や窒息であっけなく死んだ。

「もう少し人数をそろえれば美味しく狩れたな。3人じゃキツすぎるが、壁が1人と魔法使いが1人増えればちょうどよさそうだ」

アキヤマがそう言うと、ディニンとドリストは頷いた。回避重視のドリストはともかく、攻撃特化のアキヤマは壁役がいないと少々つらそうだった。補助魔法や回復魔法があれば殲滅速度はもつと上がるだろうし、次はちゃんと人数をそろえて狩ろう、とディニンは考えた。

新しい装備に着替え終わり、3人はマツマエへと急いだ。ディニンとドリストは使い魔を出し、アキヤマはディニンのナイトメアと一緒に乗ることにした。

巨大な黒い女豹にまたがりながら、ドリストが提案した。

「この後 色街 に行こうと思うんだが、お前らはどうする？」

長時間の戦いの後で、ドリストは昂ぶっていたのだ。アキヤマも同じだったらしく、だらしない顔をしてドリストに賛同した。

「うーん、僕はいいや。もともとそういうのは淡泊だし」

ディニンは誘いを断った。病気が怖かったし、そもそも彼は初対面の女性とは満足に口が聞けないタイプである。昨日ともに狩りをしたミーナに関しては以前から何度か顔を合わせていたから打ち解けることができたが、商売女というのはどうも怖そうだと彼は思っていた。童貞を捨てたがるくせにはじめては恋人とがいいという、童貞特有のくだらない執着もある。

ディニンが断っても2人はさほど気を悪くしなかったので、ディニンはほっとした。

すでに日は沈み始めている。3人は使い魔を走らせ、夕焼けに赤く染まった空の下、マツマエへと急いだ。

マツマエの門を通ったところで2人と別れ、ディニンはNPCの商店が立ち並ぶ通りへと足を運んでいた。

以前よりも活気にあふれ、商人たちの灯す明かりで煌々と輝く商店街で、ディニンは買い求めた焼き鳥を食べながら露店をひやかしていた。石畳の路地にはとろせましと露天が立ち並び、道の両脇には立派な店がいくつも立ち並んでいる。武器屋や薬屋、魔術用品屋などさまざまな店の客引きが声をからして口上を叫び、懸命に客を引こうとしている。

途中で見かけた素材店に入り、矢の素材となる神木を買い求める。明日の午前中にリリヤの工房の一角を借りて矢を作る予定なので、

市販の矢尻や矢羽の材料もいくつか買い求めた。矢尻の生産には鍛冶 スキルが必要になるし、市販のものでモリリヤにルーンを刻んでもらえば一流の鍛冶プレイヤーによる矢尻と遜色ないステータスに仕上がるのだ。彼女は異変が起きてからずっとルーンの研究にかかりきりで依頼を受けていないので、実験材料として矢尻を提供してルーンを施してもらうつもりだ。

値引き交渉の結果以前よりも安価で素材を買うことに成功したデインンは、上機嫌で商店街を歩いていた。すると、前方から男女の言い争う声が聞こえ、一般市民たちが輪を作っていた。なにごとかと思つて千里眼で確認すると、どうやら2人の男性プレイヤーが2人の女性プレイヤーを強引にナンパしようとしているらしい。

女性プレイヤー2人は、よく見るとリリヤとミーナだった。リリヤはいつもの快活さはどこへやら、見ているだけで背筋が寒くなるような冷たい目を男性プレイヤーに向けている。ミーナはそんなリリヤを守るかのように、リリヤの前でサーベルに手をかけていた。こちらは抜き身の刀のようなぎらぎらとした鋭い殺気を放っており、男性プレイヤー2人はそんな彼女たちに気おされているかのように見えた。

ミーナがいるならリリヤに危険は及ばないだろうと考えて、デインンは近くの商店の屋根に上って事の成り行きを眺めることにした。万が一に備えていつでも弓を構えることができるようにしておくが、おそらく自分の出番はないだろうと彼は予測した。

ミーナのジョブである ルーンフェンサー はPVPにおいてなら全ジョブ中最強であるといわれている。魔法と剣とを同時に操るのだから、当然といえば当然である。ミーナの実力の高さは先日

狩りでいやというほど知っていたし、相手も廃人とはいえ負けることはないだろうとディニンは踏んでいた。

ディニンが売り子から買った焼きとうもろこしをかじったその時、無責任でお祭り好きなNPCが叫んだ。

「おい野郎ども、嬢ちゃん2人になにびびってんだ！」

その台詞を聞いたリリヤの顔がいよいよ無表情になり、ディニンは頭を抱えた。リリヤの事情は聞いたことがないが、彼女はいつも「女として扱われること」に異様なまでの拒否感を示すのだ。彼女に面と向かって「かわいい」「きれい」といった男たちの末路は何度も見てきたので、リリヤたちに絡んでいる2人の男性プレイヤーは最悪死ぬかもしれない、とディニンは思った。もちろん街中で人死に出すのはさすがに不味いので、男たちが命の危険に晒されたと感じたらすぐにでも争いを止められるよう、ディニンは弓と矢をそばに置いた。

「仕方ねえな。こうなりゃ、腕ずくでついてきてもらうぜ」

2人の男のうち、片手半剣を持った男が言った。剣を抜き、脅すように刃先をゆらす。

もう片方の男も曲刀を抜いて、下卑た笑みを浮かべてミーナに剣を突きつけた。

ミーナがサーベルを抜くと、2人の男は左右から同時に踊りかかった。その動きを見て、ディニンは安堵した。男たちの実力はマツマエでも最底辺なのだと一目見てわかったのだ。

ミーナは右手に握ったサーベルで片手半剣を弾き、同時に軍服の左腕に仕込んだ細鎖で曲刀を受け止め、これまた鎖に裏打ちされた手袋で曲刀の男を殴りつける。

ミーナが軍服や手袋に仕込んだ鎖にはリリヤが持てる技術をすべて注いで作り上げたルーンが刻まれており、その性能は一流の鍛冶プレイヤーが作った全身鎧などよりもよほど高い。事実、鋭い切れ味の曲刀を受けても鎖には傷ひとつつかなかった。

ステータスでは男にはるかに劣るはずのミーナが操るサーベルは、通常の剣術スキルにはありえない動きで片手半剣を弾き続ける。その剣筋を見た男たちは、信じられないものを見た顔をして言った。

「エクストラソードスキル、だと……？」

エクストラソードスキルとは、通常の剣術スキルの熟練度を一定以上までに上げるとおきるイベントクエストによって得られる、とてつもなく強力な剣術だ。求められる剣術スキルの熟練度はそこまですぐにはないが、クエストの成功率が1%を下回るため、エクストラソードスキルを持つプレイヤーはMWOでも20人ほどしかいない。

「そう。エクストラソードスキル、サーペントだ」

屋根の上に乗ったディニングが、そう呟く。

ミーナの操るサーベルが、襲い掛かる2本の剣を弾き続ける。

「クソッ！ まるで剣筋が読めねえ！」

曲刀の男が毒づく。2対1で攻めているにもかかわらず、パラメータが劣る ルーンフェンサー に男たちは押されていた。ミーナに魔法を使う様子がないことから手加減されていることがわかるが、しかし男たちはいまや攻めあぐねている。

サーベルは、それ自体がまるで一匹の生き物であるかのように変幻自在に動いていた。じっと見つめていると、サーベルが伸びたり縮んだりしているような錯覚に襲われるほどその剣筋は幻惑的だった。しかも、直線的な軌道の男たちの剣より、曲線的でクセのある動きのサーベルのほうが圧倒的に早いのである。

まったく読めない剣筋に幻惑され、片手半剣の男は右から攻撃が来ると感じてとっさに剣を右に構えた。が、サーベルは男をあざ笑うかのように男の左から襲いかかり、片手半剣を握った手首を斬り飛ばした。片手半剣が地に落ち、男は悲鳴を上げる。

ミーナが初めて攻撃に出た隙を突こうと、残った男がミーナの真横から曲刀を突き出す。

しかし、曲刀は目にも止まらぬ動きでサーベルに弾かれ、体制を崩した男の手首をミーナが斬り落とす。曲刀が石畳の上に落ち、男は血の噴き出る手首を呆然と眺めた。

ミーナが懷から布を取り出してサーベルについた血を拭き取ると、リリヤが冷たい目をしたまま剣を握って進み出た。

「リリヤっ！」

ミーナが鋭い声を上げてリリヤを制止するが、それを予期していたリリヤは小声で唱えていた呪文を発動させ、地面から影の手が伸びてミーナの動きを封じる。

絡み付く影と格闘するミーナに一言謝ってから、リリヤは剣を握って曲刀の男の前に立った。その目を見たディニンはリリヤが男たちを殺すつもりだと悟り、あわてて弓を構え鎗矢を番える。

「待ってくれ、助けてくれ——」

血の噴き出る手首をだらんとぶら下げたまま、男は必死に命乞いをした。しかし、リリヤはそんな男に冷たい視線を向け、剣を振り上げる。

男が殺されると思って絶叫し、4人を囲んでいたNPCたちが息を呑んだ瞬間——リリヤが振り上げた剣を、飛来した矢が弾き飛ばした。

リリヤが矢の飛んできた方角に目をやると、屋根から飛び降りたディニンが急いで駆けつけてきた。

「邪魔をするつもり？」

絶対零度の目をディニンにむけ、リリヤは静かな声で尋ねた。静かな声ではあったが、ディニンはその裏に押さえがたい憤激と悲しみを感じ取った。まるで引き絞られた弓のようだ、とディニンは感じた。

「どついう事情があるにせよ、街中で人殺しは賢明なこととは言え

ないな。もうすぐ役人も来るだろう。少しは落ち着け」

これまでも何度かリリヤが怒ったときの顔は見たことがあったが――作り物のアバターが浮かべる怒りの表情などとはかけ離れたリリヤの冷たい顔に、ディニンは気圧される反面強く惹きつけられた。場違いなことだが、まるで三日月のような美しさだとディニンは思った。

リリヤは邪魔をするディニンを捕らえようと、呪文を口にする――が、呪文が完成する前にディニンがリリヤの口に手を当てて黙らせた。

目を白黒させるリリヤの首根っこをつかみ、呪縛から開放されたミーナに引き渡す。

「ありがとう、リリヤをとめてくれて」

「どういたしまして」

ディニンは礼を言うミーナに言葉を返し、見世物は終わりだと言わんばかりに周りのNPCたちを追い払う。NPCたちも飽きたのか、すぐに散っていった。ついでに2人の男を病院へと運んでもらう。

「落ち着きなさい、リリヤ」

NPCたちが去ると、ミーナはそう言ってリリヤの目を覗き込んだ。

「……ごめん、ちょっと頭に血が上ってた」

男たちが運ばれていったことで冷静になったのか、すまなさそうな顔をしてリリヤが謝った。

「事情はわかってるし、気持ちはわかるけどさ……やっぱり、殺すのだけは不味いと思うんだ」

ミーナが言うと、リリヤは言葉に詰まった。

「とりあえず、家に帰ろう」

ミーナが提案し、リリヤは黙って頷く。

「迷惑かけてごめんね。何かお詫びをしようと思うんだけど……」

リリヤが申し訳なさそうな顔でディニンに言った。ふざけて下ネタを振るうかとも考えたが、空気を読んでディニンはまじめに振舞うことにした。ここで申し出を断つてもリリヤは気まずいだろうと考え、彼にとっても利益になる提案を試してみる。

「それじゃあ、弓に新しいルーンを刻んでくれ」

ディニンはニヤリと笑って言った。

ディニンが今使っている弓には、既にシステムの限界までルーンが刻んである。しかし、異変後は刻む場所さえあればいくらでもルーンを刻み込めるようになったとリリヤから聞いていたので、ディニンは追加の加工を頼んだのだ。どの武器もルーンを刻み込める数は3つまでと以前は決まっていたが、8尺5寸の大弓にはその気に

なれば20はルーンを刻めるのではないか、とリリヤは言っていた。

「わかった。全力でやらせてもらっよ」

リリヤはディニンの笑みを見て、職人としての欲求を刺激されてニヤリと笑った。ミーナの鎖にはすでに限界までルーンを刻み込んだが、武器に刻み込むのはまだだったのだ。

快活さを取り戻したリリヤにミーナは安堵し、3人はリリヤの家へと歩き出した。

リリヤの家に着いた3人は以前のように晚餐を楽しみ、酔いつぶれたミーナを寝室に運んだ。

ミーナを寝かしたリリヤとディニンは、地下の工房で加工に関する相談を始めた。

「強化の方向性としては、射程を延ばして威力を強めればいいんだっけ？」

リリヤの問いにディニンは頷いた。

「こつちで新しく発見したルーンとしては 貫通強化 と 抵抗減少 が使えそうだけど、どうする？」

「貫通強化 は欲しいな。 抵抗減少 って言うのはどういう効

果なんだ？」

「空気抵抗を少なくして、よりまっすぐに飛ぶようになる」

「ならそれも追加で」

追加するルーンを紙に書き出すリリヤと話し合いながら新たに刻む20のルーンを検討するディニンは、いつしか時の流れを忘れて話し合いに熱中していた。

「じゃあ、貫通強化 を3つと 抵抗減少 を4つ、命中強化 を5つに 加速 を5つ、 衝撃強化 を3つの計20でいいかい？」

一時間あまりも話し合い、結論が出た。

「うん、それで頼む」

「じゃあ、今から作業するから明日の朝にできると思うよ。しかし、これだけ大量にルーンを刻んだらどんな怪物弓ができるんだろうね」

「確かにね。出来上がり次第使おうと思うけど、今日はもう眠いから帰るよ」

「いや、部屋は余ってるから泊まっていくといい。ついてきて、案内するから」

リリヤは断る隙を与えずにディニンの手を引いて工房から出て、

空いてる部屋まで案内した。思いがけないタイミングで手を握られて、ディニンは一瞬どきりとする。が、どうもリリヤには特別な意図はないようだと思っただけに落ち着いた。

部屋について、一通り設備の説明を受けてからディニンはまたもや手を引かれて風呂に案内された。

「基本的に日本のお風呂と使い方は同じだよ。メイドさんがそこに客用のタオルを用意してあるから、使い終わったらそこのかごに放り込んでおいて」

「わかった」

リリヤの邸宅の風呂は、大理石でできた洋風の風呂だった。金色のライオンの口からお湯が出ているのを見て、ディニンの頬がぴくぴくと引き攣る。あまりにもお約束過ぎて、笑うべきかどうか真剣に悩んだのだ。

「じゃあ、入るから出てつてくれる？」

家の持ち主に出てけというのも妙なものだと思いながら、ディニンは言った。すると、リリヤが真顔でとんでもないことを言っていた。

「いや、背中流すから一緒に入るよ？」

ディニンはぎょつとして目を見開き、リリヤの顔を見る。

「やだなあ、冗談だってば。じゃ、工房に戻るから」

悪戯っぽくクスリと笑って、リリヤは脱衣所から出て行った。デインはからかわれたことを悟って赤くなり、少し乱暴な手つきで服を脱いで風呂に入ったのだった。

5 話（後書き）

リリヤさんを魅力的に書きたいけど書けてる気がしない

6話

「起きろー!」

気持ちよく寝ていたディニンは、リリヤの叫び声によって起こされた。

「おはようディニン! 朝だぞ起きろ!」

「ん、おはよう」

肩をつかまれて首を揺らされ、ディニンは覚醒した。目を開けると得意げな顔をしたリリヤと目が合ったので、朝の挨拶を交わす。

「はい、加工終わったよ!」

ディニンは比較的朝は強いほうだ。ベッドから起き上がると、リリヤが自分の弓を掲げているのを見て昨日のことを思い出した。

やたらとテンションの高いリリヤから弓を受け取り、全体をなでてみる。

隅々まで刻まれたルーンから、なんともいえない力の波動を感じる。どうやら、加工は上手くいったようだと彼は安堵した。刻まれたルーンが薄い水色の光を発しており、その光が弓全体を覆っていた。

「朝食はできてるから、着替えて降りてきてね」

リリヤはそう言ってあくびをしながら部屋を出て行った。

重厚な木製の家具とシルクのカーテンが特徴的な洋風の部屋で、ディニンは寝巻きを脱いで 無限巾着 にしまい、着替えをクロージェットから取り出した。昨日の晩にメイドが洗濯して乾かしてくれたらしく、装備はまるで新品であるかのように手入れが行き届いている。この短時間でどうやって皮製の装備を乾かせたのかと気になったが、おそらくは魔法を使ったのだろうとディニンは推測した。宿でも生活には細々とした魔法が使われていたし、洗濯・乾燥の魔法があってもおかしくはない、と彼は考えた。

白い大理石で造られた洗面所で顔を洗いながら、ディニンはそういえばエルフはひげが生えないらしい、と気づいた。異世界に着てから鏡を見る機会はそれなりにあったが、一回もひげをあたっていないにも関わらず顎はつるつるなのだ。細面の美青年顔にもすっかり慣れてしまったことを実感しつつ、洗面所を出た。

渡された弓を巾着にしまい、ディニンは朝食を取るためにリビングへと向かう。洋館の床には赤い絨毯が敷かれており、天井から吊り下げられたシャンデリアもあいまって豪華な雰囲気をもし出していた。

「おはよう、ミーナ」

「おはよう、ディニン」

ディニンは青い顔をしているミーナに挨拶した。どうやら、またしても二日酔いらしいとディニンは見た。二日酔いするとわかっていても酔いつぶれるまで飲むあたり、小柄で少年じみた外見に似合わない酒が大好きなのだろうと彼は考えた。

3人がテーブルに着くと、モノクルの老執事がワゴンに朝食を載せて運んできた。こんがりと焼けたトーストのなんともいえない香りが漂ってくる。リリヤはコーヒーが嫌いなので、朝食には紅茶が添えられていた。

「そつえば、今日はどうするの?」

朝食を食べながら、リリヤが聞いてきた。

「昨日の狩りで矢を使い切っちゃったからね。どこかで矢を作ろうと思う」

「それならうちの工房使う? 徹夜明けだからこれ食べ終わったら寝るし、好きに使っていいよ」

「それなら使わせてもらうことにする」

リリヤから工房の使用許可をもらったディニンは、朝食を食べ終わると地下の工房へと向かった。

一刻も早く弓を試したい気持ちはあるが、先のことを見据えて1000本は矢を作っておきたい、と彼は考えていた。素材は十分に買い込んだから、今は手を動かすのみである。

巾着から素材となる木と矢羽、矢尻を取り出して彼は作業を始めた。

1分に5本のペースで、彼は持ち前の集中力を発揮して矢を作り続ける。

たちまち彼の周囲に木の削りくずが山をなす。時折山を崩しながらも、彼はあぐらをかいて作業を続けた。

作業を始めてから3時間ほどたつと、後ろから声をかけられた。

「こんにちは、ディニンさん」

やわらかいソプラノの主を探してディニンが振り向くと、そこに立っていたのは先日ともに狩をしたハイエルフのグスタフだった。

「やあ、グスタフ。リリヤに用か？」

「ええ、確かに彼女にも用がありますけど、あなたにも用はあるんです」

ディニンは作業の手を止めてグスタフを見た。すると、美少年のアストロマンサーは真剣な顔で語り始めた。

「実は、防衛クエストが2週間後に迫っているのですが、ディニンさんには防衛軍の士官をやってもらいたいです」

「いろいろと突っ込みどころが多すぎるから、できれば丁寧に最初から話してくれ」

唐突によくわからないことを口走ったグスタフに、ディニンは突っ込んだ。

「ああ、すみません。実は僕、あの後マツマエの藩主と会見して、

次の侵攻の際にプレイヤーをまとめて防衛軍を組織することを提案
しましてね。藩主の許可はもらえたので、いくつかの大手ギルドに
声をかけて防衛軍の中核を組織したんです。15の大手ギルドのギ
ルマスによる投票で サウザンナイツ のマスターが將軍に就任し
て、今朝から街で志願兵を募っています。僕は一応参謀をやってま
す」

「ずいぶんと手際がいいな、おい」

ディニンは目の前の少年の政治的手腕に舌を巻いた。異世界に着
てから一週間もたたないうちに組織を起こして地位に着くとは高校
生とは思えないな、と感嘆する。

「いえいえ、僕などはまだ未熟ですよ。それで、部隊編成と大まか
な戦術だけは決定したので、適性のありそうな知り合いを片端から
あたって士官候補を探しているんです。ディニンさんには弓兵隊の
指揮をとってもらおうと考えてます」

少年の言葉に、ディニンは考え込む。グフタフはディニンをせか
すことなく、黙って立っている。

「……それって、もちろん一時的な役職だよな？」

「どうとも言えませんね。僕の思惑としては防衛軍を組織してプレ
イヤーたちに連帯感を持たせて、防衛が終わった後にプレイヤーを
まとめる組織を作るつもりですから。防衛軍自体は一時的なもので
すが、防衛軍の組織を前身として自治組織を発足させるつもりです。
なので、必ずしも軍で指揮官をやったからといって自治組織の運営
にかかわるわけではないと思いますが」

「君はそれなりの地位にいるんだろう？　なら、君が僕の辞める権利を保障してくれるなら士官はやぶさかではないよ」

「わかりました。では、お願いします」

右手を差し出したグスタフに、ディニンは立ち上がってその手を握り返す。

「ところで、弓兵隊といってもほとんどが洋弓使いだろ？　僕が指揮官で大丈夫なのか？」

「むしろ、同じ洋弓使いに指図されるのはプライドの高いプレイヤーは嫌うでしょう。なので、弓のことがわかっていてなおかつ洋弓使いでないディニンさんが適役だと考えています」

「いや、和弓使いだって他にも何人かはいるだろうが」

ディニンが訊くと、グスタフはやれやれとかぶりを振った。

「和弓使いでカンストしてるプレイヤーはこの世界には両の手で数えられるほどしかいませんし、その人たちも速射　スキル保持者ですから、純粋な和弓使いとは言いがたいです。現在、この世界でチャージ　持ちのカンスト和弓使いはあなたしかいないんですよ」

「MWOのプレイ人口から考えるとその理屈はおかしいぞ」

突込みを受けたグスタフは、何も知らないんですね、と言って呆れたような顔をした。

「知らないんですか？　あなたの和弓フェチっぷりが過去に何度か

掲示板で取り上げられて、そのせいで和弓使いが増えないんです。元々マイナーな武器やビルドを選ぶプレイヤーはその道の第一人者になりたがってマイナーな選択をすることがほとんどですが、和弓使いとしてのあなたがあまりにも廃神なので、わざわざ同じ和弓を選ぶ物好きはいないんですよ。昔は和弓使いもそれなりにいたようですが、あなたの和弓スキルが400を越えた辺りから皆洋弓に鞍替えしたんです」

「なんか嘘くさいんだが」

「1日のうち15時間ロゲインして弓を引き続ける生活を7年続けた廃人が居たらしいんですが、僕としてはそんな人がいることが自体が嘘くさいです」

なるほど、そんなものとディニンは感心した。

「元々マイナージャンルでトップになろうとする人たちはメジャージャンルでトップを狙う人たちよりは時間が取れない人がほとんどですから、そんな人たちが超弩級の廃人と同じ武器で競おうとは思わずがないでしょう。普通はVRMMOの武器に愛着を抱いたりなんかしませんしね」

誰かさんはそうでもないみたいですけど、とディニンに生暖かい目を向けるグスタフ。ディニンはぽりぽりと頭をかいて話題をそらした。

「ところで、防衛軍とやらはどれくらい人数をそろえるつもりなんだい？」

「今のところ軍の参加人数は700人ほどで、目標人数は2500

人です。マツマエ市内のプレイヤー人口については調査中ですが、おそらく3000人前後かと。すべてのサーバーのプレイヤーがこの世界に来ているようなので、結構人数は多いようです」

「よくもまあ、これだけの時間でそんなところまで把握してるな」

「誰かがやらなければいけないなら、僕がやろうというまでです。大手ギルドのマスターとはいっても、頼りにならない日和見主義者ばかりですから」

皮肉気に唇の端をゆがめて、グスタフは言った。

「政治手腕も情報収集能力もないクセに、見栄ばかり張りたがる。15人のうち半分以上はそんなくだらない人間でしたよ。あんな人間に自治組織を任せるわけにはいきません」

「ずいぶんと辛口な評価だ」

苦々しげに愚痴るグスタフに、ディニンは言った。まあ、こういう義憤に燃える若者が政治に関わっているのは好ましいことかもしれない、とディニンは思った。なにしろ22世紀に入ってから代議士の平均年齢は70歳を越え、そのせいで日本は刻々と変化する国際情勢についていけないのだ。ディニンは、少なくとも若くて頼りがいのある施政者というのはどこか安心感を与えてくれると思っていた。

「元々皮肉が多い性格なんですよ。せっかく異世界に来たから治そうとは思ったんですが、無理なようです。まあ、そういうわけで近々連絡をします。泊まってる宿は調べてあるので、そっちの方に尋ねますよ」

「そんなこと、いつ調べたんだ？」

聞き捨てならないことを言ったグスタフに、ディニンは質問した。

「あなたもそうですが、プレイヤーの皆さんはもう少しここが異世界であるということを良く考えた方がいいと思いますよ。では」

最後に謎めいた忠告をして、皮肉屋のハイエルフは工房を出て行った。

ディニンは肩をすくめて、矢を作る作業を再開した。彼よりも一回り年下の少年は、彼などは及びもしないほどに優秀らしいとディニンは思った。だから彼のなぞめいた忠告に関しても、考えるだけ無駄だろうと思うを放棄する。

作業を再開してから3時間30分ほどが経つと、ようやく1000本目の矢が完成した。

本来ならばリリヤにルーンを刻んでもらう予定だったが、しかし思いがけず弓を加工してもらえたので矢の加工は遠慮することにしたのだ。それに、一刻も早く弓の性能を試したいということもある。

一部の削りくずを暖炉に放り込み、それでも処理し切れなかった分は巾着に収納した。捨てる場所は無かったし、いずれ何かの役に立つだろうと思ったからだ。

リビングに戻り、時計を確認するとすでに時刻は午後の3時だっ

た。リリヤはまだ寝ているらしく、ミーナが酒の抜けきらない顔を
して紅茶とマフィンを楽しんでいる。ディニンは老執事から昼食代
わりにマフィンを3つもらい、紅茶を啜った。

心地よい沈黙。ミーナはどこかボンヤリとした顔で紅茶を啜り、
ディニンは黙ってマフィンを楽しんでいる。不思議と気まずさは無く、
くつろげるとディニンは感じた。ぶどうのフレーバーティーの芳醇
な香りがリビングに広がり、安らいだ気分になる。マフィンはどう
やら作りたてらしく、中はほんのりと温かった。

「そういえば、昨日のことは訊かないの？」

ディニンがマフィンを食べ終わると、ミーナが尋ねた。

「リリヤが怒ったこと？ 興味がないといえば嘘になるけど、他人
の事情を詮索する趣味は無いな」

ディニンが答えるとミーナは一言、そう、と呟いた。

「リリヤがあなたのことを信用できると思えば、そのうち彼女は自
分から話すと思うわ。あの娘も色々事情があるから、できれば支え
てあげて欲しいのだけだ」

ミーナは心配そうな顔をしてそういった。その顔を見て、リリヤ
はいい友人に恵まれたな、とディニンは思った。

「長い間友人をやってきたんだ、そう簡単に見捨てたりはしないさ。
色々世話になってるのも確かだし、メンタルケアのお手伝いくら
いならお安い御用だ」

結構な大きさの義侠心と少しばかりの虚栄心から、ディニンは深

く考えずに請合った。ミーナは顔を上げ、嬉しそうな顔をする。

「ありがとう。ところで、今日はこの後どうするの？」

ミーナが尋ねると、ディニンは楽しそうな顔をして答えた。

「弓を試してくる。どのくらい強力になったか把握しておきたいんだ」

「なら、一緒に狩りに行かない？ そろそろリリヤも起きると思うし、私の剣もルーンを刻んでもらったから」

ミーナの提案に、それは都合がいいとディニンは頷いた。その次の瞬間、リビングの重厚な木の扉が開いてリリヤがやってきた。

「おはよう、ミーナ、ディニン」

リリヤは水色を基調とした丈の長い魔術師風のローブを着ていた。杖は巾着に収納してあるらしく、持っていない。淡いプラチナブロンドの髪は水色のローブに不思議に似合っていて、なんとも幻想的な美しさだとディニンは思った。

「おはよう、リリヤ」

「おはよう、リリヤ」

期せずしてディニンとミーナの声が重なり、3人は顔を見合わせて笑った。

「ところでリリヤ、これから狩りに行こうと思うんだけど、どうする？」

ひとしきり笑った後、ミーナがリリヤに尋ねた。

「ああ、こつちもちょうど行こうと思ってたところなんだ。ディニンのルーンを刻むついでに新技術でアイテムを創ってみたから、それを試そうと思う」

そう言つて、リリヤは懷から一枚の金属板を取り出した。トランプカードと同じくらいの大きさのそれには細部にまでルーンが刻まれており、薄水色の淡い光を放っていた。

「水属性付与のルーンを刻むと武器から高圧の水が吹き出るようになるけど、今回ののはその応用だね。空間拡張と転送、噴射の3つを組み合わせて、この金属板の中に仕込んだ武器を勢いよく射出できるようにしたんだ。とりあえず今の所は実験だから鉄球を仕込んであるけど、研究が進んだら剣や槍も試してみようと思う」

リリヤが何を言っているのか、ディニンとミーナにはさっぱりわからなかった。2人が顔を見合わせて困惑していると、焦れたリリヤが解説する。

「つまり、既存のルーンを構成するいくつかのパーツを分解して、それぞれがどういう働きをしているのかを調べたんだ。それでもって、効果のわかったいくつかのパーツを組み合わせて新しいルーンを作ったんだよ。わかりやすくとえると、漢字の篇と旁を分解して新しい漢字を作ったってこと」

リリヤの説明に、なんとなくわかったような気分になって頷く2人。

「この技術を応用すればいくらでも新しいルーンは作れそうだけど、くれぐれも他のプレイヤーには言わないように。技術は独占したいし、昨日の2人みたいな下衆には武器を渡したくないから、信頼できるプレイヤーだけに秘密で売ることにするよ」

声をひそめてリリヤは言った。

「というわけで、しばらくは研究に専念したいから客はとらないことにする。だから、君達は存分に稼いで貰いでくれたまえ」

冗談めかしてそんなことを言うリリヤに、2人はクスリと笑った。

6 話（後書き）

評価・感想などいただけると嬉しいですよ。

良い点を指摘してくれると嬉しいです。

悪い点を指摘してくれるともっと嬉しいです。

良い点と悪い点の二つを指摘してくれると一番嬉しいです。

7話

「それじゃあ、行こうか」

ディニンたちは戦闘用の装備に着替え、リリヤの家を出発した。ディニンの装備はリリヤの家のメイドが昨日のうちに洗濯してくれたので新品のように綺麗になっている。

リリヤは水色のローブに木製の杖を携えていた。その横を歩くミーナは、いつもの白い軍服を着て腰にサーベルを吊っている。ブーツの鉾が石畳をたたく硬質な音が耳に心地よい、とディニンは思った。

マツマエの街は昨日に比べて大分静かになっている。一晩経って頭を冷やしたプレイヤーが多いというのも一つの要因ではあるだろうが、おそらく最大の要因はいたるところに立てられた高札によるものだろう、とディニンは推測した。「マツマエ防衛軍」の署名で立てられた高札によって、先ほどディニンが聞いた情報の一部が発表されている。高札は 防衛クエスト が迫っていることを告知し、防衛軍に参加したいものは 防衛軍 の本部が設置されている中央街の洋館まで足を運ぶように、と書いてあった。そのほかにも様々な情報が載っており、プレイヤーたちに冷静になるように呼びかける文がひととき大きな文字で載っている。人間というのは情報が手に入れば存外に落ち着く生き物で、高札を見たプレイヤーたちは情報が入ったことによって目に見えて落ち着いたようだった。

ディニンたちが途中ですれ違ったプレイヤーは皆、小声でひそひそと話し合いながら集団で防衛軍の本部へと向っていた。彼らは皆 防衛クエスト が失敗すればどうなるかを考え、最悪の事態を防

ぐために防衛軍への参加を決意したのだ。モンスターが街に侵入すれば抵抗する力のないNPCは虐殺されるだけで、マツマエのプレイヤーたちは唯一の拠点を失うことになる。しかもギルドホールに設置されている 移動門 を通って高レベルのモンスターが他の都市へ侵入するようなことがあれば、エドやキョートといった低レベルプレイヤーたちの街は壊滅しかねない。高札にはその場合の被害予想が生々しく書かれており、小心者の廃人は顔を蒼くして防衛軍本部へと向っていた。

ディニンとリリヤ、ミーナの3人は 防衛クエスト の成否について意見を交換していた。

「クエストの仕様が前と同じだとすれば、今マツマエにいるプレイヤーの3割が参加すればほぼ確実に勝てるはず。ただ、6時間もの間集中力が持つかどうかということ、誰かが死んでしまった時に戦線が崩れてしまわないかということ、この2つが不安要素かな」

ローブの袖にルーンが刻まれたカードを仕込みながら、リリヤが推測を述べた。

「プレイヤーの戦力が未知数なのがなんともいえないな。スキルやステータスの仕様は変わってないみたいけど、応用の幅は恐ろしく広がったし、リアルになった分フルに力を振るえないプレイヤーもいるだろうから」

ディニンが言った。何回かの狩りを通じて戦い方の幅が広がったことを嫌というほど実感している上、彼自身もこれからどのような戦えばいいか大分戸惑っているのだ。矢を放つたびに敵を引き寄せてしまうのでは、効率はいいかもしれないが安全面に不安が残る。

以前はフィールドでは魔術師による魔法が大々的に使用されていたために、直接狙撃したモンスターに追跡されることはあってもそれ以外のモンスターをひきつけてしまうことはほとんど無かった。が、フィールドが広くなつてモンスターの沸きが減った今、ディニンの長距離狙撃はどうしてもモンスターをひきつけてしまうのだ。強化した弓の威力によつてはこれまでのスタイルを大幅に変えなければいけないとディニンは考えていた。

「AGI剣士は戦い方の幅が広がったけど、壁職やSTR型はそうでもないみたいね。私個人は、これまでよりずっとやりやすくなつたよ」

ミーナが思ったことを口に出した。モンスターが急所を斬れば以前より楽に倒せるようになったお陰でミーナやドリスト、アキヤマのようなスキル熟練度・AGI重視のプレイヤーたちは戦いが楽になったと実感している。

「まあ、人数をそろえればどうとでもなれると思うよ。回復職と壁職を集めて慎重にやればそうそう死人は出ないだろうけど、指揮官の手際次第だろうね」

リリヤがさういうと、2人は確かに、と頷いた。結局の所、わからないことが多すぎて判断のしようがないのだ。

3人は他愛のない話題に興じながら、冬特有の澄んだ空気に心地よさを感じつつマツマエを歩く。今日のマツマエの空は雲ひとつない晴天で、冷たく乾いた風が石畳の上の枯れ葉を巻き上げている。

マツマエの門に着いたディニンは、やはり廃人というのは救いようがない人種だな、とかぶりを振った。ディニンたち3人が門番に通行許可証を見せようと瞬間、背後から声をかけられ、振り向くとそこにはアキヤマとドリストがいたのだ。話を聞くにこの2人は昨晩行った風俗ですっかり金を巻き上げられ、装備一式とわずかな回復アイテムを除いては無一文らしい。昨日みたいな効率がいい狩りをして今晚も風俗に行きたいからぜひともパーティを組んでくれと、2人はディニンに頼み込んだ。ディニンとしてはミーナの絶対零度の視線が痛いので断りたかったが、彼らのあまりの必死さに負けてパーティを組むことになった。

無言でかかとを踏んでくるミーナに辟易してリリヤに助けを求め、リリヤはクスクスと笑うだけで助け舟を出す様子はない。年頃の女の子の眼前で風俗通いの金がほしいなどと言つてのけた2人の友人を恨めしげに睨んでから、ディニンは一行の先頭を歩き出した。

昨日とは違いマツマエ平原にはちらほらとプレイヤーの姿が見られる。防衛クエストに向けて訓練してるのか、それとも生活費を捻出するために狩りをしているのかはわからないが、戦闘経験を積むのは悪い傾向ではないとディニンは思った。異変が起きてから戦闘は若干様変わりしているので、慣れておくなら早い方がいいと考えたからだ。

歩くこと20分、半径5km以内に人がいないことを確認したディニンはおもむろに弓を取り出して矢を番えた。

青く光る刻印を刻まれた弓から、ディニンは名状しがたい力の波動を感じている。

弦を引き絞り、はるか遠くに視認した赤鬼の背に狙いをつけると――これまでに無く強烈に「中る」という予感がした。

いますぐにでも矢を放ちたかったが、チャージを発動させて赤鬼を凝視し続ける。

5秒、10秒、20秒――赤鬼がふとディニンのほうを向いた瞬間、ディニンは矢を放った。

矢が放たれたと思った次の瞬間、4kmほど離れたところに居た鬼は上半身を折り取られ、衝撃で数多の肉片となって飛び散った。

千里眼を限界まで強化してディニンが見てみると、体長2mはあった鬼は原形をとどめていなかった。鬼が居た辺りは矢による衝撃波でクレーターができており、中央には大きめの肉片と血溜まりができている。

「これは、ひどい」

ディニンは呆然として呟いた。以前ならばせいぜい胸を貫いてリンゴ大の風穴を開けられればいい方だったのに、ルーンで強化した弓は鬼どころか地面まで決っている。

「どう、使い心地はいい？」

遠方を視認する術を持たないリリヤは、のんきな顔でディニンに尋ねた。

「なんじゃこりゃ」

ディニン以外のパーティの中で唯一 千里眼 を使えるドリストが、破壊の現場を一目見て言った。口をあんぐりと開け、目を見開いている。

「バランスブレイクってレベルじゃないな、おい」

思わず思考を停止していたディニンは、ドリストの言葉で意識を取り戻して言った。

「これ、僕の知ってる弓と違う……」

左手に持った長弓をまじまじと眺めていると、ドリストから状況を聞いた一行は信じられないようなものを見る目でディニンの弓を凝視した。

「とりあえず、確認の為にもう1射だけ試す。今度はちゃんと見えるように、視認できる距離で射てみるから」

「うん、お願い」

既に、魔力線を辿って一匹の青鬼がこちらへ向ってきている。今度は チャージ を発動せず、ディニンはただ矢を番えて鬼が来るのを待つ。

3分が経ち一行が青鬼を視認したことを確認すると、ディニンは矢を射た。

今回もまた矢が放たれたと思った瞬間に青鬼に矢が命中し、強固な筋肉に覆われた腹にバスケツトボール大の風穴を開け、矢が貫通すると同時に衝撃波が鬼を襲う。すると鬼の上半身と下半身をつなぎとめていたわずかばかりの肉が吹き飛び、青鬼は肉片となって飛び散った。首と足だけがかるうじて原形をとどめて転がっている。

矢は青鬼の腹を貫通し、青鬼の数十メートル後方に突き刺さっていた。衝撃で地面の一部が弾き飛ばされ、芝生に覆い隠されていた土が露出している。

「なるほど、これはすごい」

リリヤが感嘆の声を上げた。その横ではミーナが驚きに目を見張っている。

「めちゃくちゃだなあ、これ……」

アキヤマが呆れた顔でそう言った。

「まあ、異変以来ゲームバランスなんてあってないようなものだけど……さすがにこれはひどい」

リリヤはそう言ってため息をついた。

「この分だと、ミーナのサーベルもすごいことになってるかな。ルインはまだ7個しか刻んでないけど、ディニンの弓を見る限り 加

速 4つと 斬撃強化 3つでも充分鬼スペックだよな」

そう言われたミーナはサーベルを抜いてまじまじと刀身を眺め、複雑そうな顔をした。身を削るような努力をしてエクストラソードスキルを手に入れた彼女にとって、全く努力をせずに力を手に入れるのは納得がいかないのだろう、とディニンは推測した。ディニン自身は強い弓が手に入るなら儲けものだと思直に喜ぶが、廃人というのは往々にして面倒くさいこだわりをもっているものだと思ディニンは長年のプレイ経験から理解していた。

「まあ、時間も勿体無いし狩りを始めようぜ。ディニン、昨日みたいに魔力線ばらまいてくれよ」

ドリストが提案すると、一行は皆賛同した。

「それじゃあ、行くよ——」

ディニンが手当たり次第に何本か矢を飛ばす。前回と同じように囲まれるのは危険が伴うので、前方に扇状に広がるようにイメージして矢を射た。

次々と襲い掛かってくるモンスターを、3人の剣士が切り刻んでいく。

「疾風剣、飛燕の型！」

「トワイライト・エッジ！」

「ソード・オブ・ザ・ダウン！」

アキヤマ、ドリスト、ミーナの3人は戦いの高揚感からか、恥かしげも無く技の名前を叫びながら剣を振るっている。デニンとリリヤは手持ち無沙汰にしながら遠方からやってくる敵を攻撃したり、回復を飛ばしたりしている。3人の剣士の殲滅速度が速すぎて、援護の必要がほとんどないのだ。

戦闘開始から既に3時間が経っているが、3人はろくに傷らしい傷も負っていない。ドリストは突出したAGIの高さで、アキヤマは剣術スキル熟練度の高さで、ミーナはエクストラソードスキルとAGIを上げるエンチャントを用いて、それぞれ敵の攻撃を捌ききっている。正確には、敵が攻撃する前に斬って斃してしまっている。

アキヤマの振るう長刀は美しい弧を描き、鬼の獲物を掻い潜ってその首を切り飛ばす。アキヤマは相手の攻撃にあわせてカウンターで致命傷を与えるスタイルが性にあっているらしく、次々に襲い掛かってくる鬼の攻撃を避け、全ての鬼を一太刀で仕留めていく。

ドリストの偃月刀が左右から襲ってきた2匹の鬼の武器を受け流し、ダークエルフは優雅なステップを踏み込んで両の鬼の胸に偃月刀を突き刺す。最後の力を振り絞って抵抗しようとした鬼たちを蹴り飛ばし、ドリストは偃月刀を鬼の胸から引き抜いてよろめいた2匹の喉を切り裂いた。鮮血が飛び、鬼の巨体が地面に倒れる。彼は熟達した受け流しと素早い身のこなしを用いて、2本の偃月刀で手

数を稼ぐ戦法を得意としていた。

ミーナの操るサーベルは縦横無尽に動き回り、獲物に襲い掛かる蛇のごとく緩急のついた動きで次から次へと命を刈り取っていく。ルーンの加護によって強化されたサーベルは目に見えないほどの速さで動き、その斬撃は鋼のような筋肉に覆われた鬼の肉体を、溶けたバターを切るかのようにやすやすと切り裂く。エクストラソードスキルによる独特の歩方によって、それほど早く動いていないにもかかわらず鬼の攻撃を紙一重でかわしている。彼女は他の者には真似できない剣術と体捌きでモンスターを翻弄していた。

最初のうちは熱くなって戦いに熱中するアキヤマとドリストを覚めた目で眺めていたミーナだが、アキヤマに挑発されたことで冷静さを投げ捨ててすさまじい勢いで剣を振るっている。

時折背後から沸いてくるモンスターは新魔法の実験台にするからとリリヤが全て倒してしまうので、ディンは暇を持て余していた。弓を射ようにも高速で動き回る3人が障害となるのでそれは不可能だ。

モンスターの沸きはまだまだ収まるところを知らない。3人の剣士の殲滅速度よりも少しだけ遅いかというくらいのペースで、わらわらとやってくる。

モンスターの死体が邪魔なので一行は少しづつ移動しながら戦っている。モンスターの死体から流れ出る血液で小さな川が出来てしまっほど、あたりには死体が散乱していた。定期的にリリヤが消臭の魔法を使っていなければ臭さに鼻が曲がっているだろう、とディンは考える。以前は実装されていなかった魔法だが、家のメイド

に教えてもらったのだとリリヤは言っていた。

ディニンが周りを見回すと緑一色だった平原はディニンたち一行の周囲だけ赤く染まっている。モンスターの血は芝生の栄養になるんだろうか、などとディニンはくだらないことを考えた。

3人の剣士のうち、ディニンが見たところ殲滅速度が一番速いのはミーナだった。右手でサーベルを操りながら左手で魔法を使い、すさまじい速さでモンスターを屠っている。全身に返り血がべったりとついており、唯一そのサーベルだけが青い光を放っていた。どうやら水をはじく加工がしてあるらしく、サーベルには血が付着していない。

返り血を浴びながら笑いを浮かべている3人の剣士を見て、ディニンとリリヤは顔を見合わせてため息をついた。

「ミーナったら、柄にも無く熱くなっちゃって……」

「なんというか、あそこまで負けず嫌いだとは思わなかったよ」

リリヤの呟きにディニンが答える。ミーナと友人づきあいを始めてからまだ一週間も経っていないが、ディニンは意外な一面を見た気分だった。ディニンの知るミーナは内輪では年頃の女の子らしい一面を見せるが、外では冷静な軍人を連想させるような人間だったのだ。それほど親しくないプレイヤーに挑発されて熱くなるというのは、彼にしてみれば少々意外なことだったのだ。

日が暮れてからもモンスターの沸きはとどまることを知らず、やむなくリリヤの魔法で草原に火をつけてあたりを照らしながら狩り続けた。火が消えないようにと、暇を持て余したディニンがモンスターの死体を焼いている。モンスターの死体は生物にしては良く燃えるので、日が暮れてから一時間ほど経つと小山のように積まれた死体で巨大なキャンプファイアーが出来ていた。

剣士たちもさすがに疲れたらしく、今は3人は焚き火の傍で休んでいた。襲い掛かってくるモンスターたちはディニンの矢とリリヤの新魔法によって斃されていく。

さらに1時間ほど経つと、ようやくモンスターの沸きは止まった。

「ああ、確かにきついけどこれは儲かるね」

鬼の角を剥ぎ取りながらリリヤが言った。以前とは違い、斃してから何時間経つても死体が消えないので剥ぎ取れる素材の量が尋常ではないのだ。100匹以上の死体を火にくべたとはいえ、今回の狩りでは下手をすれば1000匹以上のモンスターを狩っているのだ。一行は松明をかがげ、散乱する死体からめぼしい素材を剥ぎ取っていった。帰る時間が遅くなると美容に悪いというミーナの主張によって、時間短縮のため高価な素材だけを剥ぎ取ることにしたのだ。

「ふう、さすがにキリが無いからこれくらいにしておこう」

30分ほど剥ぎ取り作業を続けてから、リリヤが呟いた。ミーナが賛成し、他の面々も口々に賛同する。

「それにしても、よくまあこれだけ狩れたよね。ディニンさまさまだよ、まったく」

ミーナがそう言うと、他の面々がいつせいに頷いた。異変が起きてから狩りの効率が悪くなっているというのは戦闘メインのプレイヤーなら誰もが知っていることで、それだけにこれほどの効率を叩きだせるディニンの弓に彼らは感謝しているのだ。

「じゃ、帰ろっか」

リリヤがそう言うと一行は煌々と輝く冬の星空の下、マツマエの街へと夜の草原を歩き始めたのだった。

7話（後書き）

そつえば拍手設置しました。

8話（前書き）

少し中途半端になりました。早朝に次話を投稿しようと思います。

8話

「おかしいな、引けないぞ」

細部にまでルーンが刻み込まれたデイニンの弓を握って、ドリストが困惑した様子で言った。

狩りからの帰り道、ドリストがデイニンの弓を試してみたいと言ったことがきっかけでその翌朝に弓の修練場でドリストに弓を貸すことになったのだ。

「少し貸してみしてくれる？」

首を傾げるドリストから弓を受け取り、デイニンは自分の弓を構えた。そのまま練習用の矢を番え、的に狙いをつけて射る。

ろくに引き絞らずに射た矢は壁にかけられた的にめり込み、轟音が響き渡った。

「引けるじゃないか。もういっかい試してみたら？」

弓に不具合がないことを確認し、デイニンはドリストに弓を手渡した。

ドリストは渡された弓を握り、矢を番えて弦を引こうとするが、どれほど力を入れても弦が引けない。不思議な事態に2人は混乱したが、少し経ってからドリストは原因を察した。

「そうか、熟練度制限が上がったのか」

強力な装備は、いくつか条件をクリアしなければ装備できないのがMWOの仕様だった。ルーンによって強力になった長弓は装備制限が上がったのだろうとドリストは考えたのだ。

「洋弓スキルでも和弓は装備できたはずだ。だとしたら……ドリスト、スキル熟練度いくつ？」

「異変前は121だった。だから、少なくとも見積もってもそれ以上の熟練度が要求されてるんだろうな」

ディニンの問いにドリストが答えた。

ディニンの和弓スキル熟練度は623だった。ということはこの弓の要求熟練度は122以上623以下ということになる、とディニンは結論を出した。

「鍛冶屋の鑑定スキルで武器情報は閲覧できたはずだ。異変後も鑑定スキルは普通に使えるらしいから、そこらへんの鍛冶屋に持ち込んで見てもらうのが手っ取り早いだろうな」

ディニンはドリストの言葉にうなづき、弓を背負って修練場を出た。ドリストはこの後剣の修練場に行くといっていたので、ディニンとはここで別れることになる。

修練場を出たディニンは、防衛軍の本部へと向かう。今朝になつてからスタッフから手紙が届いて、今日の午後から本部にて会議を行うので来られたし、ということと呼び出されたのだ。手紙にはディニンの宿から本部までの詳細な道のりが記された地図が添付

されており、それを頼りにディニンはマツマエの街を歩いていた。

和洋の建築物が混在した独特の街並みを歩いていると、ディニンは街角でプレイヤーがビラ配りをしているのを見つけた。彼がビラを一枚もらって読んでみるとどうやら防衛軍が発行したものらしく、昨日見かけた高札に書かれていたことがより詳細に書かれている。裏面の編集者一覧というコーナーにグスタフの名前を見つけて、ディニンはあの若者のワーカーホリックぶりに呆れ返った。

今日のマツマエは陰気な曇り空だ。今にも雨が降りだしそうな天気だから、NPCも外出を控えている。ディニンは露天で唐傘を買って巾着にしまい、急ぎ足で防衛軍本部へと向かった。

防衛軍本部はリリヤの邸宅の3倍ほどの大きさの洋館だった。3階建ての豪華なつくりで、門の前では選挙ボランティアよろしく2人のプレイヤーがビラを配っていた。ディニンが巾着から招待状を取り出して2人に見せると、守衛の役目もかねていたらしい彼らは恭しく礼をして、ディニンを中へと通した。

弓とコートを巾着にしまい、NPCに案内されて会議室へと歩く。高い天井からは洒落たデザインのシャンデリアが吊るされており、品のいい模様の絨毯は適度に柔らかい。廊下の各所には花が生けられた花瓶が置かれており、かぐわしい芳香がディニンを楽しませた。

NPCが会議室の重々しい扉を開けると、中から長身で体格のい

い男が進み出てきた。おそらく人間種族でアバターの設定年齢は40前後だろうとディニンは当たりをつける。NPCが一礼して立ち去り、男は口を開いた。

「私はギルド サウザンナイツ のマスター、ヴォルテールだ。僭越ながら防衛軍の将軍を務めさせてもらってる。名前を伺ってもいいかな？」

苦み走った男前な顔から誠実そうな雰囲気かじみ出ているその男は、礼儀正しく名乗ってからディニンに名前を尋ねた。ディニンは無愛想ながらもいやみなところがないヴォルテールに好感を持ち、礼儀正しく名乗り返した。

「弓兵隊長を務めさせていただくことになった、ディニンと申します」

ヴォルテールはディニンの名前を聞くと小さくうなづき、言った。

「なるほど、君がディニン君か。話はグスタフから聞いている、入ってくれたまえ」

ヴォルテールが右手を差し出して、ディニンが握手に応じる。歴戦の戦士を思わせるがっちりとしたその手を握り、ディニンはヴォルテールを頼りがいのある男だと直感した。

「会議まではあと20分ほどある。親睦会の意味合いもかねて立食パーティの形式にしたので、ぜひ交友を広げてくれ。私は少し仕事があるので失礼させてもらっ」

そう言って、ヴォルテールは部屋から出て行った。

部屋の中には50人ほどのプレイヤーがいて、それぞれが食事や会話を楽しんでいる様子だった。男性プレイヤーの数が圧倒的に多いが、中には女性プレイヤーもいる。ディニンは給仕からワインをもらい、カウンターに用意された料理からいくつかの中華料理をさらに載せて知り合いがいなか探し始めた。

「ディニンさん、こちらです」

グラスと取り皿を片手にきよろしていると、右後ろからディニンを呼ぶ声がした。彼が振り返ると、グスタフが手招きをしているのを見た。

「やあ、グスタフ」

ディニンが挨拶をして近づくと、グスタフと同じテーブルで談笑していた2人の男性プレイヤーがディニンに気づき、グラスと皿をテーブルに置いて挨拶してきた。

「こんにちは、ネクロマンサーのヒルトルです。ギルド ナイツ・オブ・アーツのマスターをやっています」

「どうも、ギルド無所属のディニンと言います」

ヒルトル氏は瘦身のエルフで、学者然とした細面のプレイヤーだった。ふちなしの眼鏡をかけており、知的な雰囲気を漂わせている。

「おや、君は確か……」

同じテーブルのもう一人の男性プレイヤーが、そう呟いて驚いた

ような顔でディニンを見た。ディニンが彼の方に顔を向けると、なんとその男性プレイヤーは以前街中でぶつかった紳士だった。その節はご迷惑をおかけしましたとディニンが謝ると、あの時は私もきつい口調でとがめて申し訳なつた、と紳士は頭を下げた。

「ああ、自己紹介がまだだったね。私は無所属の アルケミストでオストワルトという」

「僕は無所属の レンジャー でディニンと言います」

2人が握手を交わして微笑みあうと、グスタフが言った。

「先ほかがかったことですが、ヒルトルさんとオストワルトさんは医者と化学者だったそうですよ、ディニンさん。お二人にはその知識と経験を生かして特別な仕事をしてもらおうと思っています」

「医者とはいっても、ストに参加してクビになった解剖医だけだね」

私のギルドと一緒にストに参加した同僚や友人たちと立ち上げたんだ、とヒルトルは付け加えた。

「ストっていうと、8年前のあれですか？」

ディニンが聞き返した。

「ああ、僕は一応スト連合の役員だったからね。訴訟に勝ったはいもののクビになって、どこも雇ってくれないから高等遊民として過ごしていたんだ。幸い訴訟で何億円も手に入れたから、同僚と一

緒にMWOを始めたのさ」

「ディニンたちが言っているのは、ディニンがまだ高校生だったころに起こった医師・看護師による大規模なストライキのことだ。とある大学病院で立て続けに7人も医師・看護師が過労死し、それをきっかけに全国規模で法律の改正を求めるストライキが展開され、世間を大いに賑わせた大事件である。過酷過ぎる労働環境におかれた医療従事者に同情する意見とストライキによって十数人の患者が死亡したことに憤る意見とで国民が真っ二つにわかれ、マスコミでも連日のように議論が行われていたことをディニンは今でも覚えている。」

「ちなみに、今は魔法と医療技術を組み合わせで新しい治療法を研究しているよ。ここ数日はネカマ・ネナベの声が中の人準拠になっているのを、声帯を手術して治す方法を研究しているね。ネクロマンサーの魔法で新鮮な死体を用意して、もともと外科医だった友人がオペの勘を取り戻している最中さ」

「この調子でいけば日本の医療水準なんてあっという間に追い抜けるだろうね、とうれしそうな顔で話すヒルトル。」

「なるほど、やはり魔法使いの皆さんは早速応用を始めていますか」

グスタフが呟くと、オストワルトが答える。

「私は 錬金 の魔法で化学物質や金属の生産を研究している最中ですね。周期表と元素記号を用いれば簡単に貴金属・宝石等が作れますぞ」

そう言って、オストワルトは巾着から金属の塊を取り出し、テー

ブルの上に置いた。

「こうやって鉄の塊に呪文を唱え、原子核の構造をイメージしながら魔法を使うと……ほら、このとおり」

指揮棒型の杖を鉄の塊に突きつけ、オストワルトは呪文を唱えた。すると、金属は白く発光し始め、やがて一瞬だけカメラのフラッシュのごとく強く輝き……先ほどまでそこに鎮座していた金属は、金塊に変わっていた。

「純度99.9%の純金に変わるわけです。まさに錬金術ですな」

突然の発光の原因が気になったプレイヤーたちが、オストワルトが得意げに掲げた金塊へと目を向け、驚きに目を見張っている。

「錬金 の魔法は使えなくなかったはずでは……」

ディニンの隣では、ヒルトルが呆然とした顔でオストワルトの掲げる純金を眺めていた。

「錬金が使えなくなったというアルケミストたちは、おそらく化学をともに勉強してこなかったのでしょう。金属の化学式と構造が理解できていれば、以前よりMP消費を抑えて錬金が可能ですぞ」

咳払いをしてオストワルトが言うと、プレイヤーたちは興奮した面持ちで近くのものたちと話し始めた。グスタフははじめから知っていたようで、平然とした顔でワインに口をつけている。

「これも、君の計画のうちなのか？」

ワイングラスを揺らして香りを嗅いでいるハイエルフの美少年に、
ディニンは尋ねた。

「ええ、人材のスカウトは組織作りには欠かせませんから」

ニコリともせずに言い放ち、グスタフはワインを一気に飲み干した。

「ずいぶんとまた不味いワインだ。それはともかく、僕はそろそろ用事があるので失礼します。まもなく会議が始まるので、今のうちに食べたいものを食べておくといいですよ」

ワインに関してはグスタフに全面的に同意だった。少なくともこれは客人に出していいものではないとディニンは考え、味わうことをせずにワインを飲み干した。彼はワインに詳しいわけではないが、それでもこの異様に口当たりの悪いワインは10人が飲めば10人とも不味いと断言するだろう、と顔をしかめた。

絡み付くような後味の悪さをごまかすために中華料理をかき込んでいると、やがて会議室の壁際に設置されていた演台にヴォルテールが立ち、力強いバリトンで演説を始めた。

「諸君、今日は集まってくれてありがとう。私は防衛軍將軍のヴォルテールという。今回の集会は、われわれ防衛軍の人事の最終決定について、諸君に伝達し、賛成を得るためのものである」

部屋に集まったプレイヤーたちは料理とグラスをテーブルに置き、静かにヴォルテールの話に聞き入っている。

「部隊編成及び防衛計画については、参謀のグスタフ君が発表する――グスタフ君、よろしく頼む」

ヴォルテールはそれだけ言って、演台から降りた。入れ替わりに赤いローブをまとったハイエルフの美少年が演台に立ち、話し始めた。

「はじめまして、防衛軍参謀のグスタフと申します。今回は防衛軍の部隊編成及び人事の決定案について皆さんにお知らせします」

グスタフのソプラノにはヴォルテールのような力強さはない。しかし彼の抑揚には不思議と人を惹きつけるものがあり、会議室に集まった人々は物音ひとつ立てずにグスタフの話を聞こうとしていた。

「現在の防衛軍の参加人数は約1300人。防衛クエスト時の人数は最低でも1500人には届くでしょうから、1500人という人数をクエストに参加する人数だと仮定して話を進めます」

グスタフは資料の一つも持たず、会議室にいるプレイヤーたちの目を順々に見据えながら話し続ける。

「1500人のプレイヤー。これは、防衛クエストをクリアするには十分な人数でしょう。しかし、それは昔の話です。現在、プレイヤーは死んだら復活できませんし、モンスターの沸きは非常に不規則でつかみ所がありません。1500人をそろえれば勝てるなどというのは、非常に甘い見通しです」

静かな声で、しかし説得力に満ち溢れた声で、グスタフは説明を続ける。

「大前提として、マツマエの街にモンスターを侵入させないこととプレイヤーの死亡を避けること。この二つを目標に、大まかな方針を立てました。まず、モンスターの殲滅は魔法職と弓職が行います。仕様が大幅に変化したため、近接戦闘職がモンスターと接触した場合、思わぬ事故が起こる確率が非常に高いので、事故死を避けるためには仕方のないことです。これによりゲーム時代より殲滅速度は大幅に下がりますが、同時にプレイヤーの死亡率も大幅に下がります」

近接戦闘職は戦わないと聞いて一瞬だけ会議室はざわめきに包まれたが、グスタフが話し始めるとすぐにざわめきは収まり、再び会議室は静寂に包まれる。

「クエストの仕様が以前と同じだとすれば、モンスターたちは北から攻めてくるはずです。マツマエの4つの門のうち北門だけは開放し、街を囲む防壁の上と門のすぐ内側に魔法職と弓職を配置してモンスターを殲滅します。ほかの門には壁職と回復職を回し、モンスターの殲滅は行わずにひたすら門を守っていただきます。モンスターは朝に現れて日が暮れば撤退しますから、壁職の方は3交代制で門の守護を行ってもらいます」

「クエストが朝から夕暮れまでなのはゲーム時代と同じだが、なぜその情報が正しいといえるんだ？」

グスタフがいったん言葉を切ると、ディニンからはだいぶ離れた

テーブルの男性プレイヤーが質問した。

「藩主の許可を得て過去の資料を漁っていたときに見つけた情報です。街の住人にも確認を取りましたから確かな情報です」

納得しましたか、とグスタフが聞き、男は頷いた。

「基本的な戦略に関しては以上です。詳しいことはそれぞれの舞台の責任者と話し合って詳細を決定します。ちなみに魔法職と弓職に關してですが、最も懸念されているのは矢やMP回復薬の枯渇です。そこで兵站に關しても新たに部隊を設置し、全体のアイテムの調整を行わせます」

「いいだろう。それでは、人事の発表に移ってくれたまえ」

ヴォルテールが満足げに頷いて、話の続きを催促する。グスタフはヴォルテールに会釈し、再び聴衆に向き直って話を始めた。

「設置する部隊は全部で八つ。防御部隊、遊撃部隊、攻撃魔法部隊、補助魔法部隊、回復魔法部隊、弓兵部隊、兵站部隊、参謀部隊です。それぞれ隊長はラインハルト氏、ナナマカド氏、くまばん氏、レイーク氏、ローウェル氏、ディニン氏、リリヤ氏、そして僕です。副隊長については後に各部隊長に伝達するので、各部隊長からお聞きください」

リリヤの名前が呼ばれたことにディニンが驚くと、後ろから背中

をつつかれる。彼が驚いて振り向くと、案の定そこにはいたずらっぱい笑みを浮かべたリリヤが立っていた。

「いたなら言ってくればいいのに」

「さっきグスタフに聞いたばかりだからね。驚かそうと思ったんだ」

口を手当てて顔だけで笑うリリヤに、ディニンは肩をすくめた。

「では、それぞれの部隊についてまとめた資料をお配りします。わからないところがあれば僕に質問してください。それでは、隊長と副隊長は僕から話すことがあるので、奥の部屋へきていただけますか？ ほかの皆さんには將軍からお話があるので、そのままお待ちください」

そう言って、グスタフは演台を降りて奥の部屋へと入っていった。同時に、何人かのプレイヤーが資料を配り始める。

リリヤとともにグラスと皿を片付け、その途中で資料を受け取ってから、ディニンは奥の部屋へと入っていった。

8 話（後書き）

拍手してくれたかたがた、ありがとうございます。暖かいメッセージに執筆意欲がわいてきます。

9 話（前書き）

字数の調整のため少々短くなりました。すいません。

9 話

会議室より少々手狭なその部屋では、重厚な木製の円卓に16人のプレイヤーが集っていた。

ディニンはリリヤの隣の椅子にかけ、出されたコーヒーに口をつけた。コーヒーを飲まずに手持無沙汰にしているリリヤを見て、そういうえばコーヒーは駄目だと言っていたな、と思い出す。

皆と同じように椅子に掛けたグスタフが紙の束をぱらぱらとめくって話し始めた。

「では、ここに集まった16人のプレイヤーのみなさんには今後3週間にわたって防衛軍の中核となっていいただきます。まずはじめに現在の兵力を具体的にまとめた資料を配るので、各自目を通しておいってください。言うまでもないことですが、この資料は極秘扱いをお願いします」

グスタフが立ち上がり、一人一人に紙の束を渡していく。ディニンが資料を受け取ってちらりと目を通してみると、どうやら当日の配置と現在の兵数が書かれているようだった。

「3週間の間に、それぞれの部隊で何度か顔合わせと訓練を行っておいてください。訓練の場所や方式についてもいくつか案をまとめておいたので、のちほど資料でご確認をお願いします」

「訓練っていうけど、どうやって段取りをつけるの？ 何百人ものプレイヤーを集めるのは大変だと思うけど」

グスタフがいったん言葉を切ると、すかさずリリヤが質問した。

「訓練の3日前に僕に知らせていただければなんとかできます。マツマエの街にも郵便システムはあるようなので、それを使います」

グスタフが説明し、リリヤは納得した顔になって着席する。

「次に、部隊間での連携や連絡手段に関して説明をします。まず…

…」

グスタフによる説明会は1時間あまりも続いた。彼の話術は見事で、配った資料をもとにテンポよく話を進めていき、頭の回転が速いほうではないディニンでも理解できるようなわかりやすい話し方だった。

「それでは、これで本日の説明を終わります。最後に各自に自己紹介をしてもらって、締めくくろうと思います。ではディニンさんから時計回りで自己紹介をお願いします。名前、ジョブ、ギルド、ステ振りをお教えてください」

グスタフがディニンに自己紹介を促し、ディニンは立ち上がった。大勢の前ということで緊張したが、グスタフが説明の合間にはさんだ小粋なジョークで場の空気はやわらかくなっていたので滞りなく自己紹介をすませることができた。

自己紹介を終えたディニンがため息をついて着席すると、左隣のハーフ・オーガの男性プレイヤーが立ち上がり自己紹介を始めた。

ディニンは配られた羽ペンで資料の余白にプロフィールをメモしながら自己紹介に聞き入る。

ちょうど真向かいに座った男が立ち上がったとき、ディニンはなんとなくいえない不快感を感じた。目の前の男が自分に向ける視線がどうにも挑戦的な光を帯びており、どこか人を不快にさせるものがあったからだ。吊り目で痩身の男性エルフはなんとも聞き心地の悪い声で話し始めた。

「ギルド ナイツオブラウンド の筆頭 アーチャー、ロッシュという。弓兵隊の副隊長を務めることになったので、よろしく」

防衛軍將軍のヴォルテールと似た口調だったが、ディニンは彼の口上を聞いていよいよ嫌悪感を募らせた。ヴォルテールから感じた男らしさや貫禄がまったくいいほど感じられないので、ただ不遜な態度をとって大物ぶってるようにしか見えないと彼は心の中で目の前の男をこき下ろした。

その後も自己紹介は続いたが、その間ディニンは目の前の男からいやな視線を感じていた。粘着質で嫌味なその男へ目を向けると白々しく目をそらされたので、いつそう不快感が増す。リリヤは面白がるような目でディニンを眺めながらカップを口につけ、嘔き出した。コーヒーだということを忘れていたのだ。

それを見て気分が和み、ディニンは少しリラックスして手元の資料に目を落とした。

「自己紹介ありがとうございました。これにて、本日の会議は終了

とさせていただきます」

グスタフが言うのと円卓に集った面々は儀礼的に拍手し、立ち上がろうとした。しかし、ディニンの目の前の男、ロツシュの一言にぎよつとして座りなおす。

「参謀だかなんだか知らないけどよ、俺が副でどこの馬の骨とも知れねえそいつが隊長つてのは納得いかねえぞ」

あんまりといえはあんまりなロツシュの台詞に、ディニンは眉をひそめた。少なくとも弓に関してなら和洋を問わず自分が一番だとディニンは思っているし、目の前の男の雰囲気も気に入らなかった。

「しかし、人選に関しては將軍と僕とで相談して決めたんです。いまさら文句を言われましても……」

「おいおい、どういう基準で選んだんだ？ 俺は大手ギルドの筆頭アーチャー、コイツは聞けば無所属だつていうじゃねえか。フン！」

釈明するグスタフがいつもの鋭い舌鋒をどこへやらしまいこみ、弱気な少年を装っていた。弱弱いその様子に、部屋にいた者たちは同情の目を向ける。彼らはグスタフの頭の良さを認めていたが、その容姿や声変わり前のものと思われる高いソプラノからグスタフの年齢をかなり低く見積もっていたのだ。何人かのプレイヤーはロツシュに非難のまなざしを向けるが、ロツシュはそれに気づかずに因縁をつける。

「スキル熟練度や戦闘経験、プレイ年数なども考慮した結果なので……」

「熟練度お？ ハン、悪いが俺は5年も弓を使い続けてるんだ、熟練度で負けるつもりはないぜ。おいお前、熟練度いくつか言ってみるよ。俺は389だぜ」

つばを吐き散らしながらグスタフに言いがかりをつけていたその男は、その矛先をディニンに変えたようだった。何が男をそこまで駆り立てるのは知らないが、ディニンも相当腹が立っていたので大人気なく言い返す。

「弓スキルの熟練度？ 623だけど、何か？」

ディニンが皮肉っぽく言うと、男は冗談だと思っただけで、醜くゆがんだ顔をディニンに近づけてつばを吐きながら嫌味を言ってきた。

「ろっぴやくにじゅうさん？ おいおい、見栄っ張りも大概にするよ。いいから本当のことを言えって」

「水を差すようで悪いけど、彼の熟練度は確かに623であってるよ。保証しよう」

ディニンが男を殴りつけることを検討し始めたとき、横からリリヤの澄んだ声がした。

「おいおいねーちゃん、アンタさっきからコイツと仲良くしてたみたいけどひょっとしてデキてんのか？ それに、客観的な証拠つけてやつがねんだから、アンタが何を言おうが説得力はないわけだ。もう少し頭使おうぜ、美人なんだからよ」

ロツシュの下卑た笑いに、リリヤの顔から表情が消える。この瞬間、部屋にロツシュの味方は誰もいなくなった。

先ほどの澄んだ声とは似ても似つかない冷たい声で、リリヤは言い放つ。

「君みたいな下衆、なんでここにいろの？ 生きてるだけで迷惑だから死ねばいいよ、社会の底辺。言葉の端々から低学歴がにじみ出てるんだよ、ばーか。それとディニン、例の弓を出してみてもいつに引かせてみな。思うに、それで問題は解決する」

リリヤの毒舌に顔を引きつらせながら、ディニンは彼女の意図を理解して巾着から弓を取り出す。

つまり通常ではありえないほどの強化をされたこの弓は、ロツシュ程度の熟練度では扱えないだろうと彼らは踏んだのだ。リリヤは何度か行った実験の結果から、ディニンは一流の弓士としての直感からそのことを確信していた。

「おお……」

ディニンが巾着から青く光る弓を取り出すと、部屋のプレイヤーたちが思わず声を漏らす。それほどまでに弓は美しく、幻想的だった。

ロツシュはディニンが取り出した弓の美しさに一瞬だけほづけたような顔をしたが、次の瞬間弓を指差して笑い出した。

「おいおい、言うに事欠いて和弓かよ。そんな使えない武器で何ができるってんだ」

ディニンは今からリリヤと結託してこの男を殺すことを真剣に考

え始めたが、グスタフが向けてくる強い視線が気になり、とりあえずはロツシュに弓を引かせることにした。こんな男になど弓を触らせたくないが、ロツシュの悔しがる顔につばを吐きかける妄想をしながらディニンは弓を手渡そうとする。

「試算では、その弓を使うには約600の熟練度がいるはず。とりあえず引いてみるよ、引けなかったら負けを認めて土下座しろ」

リリヤがそう言うと、ロツシュは馬鹿にした様子で鼻を鳴らした。

「ケツ、ハツタリかまそうったって無駄だぜ。せいぜい吠え面かきな」

ディニンの手から弓をひったくるようにして奪い取り、ロツシュは乱暴な手つきで矢を取り出し、番えようとする。

が、大方の予想通り弦はぴくりともしなかった。ロツシュは真っ赤になって力を込めるも、やはり弓を引くことはできない。息を切らした彼は癰癤を起こして弓を投げ捨て、ディニンに殴りかかる。ロツシュの拳が頬に当たると思った瞬間、リリヤが唱えた魔法によってロツシュは体勢を崩した。その隙を逃さずディニンは全力でロツシュを殴り、和弓をひくために鍛えられていたSTRが遺憾なく発揮され、ロツシュは壁にたたきつけられ苦痛に呻いた。ずるずると床に伸びたロツシュにディニンがつばを吐きかけると、何人かのプレイヤーがまねをしてロツシュにつばを吐いた。その様に眉をひそめるプレイヤーもいたが、彼らとしてもロツシュの行動は弁護できるものではないので特に何も言わなかった。

「ハッ、大口たたいてそれかよ。無様だな」

ディニンがそう吐き捨て、リリヤが唱えた呪文でロッシュは拘束された。

「どうやら、人選にミスがあったようです。弓兵隊の副隊長に関しては選考をやり直すので、今日はこれにて解散してください」

すかさずグスタフが言い放った一言に、場は騒然となる。が、彼が身振りで退出を促すと肅々と部屋を出て行く。この短い時間でグスタフはそこまで信頼されるようになっていた。

「ディニンさん、副隊長については後日宿に手紙を送ります。迷惑かけてどうもすいません」

地面に横たわって気絶していたロッシュの顔を踏みつけていたディニンは、グスタフの声に振り返って答えた。部屋からはすでにリリヤ以外は退出している。リリヤはロッシュの顔にインクでなにやら書いているらしく、復讐の悦びに官能的な笑みを浮かべていた。

「この男はどうするんだ？」

「実は軍の一部に試験的に治安維持を任せようと思っていたところなので、この男は囚人一号ということで用意した牢獄に入ってもらいます。罪状は適当にでっち上げられますし、治安維持部隊の設立は必須事項だったんでいいカモが手に入りました。この男はあとで僕に暴力を振るったことにしておくので、口裏を合わせてくださいね」

有無を言わせない笑顔でグスタフは言った。ディニンは面倒ごとにかかわりあう気はなかったので口裏を合わせる約束をして、満足

した様子のリリヤとともに部屋から出る。ロッシュの顔には黒インクでさまざまな放送禁止用語が書かれており、リリヤによるとそのインクはルーンに用いるもので絶対に消えないのだとか。すっきりした2人はさわやかな笑顔で笑い合い、廊下でハイタッチした。

10話（前書き）

ついったーはじめました。
↓ <https://twitter.com/baenre72>

10話

「ところで、このあと生産に使う素材なんかを買いにいくんだけど一緒にどう？ 今日外で夕食を食べるって言うてあるんだけど、どうにもひとりで夕食というのはなれなくて……」

「ああ、僕でいいなら喜んで」

防衛軍の本部を出てから、リリヤが誘ってきた。ディニンとしても時間をもてあましていたので喜んで賛同する。

刻印術士 はインクに魔力を込めて使うことが多いが、ルーンの種類によっては魔物の血を使うこともあるし、金属や木材に刻み込む際は専用の道具をそろえなければならぬ。リリヤによると道具はそろっているらしいが、どうにもサイズが合わないから買い換えるのだそうだ。

石畳の道をリリヤとディニンは肩を並べて歩く。2人とも身長は175cmに設定してあったので、頭の位置はぴったりとそろっていた。太陽は沈みつつあるが、しかしまだ日暮れまで時間はある。2人はのんびりとした歩調で市場まで歩き、以前は入れなかった店をひやかしながら買い物を楽しんだ。

ハイエルフはエルフの中でも貴族階級にある者のことを指すらしく、ディニンたちはマツマエの住人に貴族の姫様とその従者という扱いをされた。ディニンとしてはそういう扱いは新鮮で悪くなかったし、リリヤはお姫様扱いされてまんざらでもない様子だ。

リリヤがインクや画材、彫刻刀などを大量に買い込み、ディニンは矢の生産素材を大量に購入する。防衛クエストではかなりの矢を消費するだろうと見込んで、リリヤに矢を強化してもらうことにし

ただ。幸い、リリヤは快くディニンの頼みを引き受けてくれた。ミーナの装備の調整が優先だからあまり期待しないようにと釘を刺されたが、ディニンは満足だった。

素材を買い終わったところで、リリヤが服を買わなければいけなかったことを思い出した。マツマエの商店は夜遅くまでやっているので、服屋に入って服を物色し始める。ディニンがアンダーウェアと革のコート、ズボンと上衣を買い終えても、リリヤの買い物は続いていた。女性の買い物に付き合ったことのないディニンは、うんざりすることなく新鮮な気分でリリヤの買い物を眺めていた。

リリヤはなかなかファッションにこだわるらしく、膨大な数の服を見てもなかなか満足できるものを見つけれないようだった。戦闘に用いる魔術師のローブは水色のものを数点購入していたが、私服の選考にはだいたい難航している様子だ。スカート類・ドレス類はすべて断り、女性用ズボンの中でもぴっちりしたものは断っていた。

店員と額をつき合わせて議論しながら服を選ぶ彼女の顔は、武器に刻むルーンを考えているときと同じ職人の顔だった。何着も試着してはつき返し、あれこれと注文をつけてほかの品を漁る。女性の店員も気難しい客の要望にこたえるべく、いやな顔ひとつせずリリヤと議論を交わしている。女店員はリリヤのような美人をコーディネートするのが好きらしく、ディニンの目にはむしろリリヤと同じくらい楽しんでいるように見えた。

ようやく彼女らが服を選び終えたところには8時を過ぎていた。店の奥で店主と雑談していたディニンはリリヤに呼ばれて店を出て、食事の場所を探し始める。

「アキヤマが話していたけど、この先を少し行っただけに旨い牛なべ屋があるらしい。行ってみない？」

「牛なべ屋？ いいね、そこにしよう」

ディニンの提案にリリヤが食いつき、2人はそのまま牛なべ屋へと向かった。夜のマツマエは昼とは比べ物にならないほど冷え込むので、何か温かいものを食べたかったのだ。

10分ほど歩くと、アキヤマの言っていた牛なべ屋が見つかった。2階建てのこじんまりとした建物に入り、コートを預けて中に入る。リリヤがハイエルフであることに気づいた女将によって2階の座敷に通され、しんと雪の降り始めたマツマエを眺めながら牛を煮込み始めた。

「いやあ、仙台牛を食べながら雪景色を眺めるなんて、ちょっと前まではできない贅沢だね。やっぱりこっちに来てよかったよ」

わりしたの染み込んだ霜降りを美味しそうに味わい、リリヤが言った。座敷は程よく暖まっており、雪景色を見ながら呑む酒は最高だとディニンは思った。

どれくらい時間がたったのだろうか。すでに2人は満腹だったが、マツマエの雪景色を肴に一升瓶を2本も空にしていた。それでも酔いつぶれる様子がないのは、人間種族ではないからだだろうか。2人ともほんのりと顔を赤くしているだけでほろ酔い加減だ。

ディニンとリリヤは雪景色を眺めながら、ときおり一言二言の言

葉を交わす。このすばらしい夜景を前にしてぺらぺらと喋るほど彼らは無粋ではなかったし、互いにそんな空気が心地よいと感じていた。

3本目の一升瓶を空にして、さすがに2人は立ち上がった。そろそろ日付が変わるし、いつまでも店に居座るのも悪いかと考えたのだ。

恭しく頭を下げる女将に金貨を十数枚渡し、目を丸くした女将を笑いながらリリヤは外へ出る。こんなに受け取れませんと恐縮する女将に、ならば傘を貸してくれと頼んでディニンは傘を借りた。雪はまだ降り続いており、石畳の上には雪が降り積もっていた。

ほかの客が借りていったのか、牛なべ屋には傘は一本しかないようだった。やむなく唐傘を一本だけ借りて、リリヤとディニンは肩が触れ合うほど近寄って同じ傘の下マツマエを歩く。普段ならこんなことはしなかっただろうが、酔いが回った2人はクスクスと笑い合っていた。

彼女の洋館までリリヤを送り、ディニンは唐傘を握り締めて自分の宿に向かう。とまらないかとも誘われたが、彼は宿の露天風呂に入って降りしきる雪を眺めるのも風流だろうと思いい宿へと帰ることにしたのだ。

彼が宿へ帰ると女将はすでに寝たようだった。巾着から鍵を取り出し、部屋に入って浴衣に着替える。足の長いエルフの体格に浴衣は似合わないが、ディニンはそんなことを気にする性格ではなかった。

た。彼は部屋の魔法式貯蔵庫に入れていた秘蔵の日本酒を取り出し、露天風呂に入りながら呑もうと考える。そういうサービスもこの宿ではやっているのだ。

ディニンは脱衣所で浴衣を脱ぎ、お盆に一式を載せて風呂に入る。彼が一通り体を洗ってから雪の積もった露天風呂に出ると、時間が遅いからか誰もいなかった。

宿はマツマエの中でも小高い丘の上に位置していて、露天風呂からは街の全貌が見える。いい気分になりながら日本酒に口をつけ、気持ちのいいほてりを感じながら雪景色を楽しむ。半身を風呂から出しているおかげで、風呂に入りながら酒を飲んでもそれほど火照らないのだ。

30分ほど露天風呂からの景色を楽しむと、さすがにのぼせてきたのかディニンは風呂から上がった。面倒くさくなって適当に浴衣を着て部屋まで戻り、彼は布団に倒れこんでそのまま寝付いたのだ。

翌朝、ディニンは女将が扉越しに呼ぶ声で目を覚ました。

「ディニン様、お客様がお見えですよー」

彼は寢覚めはいいほうだ。しかし、昨晚少し飲みすぎたせいでどこかぼんやりとしていた。のろのろとした仕草で浴衣を脱ぎ捨て、新しく購入した服を着る。

「どうしますー？ お客さん通していいですかー？」

「ああ、通してください」

どうせ、こんな朝っぱらからたずねてくるのはアキヤマかドリストだろう——彼はそう思って、顔も洗わずにぼけっとした顔で布団に寝そべっていた。もっとも、専用のツールによって作られたエルフの外見によってぼうつとしても美男子だったりするのだが、彼にはどうでもいい話である。

「おはようございます、あなたが弓兵隊長のディニンさんでよろしいですか？」

彼の予想を裏切って、後ろから聞こえてきたのは女性のものらしい、柔らかな声だった。ディニンがぎょっとして振り向くと、そこには妙齡の女性が一人立っていた。尻尾が生えているわけでもなく、また耳も普通なのでどうやら人間種族らしい、と彼は推測した。あわてて身だしなみを整えて立ち上がり、ディニンは自己紹介をする。

「え、えつと、はい、僕が弓兵隊長のディニンです。どうも」

コミュニケーション能力の低さと女性経験の無さが遺憾なく発揮され、ディニンは目の前の女性から目をそむけてどもりながら挨拶

をした——少なくとも、彼の目の前にいるプレイヤーは彼が親しくしているリリヤやミーナと違い、非常に女性的な体つきをしていたのである。どちらかといえば中世的で整った顔立ちのリリヤや子供らしいながらも凜とした顔立ちのミーナとは違い、この女性プレイヤーは可愛らしい顔をしているのだ。胸部に備えた巨大な母性の象徴もあいまって、ディニンは彼女を直視できずにいた。

あまりにも初心な反応を見せたディニンにくすりと笑い、そのプレイヤーは自己紹介をした。

「はじめまして、弓兵隊の副隊長になることになったカロリーヌです。挨拶に伺いました、師匠！」

「……師匠？」

ディニンは怪訝そうな顔で問い返した。彼はこのプレイヤーとあった覚えは無かったし、そもそも師匠と呼ばれるような心当たりは無かった。

「いえ、昔いちどだけ野良パーティで一緒にさせていただいたことがあって、その時からディニンさんを尊敬してるんです！ ぜひとも師匠と呼ばせてください！」

「えっ、えっと……」

突然の事態にディニンの思考は停止する。野良パーティを組んだ回数が多すぎて目の前の女性のことなど覚えていなかったし、そもそも彼はこういう元気な女性が苦手なのだ。リリヤもミーナもどちらかといえば饒舌なほうだが、しかし彼女たちは黙るべきときには黙れるだけの分別がある。ディニンは目の前の女性にはどうやらそ

の分別がなさそうだと直感していた。

「照れなくていいんですって、師匠。あっそうだ、部屋片付けますね！ 隊長の生活の管理も副隊長の仕事のうちですから！」

どうやら目の前の女は僕に嫌がらせをしにきたようだ、とディンは結論付けた。しかし彼の乏しい対人スキルでは角が立たないように彼女を追い払う方法など思いつくわけもないし、ただ黙り込んで経過を眺めることしか彼にはできなかった。

カロリーヌはお世辞にも手際がいいとはいえなかった。なににもない平坦な畳の上で転んだり、どこに何をしまえばいいのかわからずにおたおたと部屋中を駆け回ったり、その合間にやけになれなれしくディンに話しかけてきたり……リリヤならもっと手際よくやるだろうな、というのが彼の感想だった。

朝のさわやかな空気を静かに味わうのがここ数日の楽しみだったのに、と彼は恨めしく思いながら部屋の隅に立ち尽くす。彼の迷惑そうな表情に気づかないのか、いきなり押しかけてきた副隊長は部屋の片付けに精を出していた。善意からの行動のようだが、甲高い声が寝起きのディンにはひどく不快だった。

「……朝ごはん食べてくる」

ぼつりとつぶやいて、ため息をつきながらディンは部屋を出た。カロリーヌはディンが低血圧だとも思ったのか、不機嫌さを隠そうともしない彼に向かって甲高い声でいつてらっしゃいます、と

言つてのけた。彼女に背を向けたディニンは疲れた表情で首を振り、気落ちしながら座敷へと向かった。昨日の夜は最高だったのに目覚めが最悪だなんてついてない、と嘆きながら。とぼとぼと廊下を歩く彼の背中には、異変後で最大級の哀愁が漂っていた。

食事を終えて幾分か機嫌がよくなった彼が部屋に戻ると、部屋は酒浸しだった。

「なにこれ」

ディニンがあきれて言葉も出ない、といった様子でカロリーヌにたずねた。カロリーヌは泣いていたらしく、目を拭いて俯きながら答える。

「その、その貯蔵庫を掃除しようと思ってお酒をどかしたら瓶が割れちゃいました……」

割れた瓶はどうやら、金貨100枚以上はする貯蔵庫の中でもトップクラスに高い日本酒だった。さすがにディニンも堪忍袋の尾が切れ、カロリーヌに言った。

「君、僕に恨みでもあるの？ もういいから早く出てけよ」

怒っているというよりはうんざりしていると形容したほうが確だろうその語調に、カロリーヌはとうとう泣き出してしまった。その様子を見てディニンはいよいよ醒めた顔になる。

「すみません、悪気は無かったんです……」

悪気がなければいいという問題じゃないよね、といたいのをこらえてディニンはこめかみに青筋を立てる。

「……悪意が無いのはわかってるから。片付けは僕がやっておくから、もう帰っていいよ」

ディニンがそう言うとかロリー又は涙を拭いて立ち上がり、無言で部屋を去ろうとした――が。

「本当にすいません！ お詫びに、明日の午前中、デートさせてください！」

どうしてそうなる――ディニンがそういうおとした瞬間、すでにロリー又は部屋から出た後だった。あまりにも唐突でわけのわからない展開にディニンは頭を抱え、呟いたのだった。

「どうしてこうなった……」

10話（後書き）

波乱の予感

11話

部屋を片付け、女将に頭を下げ、掃除を頼んだディニンはアキヤマが住んでいるという地区に行くことにした。昨晚、リリヤからアキヤマに渡してくれと加工済みの刀を預かっていたことを思い出したのだ。長刀を巾着にしまい、身だしなみを整えてから彼は宿を出た。

アキヤマが住んでいる家屋はディニンの宿から歩いて30分ほどのところにある。橋をひとつ渡り、川沿いに歩いていけば見つかるそう。ディニンは地図を片手に、乾いた風の吹くマツマエの街を歩いている。

こここのところ、すれ違う住人たちが剣呑な目つきをしていると彼は感じていた。宿の女将は顔にこそ出さないものの、どこかプレイヤーたちに対して含みのある目を向けている。彼自身は身に覚えの無いことだが、おそらく同胞が何かやらかしたのだろうと彼は予想した。グスタフが治安維持部隊を設立するというようなことを言っていたのは何か事件があったからなのかもしれない、と彼は考えた。もともと彼にとってはどうでもいい話だし、大多数のプレイヤーにとってもNPCの態度が冷たくなるのが知ったことではなかった。

すれ違うプレイヤーたちはほとんどが戦闘用の装備に身を固めており、パーティを組んで狩りに向かうようだった。注意深く狩れば死ぬことは無いとわかった今、マツマエのプレイヤーたちは同胞に差をつけられまいと必死なのだ。レベルシステムやスキルシステムがどうなっているのかはわからないものの、技術の応用によってプレイヤー間の差はますます開きやすくなった。廃人にとってほかのプレイヤーにおいていかれることほどの屈辱は無いので、みな新し

い技術や戦闘方法を模索しているようだった。

また、少数だがマツマエを旅立って関東や関西を目指し始めたプレイヤーもいるらしい。命を賭けてまで遊びたくないという者たちだ。彼らのほとんどは10人以上のパーティを組み、より安全な地方を目指している。が、あくまでごく一部の慎重派に過ぎず、大半のプレイヤーは狩りや生産に精を出しているようだった。

ディニンが街を歩いていると、橋を渡って少し歩いたところにプレイヤーたちの行列ができてるのが目に入った。興味を引かれて近づいてみると、どうやら先日ヒルトルが話していた研究が成功したらしく、「声帯手術　引き受けます　おひとり様金貨150枚から」と書かれた看板が立っていた。ヒルトルたちのギルドが購入した大きな武家屋敷の前にはこれでもかというくらい美少女たちが並んでおり、そのすべてが低い男の声で会話していた。ちらほらと男性アバターも見かけるが、並んでいるプレイヤーのほとんどは美女・美少女たちだった。MMOのダークサイドをまざまざと見せ付けられたディニンは、肩をすくめて苦笑いしながらアキヤマの家屋をめざして再び歩きはじめた。

川沿いを10分ほど歩くと、いかにも江戸時代の城下町ですといった風情の地区に着いた。マツマエの街では唯一洋風の建物がなく、木造の古びた建物が立ち並んでいる。伝統を受け継ぐ職人たちは、自分たちの街によそ者が移り住むことを嫌ったのだ。

地図を片手にアキヤマの家にたどり着き、引き戸をノックする。エルフの容貌が目立つのか住人たちから視線を感じたが、ディニン

は視線を黙殺した。旨く対応できる自信など皆無だったからだ。

「はいはい、アキヤマでござる」

引き戸を開け、アキヤマが家屋から顔を出した。時代がかった口調にディニンがぎょっとした顔を見ると、アキヤマも驚いたようにディニンの腕をつかんで家の中に引きずり込んだ。

「いったいどうしたんだ、急に」

二階建ての木造の家屋は狭かったが、アキヤマが少しばかり物を片付けると2人が向かい合って座っても狭苦しくない程度のスペースはできた。先ほどとは違ってかわって碎けた口調でアキヤマが問うと、ディニンは巾着から長刀を取り出して彼に手渡した。

「リリヤから頼まれてね、これを渡しに来たんだ」

「おお、かたじけない」

アキヤマはうれしそうな顔をして刀を受け取り、すっと鞘から抜き放った。

ルーンは刀の波紋に沿うように刻み込まれており、薄緑色の光を放っていた。アキヤマはため息をついて刀を撫でてから、名残惜しそうに鞘に刀を収めた。

「いや、ここ最近NPCの態度が冷たいでござるからなあ。かねてより浪人剣客というものに憧れていたこともあって、NPCと話す

ときは浪人剣客のロールプレイをしているのでござる」

なるほど、とディニンは納得した。

「ところで、そこにある大量のうちわはなんなんだ？」

「ああ、これもロールプレイの一種で、浪々の身で生きていくためにうちわ貼りの内職をしているという設定なのでござるよ。生産スキルの関係で扇が作れるので、その応用でござる」

どうにも不自然な感の否めない話し方だが、アキヤマは大真面目である。ディニンがおとなしく話を聞いてくれたことに嬉しくなったのか、彼は立て板に水と自分のこだわりを語り始めた。

「そもそも、浪人剣客というのは普段は口入れ屋なんかに出入りするものであつて、実力を隠しながら生きるのが常道。やたらと腕を見せびらかしてやれ秘剣だの奥義だのと御託を並べるような最近の時代小説は全然なつてないでござる。こう、長屋のほかの住人に胡散臭い目で見られながら、怪しい爺さんの用心棒をしたり、あるいは賭場の用心棒を引き受けたり、そういうのが味わい深くていいでござるよ。だいたい、浪人でありながら名剣を使うなどなにもわかつてない。父祖の代から受け継いできた無銘の業物、これがいいんであつて……………」

1時間あまりも蘊蓄を垂れ流した後、アキヤマはふと思いついたかのように言った。

「そうそう、今夜はドリスト殿とともに猪鍋を食べに行くでござる。よろしければディニン殿も一緒にいかがか」

「猪鍋？ いいな、ぜひとも食べてみたい」

「あいわかった、では7時にこの北にある橋の袂に集合でござる」

アキヤマと会食の約束をして、ディニンはいったん自分の宿に戻ることにした。話を聞かされ続けて疲れていたし、昼食を食べたくなってきたのだ。

アキヤマの家を出て、橋を渡って商店街を目指す。あそこには露店が立ち並んでいたのも、何か軽いものを食べるつもりだ。

商店街の入り口で焼き芋を3つほど買い求め、息を吹きかけながら食べる。贅を尽くした高級な料理もいいものだが、こういう素朴な味わいもまたいいものだ、と彼は思った。

宿に戻り、露店で買い求めた版画をぺらぺらとめくっていたらいつの間にか5時を過ぎていた。ディニンはあわてて身支度をして、

用心のために腰に直剣を吊るして外に出る。アキヤマから聞いた話では、どうやらプレイヤーがNPCを殺害する事件が起こったらしくNPCたちは不信感を抱いているとのことだ。優秀な剣士であるドリストやアキヤマと合流すれば怖いものはないが、一人で外を歩くときは用心しなければならいだろうと彼は考えた。

買い求めた浮世絵を眺めていた影響か色街に行きたい気持ちが強くなってきたが、彼は童貞特有の「初めては恋人と」という夢を捨てきれず、まだ風俗に行く気はなれなかった。アキヤマの話によれば魔法によって性病は完全に予防されているらしいが、デインンは初めてが商売女というのはなんとなく嫌だったのだ。ドリストやアキヤマによればかなりの数のプレイヤーが通いつめているらしいが、デインンはどうしても行く気にはなれなかった。

狩りから帰ってきたらしいプレイヤーの集団と何度かすれ違いながら、デインンは待ち合わせ場所である橋を目指す。彼らのほとんどは既存のスキルや魔法の応用について熱心に議論しており、デインンは大変そうだな、と同情の念を抱いた。マイナーな道を突き進んだ彼にとって競争など無縁のものだが、メジャーなビルドや武器を選択した廃人たちは常に激しい競争に晒されているのだ。メジャージャンルのトップ層はMWOが開始した10年前から毎日ログインし続けているような連中であり、そのプレイ時間がデインンの1.5倍に達するような猛者もいると彼は聞いたことがあった。

防衛軍將軍のヴォルテールもそうした一人らしく、彼はエクストラソードスキル 持ちでありしかも片手半剣のスキル熟練度は700を超えているらしい。その話をリリヤから聞いたときはまさに「廃神」と呼ばれるにふさわしい人間であるとデインンは感嘆したものだ。

しばらく歩き続けると橋の袂にドリストが立っているのが見えた。彼の黒い肌と白い髪は、個性的な風貌のものが多くプレイヤーたちの中でもとくに目立つのだ。ダークエルフはステータスの伸びこそいいものの、その容貌とNPC好感度の低さから不人気な種族だ。NPCからの好感度が低いおかげで受注できないクエストが多いので、廃人にはとくに受けが悪い。

「やあ、アキヤマはまだかい？」

「多分そろそろ来るだろ。それより南街での話、聞いたか？」

「ああ、NPC殺害の話か」

ディニンがドリストに声をかけると、彼は深刻な様子でたずねてきた。ディニンと向き直りながらも、警戒するかのような様子でちらちらと周りを見ている。

「警備隊の知り合いからたまたま聞いた話なんだけどな、どうやら下手人は捕縛されたみたいだ。けどそいつの共犯者のギルメンがまだ逃げてるらしくて、NPCの役人とプレイヤーの警備隊が血眼になって探し回ってるってうわさだ」

警備隊とは、グスタフが新たに設立した治安維持部隊の名称だ。発足してわずかな期間で成果を挙げるとは相当に優秀なようだ、とディニンは思った。

「そのギルドの名前はなんていうんだ？」

ディニンが問うと、ドリストは答えた。

「ギルドは ラウンドテーブル っていう名前だ。どこかの鯖の大手ギルドだったみたいだが、以前から評判はよくなかったらしい。確か、ジョブごとに 筆頭 っていう制度を作ってたと聞いたな」

ディニンはドリストの言葉に引つ掛かりを覚えたが、 ラウンドテーブル なるギルドの名前ははじめて聞くのでとくに気にしなかった。

「まあ、むしろ今までそういうことが起きなかったのが不思議だな……」

ディニンが呟くと、ドリストは頷いた。VRMMOでは前時代的なMMORPGよりマナーがよくなっているという話は有名だが、しかしマナーが悪いプレイヤーがいなくなったわけではなかったのだ。VR技術が若者の倫理観を狂わせるという主張は十数年前から存在したが、どうやらその見解は正しかったようだ、と2人は考えていた。現に2人はモンスターを殺すことに対して何の拒否感も感じていないし、快樂のためにNPCを殺害するようなプレイヤーたちだって現れたのだ。

「おう、2人とも来てたのか」

ディニンとドリストが世間話を続けていると、ほどなくしてアキヤマが駆けてきた。紺色の着物に長刀と脇差を差し、笠をかぶっている。何も知らないプレイヤーに見せれば間違いないNPCだと思ってしまうようなその姿に、ディニンとドリストは小さく笑った。

猪鍋屋に着くとアキヤマが仲居に金貨を握らせ、特等の座敷に案内してもらった。今日は雪は降っていないようだが、座敷は落ち着いた雰囲気で心地よかった。運ばれてきた猪鍋も非常に美味で、ディニンたちはいつもより饒舌になっていた。

3人は脂の乗った猪肉を白米にのせ、息を吹きかけながら食べるとろりとやわらかい肉にだし汁が染み込んでおり、白米と一緒にほおばるとなんと旨かった。肉の脂は濃厚でありながらしつこさがなく、いくらでも食べることができた。

「ところで、お前さん弓兵隊の隊長なんだろう？ どうなんだ、防衛軍は」

酔いが回ってきたのか、アキヤマが酔っ払い特有の粘着質な態度で絡んできた。ディニンは酒癖の悪い友人に辟易としていたが、さるにいやなことを思い出して顔をしかめる。

「うーん、將軍とかほかの隊長さんたちはいい人なんだけど……なんていうか、自分のところの副隊長が微妙かもしれない」

ディニンが言うと、アキヤマとドリストは興味を持ったようだった。

「ほうほう、部下が微妙とな。詳しく聞かせてもらおうか」

アキヤマが手元の焼酎を飲み干し、ディニンに顔を近づけてきた。酒臭いアキヤマを手で押しのけて、ディニンは愚痴り始める。

「まあ確かに可愛くはあるんだけどさ、なんとというか全体的にどんくさいしドジなんだよね。いちいち癪に障るし、空気読めないし、だいたい僕は巨乳は嫌いなんだ。あの馬鹿でかい脂肪の塊を見てると胸がむかむかする」

ディニンが心底いやそうな顔で語ると、アキヤマが目をむいて反論してきた。

「巨乳の魅力がわからないとはディニン、お前は人生の半分を損してるぞ。だいたい、可愛い女の子が部下だなんてうらやましい話じゃないか。こちららむさ苦しい野郎と血なまぐさい毎日なんだ、爆発しろ」

ドリストがやれやれと頭を振ってため息をつく。彼はディニンに同情的なようで、何も言わずにディニンの肩をたたいた。

「おまけに迷惑かけたお詫びにデートしてあげるなんて言い出すし、なんでグスタフが彼女を選んだのか不思議でならないよ」

「巨乳ドジっ娘とデートの約束取り付けておいて不幸とは、ふてえ野郎だ。出会え、出会え！」

いよいよ本格的に酔いが回ってきたアキヤマをドリストが殴りつけ、横倒しになったアキヤマはいびきをかいて寝始めた。

「まあ、一度会っただけじゃいろいろと勘違いしてるのかもしれないし。とりあえず、一回だけデートしてみたらどうだ？ 駄目そうだったらグスタフ君に言っ変えてもらえばいいんだし、話を聞くくらいはしてあげてもいいんじゃないか」

ドリストの言葉に、ディンはあごに手を当てて考え込んだ。どのみち何か予定があるわけでもなかったし、それも一興かもしれないと考える。アキヤマやドリストと楽しい時間をすごしたせいかな、彼はだいぶ穏やかな気持ちになっていた。

「……まあ、とりあえずそうしてみるかな」

ドリストは無言で頷いて酒盃を傾けた。ディンも辛気臭い話題は打ち切ることにして、近くにあるらしい賭博場の話を振る。真面目なようでいて賭け事に目のないドリストはディンの予想通り賭場のことは聞いていたようで、実際に行ってみてどうだったかを語り始める。すでに日付は変わっていたがその後も1時間、2人の語らいは続いたのだった。

11話（後書き）

感想返しがキツくなってきたので感想への返信が不定期になります。

12話（前書き）

忙しくて文章を書かなかったら予想以上に筆が進まなくなったでござる。

12話

マツマエの空は暗い色の雲で覆われていた。

カラスの泣き声で目を覚ましたディニンは、目を覚ますと同時に顔をしかめた。冬の乾いた空気はどこへやら、どうにもねっとりとして湿った空気だったからだ。

友人の助言に従ってカロリーヌとデートすることを決めたものの、彼は現在進行形で悩んでいる。デートしているところを知り合いに見られれば誤解されることは確実だし、ディニンとしてはカロリーヌと付き合っていると思われるのは迷惑でこそあれ得になるようなことは何もないのだ。

顔を洗って普段着に着替え、座敷に朝食をとりに行く。やはりとつかかなんというか、女将はプレイヤーに対してどこか含みのある目を向けていた。もっともディニンと同じ宿に泊まっているプレイヤーは基本的にマナーがいいプレイヤーたちだったので、彼女の警戒は日々薄まりつつあるように見えた。

弓兵隊の訓練日程についての打ち合わせができるのが唯一の救いだ。グスタフにもらったスケジュール表を元にいくつか案を立てているので、それをチェックしてもらおう、とディニンは考えている。先日の騒動を振り返るに彼女は優秀とは言いがたい人材なのだろうが、しかし彼の副官である事実は変わらない。グスタフに泣きついて副隊長を変えてもらうまでの間は丁寧には扱わないと不味いと彼は思っている。

朝食を終え、楊枝で歯を磨いてから部屋で弓の手入れをする。居留守を使って約束をすっぱかすことを夢想しながら、彼は作業を続ける。

ちょうど弓の手入れが終わったところ、女将がディニンを呼ぶ声が聞こえた。

「お客さんが来てますよー」

「はい、いま行きます」

盛大にため息をついて、ディニンは立ち上がった。用心のため腰に剣をくくりつけ、薄緑色のマントを羽織る。

彼がブーツを履いて宿の外に出ると、なぜだか妙に機嫌のよさそうなカロリーヌがいた。目障りな脂肪の塊に心の中で舌打ちし、彼は不機嫌な表情でたずねた。

「ところで弓兵隊の顔合わせと訓練の日程についてだけど、とりあえず4日後に全体集会を開こうと思う」

挨拶の言葉もなしに仕事の話を始めた彼に、カロリーヌはぎょっとした顔をした。

どのみち仕事の上で顔をあわせなければならないなら、手短に済ませてしまおうというのが彼の思惑だった。

「は、はい！ いいと思います！」

「訓練の場所、矢の補給、当日の配置等についてはすべて僕が決めるから君は口を出さないでくれ。それじゃ、訓練の場所に案内するから付いてきて」

実際には、グスタフから配られた資料にそれらのことはすべて書いてあった。彼がそんなことを言ったのは、無愛想に振舞ってあわよくばカロリーヌを遠ざけようとする一心からである。

「補給部隊の隊長とは親しいから、そっちの交渉も全部僕がやる。こっちについても君は口を出さないでくれ」

「あの、それじゃあ私は何をすれば……」

「自分の仕事くらい自分で見つけてくれ」

目を合わせず、早足で目的地へと向かいながら冷たい口調で答える。

ディニンが目指しているのは街の防壁だ。グスタフによれば当日は防壁の上に弓兵を配置するので、訓練もそこで行ってくれとのことだった。

すれ違うNPCたちに敵意を向けられているような気がして、ディニンは居心地の悪さを感じていた。頭上の暗雲や現在の状況もあって、鬱屈とした気分になる。

マツマエの住民たちは決してディニンと目を合わせようとせず、それでいてなにやら含むものがあるような様子だった。彼らの煮え切らない態度に、ディニンはますます不快な気分になる。

ディニンの冷たい言葉に戸惑っているらしく、カロリーヌは黙って彼の後ろを歩いていった。そんな彼女のことを頭から追いやり、ディニンはせかせかと歩く。今日は訓練の予定地を視察して解散するつもりだったし、矢の補給について話し合うためにリリヤをたずね

る必要があつたからだ。

ディニンは、なぜ自分がこんなにも苛立っているのかうすうす分
かりかけていた。リリヤやミーナと比較して、カロリー又は外見も
性格も彼の好みではないのだ。

そもそも、弓を引こうというのになぜ巨乳なのか、と彼は疑問に
思っていた。脂肪の塊なんて、弓を引くのなら邪魔にしかない
ではないか。

はつきり言つてしまえば、彼は巨乳は嫌いである。また、コミュ
ニケーション能力の低さゆえか、積極的に押してくるタイプの女性
も苦手だ。カロリー又はいわば、ディニンのもっとも嫌いなタイプ
の女性なのである。

ただでさえディニンは苛立っているのに、いつの間に立ち直った
のかカロリー又は執拗に話しかけてくる。仕事の話ならまだしも、
どうでもいいようなプライベートの話ばかりだ。このまま宿に帰っ
てしまいたい衝動に駆られながらカロリー又は黙殺し、巾着から資
料を取り出して、それに没頭するふりを続けた。

もはや何がなんだか分からない、というのが今の彼の心情だ。わ
けのわからない理由で苦手な人間に付きまとわれ、しかも仕事上の
関係のはずなのに仕事の話がほとんどでない。彼にとっては初対面
なのに、あたかも以前からの知り合いであるかのようになれなれし
くしてくる。野良パーティーで一度一緒になったプレイヤーをいち
ち覚えてるなど、彼にしてみれば気持ちが悪いくらいと言いがな
い。

必死に話題を振り続けるカロリー又と、必死でそれを無視するデ

イニン。傍から見るとなんと奇妙な図だが、2人は互いにあせっていた。ディニンは早くこの苦行を終わらせようと、いつそう早足で歩き始める。

北門につくと、ディニンは衛兵に頼んで防壁の上に登らせてもらえるよう交渉した。口下手な彼の口上よりも数枚の金貨のほうがよほど効果があったようなのが、彼にとっては不愉快だった。

防壁の上にはちょっとしたスペースがあり、弓兵や魔法使いを配置できるようになっている。高さも十分にあるので、モンスターの矢や魔法はほとんど届かないだろう。グスタフの資料によれば、十数名の壁職を弓兵の盾代わりに配置するらしい。

高所恐怖症の人間がいなければいいが、と思いながら眼下の平原を見下ろすディニン。

弓兵隊の役目は、どちらかといえば面攻撃によるモンスターの殲滅が主だ。弓兵だけでは火力が心もとないが、魔法職が加われば物量も火力も十分だ。ディニン自身は敵方の魔術師や僧侶の狙撃に専念して、同時に指揮も取る。

もともと、防衛クエストに割く戦力としては十分すぎるのだ。近接のダメージディーラーが参加できないのは痛いけど、こういったクエストでは面攻撃のできるアーチャーやレンジャー、魔法職の数が重要なのだ。12のサーバーのほとんどの廃人が集結していれば、たかが防衛クエストなんて楽勝だろう、というのがディニンの見解である。

「じゃあ、用は済んだから今日はもう解散ね。用があれば連絡するから、宿にはあまり来ないでくれ」

防壁の視察を済ませた後、ディニンは言った。相変わらず、カロリーヌと目をあわせようとしない。

「あの、よろしければこの後いつしよに食事しませんか？」

「いや、僕はほかの人と約束があるから」

そういつて、ディニンはさっさと背を向けて歩き出す。呆然とするカロリーヌを尻目に、彼は先ほどとは打って変わって軽やかな足取りで歩き始めた。

住民の中でも比較的裕福な者が住む通りを歩きながら、ディニンは珍しく考え事をしていた。

グスタフの口車に乗せられて弓兵隊の隊長を引き受けたのはいいものの、やはり自分が人の上に立てる人間だとは思えない。早いところ副官を変えてもらわなければならない、と彼は思った。

腰にくくりつけた剣は予想していた以上に重く、いつもより彼の歩みは遅い。剣を巾着にしまうことも考えたが、いまのマツマエの状況では丸腰で街を歩くのは不安だった。高いステータスのおかげで剣術の心得がなくても街の住民程度なら何とかなるが、厄介ことはごめんである。

マツマエの住民たちはどうやら商人と職人が主なようで、農作物はマツマエ以南の村々から買い取っているようだった。ディニンにとっては関心がない話だが、グスタフの資料の中にそんなことが書かれていた。

ふと空を見ると、今にも雨が降り出しそうだった。

プレイヤーたちがこの世界に来てからは、まだ一度も雨は降っていない。そのせいか、ディニンはこの世界でも雨が降るということを忘れかけていた。

雨に降られてはかなわないと、ディニンは急ぎ足でリリヤの洋館へと向かった。

リリヤの屋敷に着くといつものように老執事がどこからともなく現れ、門を開けた。

「ただいま、ご当主さまに取り次いできます。しばしお待ちください」

老執事の言葉に頷き、ディニンは門をくぐったところで立ち止まった。

腰の剣を巾着にしまう。友人の家を訪れるのに剣を帯びるというものも失礼な気がしたし、そもそもディニンは剣を帯びるのは好きではなかった。歩きづらいことこの上ないし、彼の剣術スキルではどんな名剣でも鈍器としか扱えないのだ。

しばらくすると、老執事が戻ってきた。

「ご当主さまは地下の工房にいらっしゃいます。作業中とのことでは

工房を離れられないようですが、ぜひともお会いしたいとおっしゃっています」

慇懃な態度でそういった執事に軽く会釈して、ディニンは工房へ降りた。

地下への階段を降り、鋼鉄製の大きな扉を開ける。工房の中ではリリヤが机に向かってなにやら書き物をしているようだった。扉から入ってきたディニンに背を向け、一心不乱に羽ペンを動かしている。

「やあ、よく来てくれた。ちょうど話したいことがあったんだ」

ディニンが扉を開ける音を聞いて、リリヤが椅子から立ち上がり、こちらを向いた。

彼女の心地のいい声を聞いて、ディニンは苛立ちや不安が解けていくのを感じた。

リリヤの細く白い指先はインクに汚れている。机の上にはさまざまな大きさの金属板やカードが置いてあり、そのどれもがルーンを書き込まれているようだった。魔力を封じ込めているのか、かすかに発光している。

机の上においてあった布で指を拭きながら、リリヤは言った。

「ミーナの剣も加工が終わったからね、物騒だから護身用にいくつか作ってみただ」

机の上においてあったカードをリリヤは手にとってディニンに見せた。薄い金属板にルーンを刻んだものらしく、大きさは一般的な

トランプとほぼ同じだ。

「それで、今日は何の用事だい？」

リリヤがたずねた。

「いや、弓兵隊の矢の補給について聞いておこうと思ってね。グスタフの資料では3万本ほど用意する予定だと書いてあったけど、実際どうなの？」

「ああ、そのことね。知り合いの職人に聞いてみたけど、この納期なら余裕らしいよ。店売りの矢も使えるなら、10万でもいけると思う」

リリヤは即答した。

「なるほど……」

どうやらリリヤは僕よりもほど仕事をしているようだ、とディンは思った。

「それで、君の用事はそれだけかい？」

リリヤが問いかけると、ディンは頷く。いちいち家を訪ねてまで聞くことはなかったかもしれないが、ディンはなんとなくリリヤの顔を見たかったのだ。

「それって、次の会議か何かでも聞けたんじゃないかな？ まあいいや、ところで一つ頼みがあるんだけどきいてくれる？」

ディニンが頷くと、リリヤは不思議そうに首を傾げてから言った。ディニンは迷惑に思われたのかと冷や汗をかいたが、リリヤはそんなディニンの心情に気づかず続けた。

「実は、ミーナが所要で明日の夜まで帰ってこないんだ。いまはいろいろと物騒だから、今日はうちに泊まってもらいたいんだけど」

軽い口調でリリヤは言った。ディニンは彼女の頼み事の内容に驚き、戸惑いを隠せない表情で質問した。

「えっと、なんでよりもよって僕なんだ？ 女性プレイヤーはいないの？」

「君のことは信用してるし、ほかの女性プレイヤーの知り合いとは連絡が取れないんだ。まさか屋敷が襲われるようなことはないだろうけど、用心はしなきゃいけないしね」

あくまで軽い調子でそういつてのけたリリヤに、ディニンは複雑な心境だった。信頼してくれるのは嬉しいが、自分がそういう対象として見られていないのかと落ち込み、そして自分が落ち込んだことに驚く。

混乱しているディニンを見て、リリヤは楽しげな笑みを浮かべた。

「じゃあ、そういうことでよろしく。この作業を終わらせたらお茶にするから、少し待っててくれ」

そう言って、リリヤは再び机に向かって作業に打ち込み始めた。

12話（後書き）

素人の趣味小説に「書くだけ無駄ですね」とか感想付けてる人がいて大爆笑した。

13話

「そうは言っても、私は一介の知事に過ぎん。幕府との折衝など、とても……」

「ならば中央から担当者を呼んでください。できないことではないでしょう?」

のらりくらりと言い逃れようとするマツマエ知事に、グスタフは苛立ちを感じながら要求した。あくまで柔和な表情を保ちながらも、心の中で舌打ちする。好好爺然とした雰囲気を漂わせながらも、目の前の老人はなかなか油断できない人物であるとグスタフは感じていた。かれこれ4時間も交渉が続けているが、思ったより譲歩を引き出せずにいる。

マツマエの中央街、その中心にある藩庁の知事室で2人は話している。秘書が出したお茶はすっかり冷めていたが、談合はまだまだ終わりそうになかった。

「ともかく、街の防衛に当たってはそれなりの報酬を用意してもらわなければ困ります。モンスターとの戦いは慈善事業ではないのです」

「いままでは報酬を要求してきたことなどなかったではないか。前例のないことを要求されても、すぐに対応はできかねる。それに、君の提示した金額はあまりにも大きすぎる。マツマエの財政はぎりぎりなんだ、慮ってくれ」

「ですから、先ほども申し上げた通り中央に連絡を取って援助してもらえばいいだけの話ではないですか。それに、正当な報酬もないのでは防衛軍の士気は下がります。下手をすれば、人数が揃わずに街への侵入を許すかもしれないのです」

士気が下がる、というのはグスタフのでまかせだ。倒したモンスターから剥ぎ取れる素材だけでも十分に採算は取れるし、プレイヤーたちのほとんどは一生遊んで暮らせるだけの財産を持っている。報酬がない程度で参加を取りやめるプレイヤーはいないだろうというのが、グスタフと將軍であるヴォルテールとの共通の見解だった。

それでも、グスタフの計画する統治機構の設置とその先の計画のためには少しでも資産があったほうがいい。ヴォルテールと彼のギルドメンバー、それに一部の防衛軍幹部からは計画についての支持と協力の約束は取り付けてある。人的資源が揃いつつある今、グスタフに必要なのは計画の実行のための資産だった。

「その気になれば、僕たちのほうで中央に接触することもできるのです。あなたの立場を慮ってこうして頼んでいるのですが、どうにも理解を得られないようですね」

正面から押しても効果はないようだと言ったグスタフは、思い切った軽く脅迫してみることにした。対等な立場での交渉なら脅迫というのは好ましくない手段だが、グスタフは目の前の知事よりは有利な立場にある。知事からの報酬というのはあくまでも資産集めの手段の一つでしかなく、ほかの手段も用意できないことはない。だが、知事としては街を守るにはグスタフに頼るしか道はないのだ。グスタフに頼らざるを得ない以上、知事はどうしてもグスタフの要求を跳ね除けることができないにいる。

グスタフ以外の冒険者と接触しようにも、すでにプレイヤーの大半は 防衛軍 に参加している。いまとなつてはほかの冒険者集団に防衛を頼むことはできないし、そんなことをしたのが露見すればグスタフに悪い印象を与えることは確実だ。知事としてはできるだけ藩庁の予算は使いたくないが、政府に頼れば中央での己の評価が下がることは目に見えている。知事は好好爺然とした笑みを浮かべながらも、どうにかして厄介な要求をはぐらかす方法を考えていた。

知事が黙り込むと、グスタフは大げさにため息をついて壁の時計を確認した。今日一日は知事との交渉のために予定は入れていない。少しでも相手にプレッシャーを与えるための演技である。

仮に知事が逆上して藩庁を追い出されたとしても、防衛軍を握っているのはグスタフなのだ。資金が集まるのが早いに越したことはないが、かといって今すぐに集めなければいけないわけでもない。今回の交渉に失敗したとしても、彼が防衛軍を握っている以上マツマエ知事との交渉の機会はいくらでもある。黙り込んだ知事の額には脂汗が浮かんでいるが、グスタフは苛立ちを隠しながらも涼しい顔をして座っている。

先に沈黙を破ったのは知事だった。フロックコートのポケットから取り出したハンカチで額の汗をぬぐい、苦々しい声でグスタフに告げる。

「わかった、中央に掛け合ってみよう。ただ、金額のほうはもう少しなんとかならないかね？」

知事の言葉を聞き、グスタフは頷いた。

「では、このくらいで手を打ちましょう」

巾着からペンと紙を取り出し、当初の要求金額より一割ほどまけた数字を紙に書いて知事に見せる。

「……わかった、中央との交渉次第だが、鋭意努力しよう」

「お願いします。では、今日はこれにてお暇させていただきます」

椅子から立ちあがり、一礼して知事室から出る。背後では知事が大きくため息をついていたが、グスタフは特に気にせずに部屋を出た。

知事室を出て、藩庁の中を歩く。正面玄関へ行く途中、2階から1階へと降りる階段の踊り場で職員が声をかけてきた。

「グスタフさん、例の資料ですがようやく用意できました。今お渡しして大丈夫ですか？」

グスタフに声をかけてきたのは藩庁の勘定方の男で、名は中村という。痩せ型で顔色が悪く、少々神経質すぎるくらいはあるものの優秀な官僚だ。

「ああ、もう揃えたんですか、流石です。見せてもらえますか？」

グスタフは中村をねぎらいながら、周囲に目を配りつつ中村から巻物を受け取った。中村がそんなミスを犯すとは思えないが、藩庁の人間に見られては面倒だ。

中村が差し出した巻物は、いわゆる裏帳簿というやつである。グスタフは中央に隠して藩庁の金庫に溜め込んでいる金貨の数を把握

することで知事の弱みを握り、さらに金貨を筆り取るつもりなのだ。この世界の公文書がどういうものなのかはわからないが、少なくとも活字に目が慣れたグスタフにとって草書体で書かれた巻物は読みづらいことこの上なかった。

この場に長居するのは禁物なのですばやく巻物を巾着にしまい、中村に十数枚の金貨を渡してその場を離れた。中村も心得たもので金貨を受け取ると何事もなかったかのような顔で職場へと戻っていた。

グスタフの計画にはプレイヤーの知識だけでは補えない箇所がいくつも存在する。下町の職人たちの抱きこみも進めているが、中村のような優秀な官吏の引き抜きも彼の課題だった。

現在マツマエにいるプレイヤーたちは、そのほとんどがフリーターかニートである。会社や役所に勤めながら最前線までこられるほど甘いゲームではなかったため、それなりに優秀な人材を集めた防衛軍の幹部でさえ管理職としての仕事はひどい有様だ。グスタフの要求水準を満たす仕事をしているのはリリヤとヒルトル、オストワルトの3人しかない。ヴォルテールは持ち前のカリスマ性と指揮能力をいかし調査団を率いてモンスターの生態調査を行っているが、書類仕事の出来は目も当てられない。昨日の夜にマツマエに帰ってきたようなので生態調査について報告書を書いてもらう予定だが、いったいどれだけかかることだろうか、とグスタフはため息をついた。彼に言わせれば、マツマエのプレイヤーたちは事務処理や文書作成が遅すぎてまるで話にならない。

藩庁を出ると、マツマエの空は暗い色の雲に覆われていた。空気が湿り気をおびており、ハイエルフ特有の淡い色の髪が額にはりつく。グスタフは時間を見つけて髪を切りにいくことを心に決め、防

衛軍の本部に帰るため歩きだした。

伝手をたどって調べたところ、現在マツマエにはおよそ4000人前後のプレイヤーがいるようだ。そのうち、今の段階で防衛軍に参加しているプレイヤーはおよそ1400人ほど。この調子で参加者が増え続ければ防衛クエストは楽勝だとほとんどのプレイヤーが思っているようだが、グスタフは油断する気にはなれなかった。

なにせ、この世界では一度死ねば蘇生することはかなわない。蘇生呪文は存在するが有効かどうかは検証されておらず、そのために事故死の可能性が高いAGI型の近接ダメージディーラーは防衛に参加させるわけには行かない。本人の意志の問題ではなく、防衛クエストで死人が出てしまえば防衛軍の信用は大きく揺らぐし、そうなればグスタフの計画に支障をきたす。だが、従来の防衛クエストでは魔法職と近接ダメージディーラーが殲滅速度を保っていたのも事実だ。全サーバーのプレイヤーが同じ世界に転移したことで魔法職の数が増えたとはいえ、近接戦闘職不在で防衛をこなすのはかなり厳しいだろうとグスタフは予想していた。

本部に帰ると、どっと疲れが湧き出てきた。目の奥がじくりと痛み、視界が霞む。ここ数日はほとんど寝てないので、身体能力の高いハイエルフの体にも相当な疲れが蓄積している。いくつかの懸案事項を整理したらまとまった睡眠をとることにして、グスタフは目を揉みほぐしながら本部の自室へと足を運んだ。

本部内ですれ違うプレイヤーたちは、ほとんどが防衛軍幹部の所属するギルドから引き抜いてきた人材だ。グスタフはギルドに所属せずにプレイしていたので、幹部の中でも特に顔の広い面々に頼ん

で人材を集めている。

グスタフの部屋は將軍であるボルテールの部屋の隣にある。本棚には本と巻物がならんでおり、重厚な木の机の上には書類が乱雑に積まれていた。グスタフは常日頃から書類を整頓しておくようにしているのも、机の上に乱暴に積まれているのは彼が出かけている間にほかの職員が運んできた書類だろう。

中村から受け取った巻物を鍵付きの引き出しにしまい、机の上に積まれた30ほどの書類を手早く整理していく。椅子に腰掛け優先順位の高いものから書類を読み始め、手元の資料と照合したり帳面にメモを取ったりしながら書類にサインする。広報やビラの内容も書いていたため、まだペンだこができていないのが不思議だった。

食糧事情についての書類を読んで、サインをしてから決済済みの書類箱に入れておく。あと一時間ほどもすれば職員の誰かがやってきて、決済済みの書類を担当者へと返却する手はずになっている。コピー機がないため、書類の要旨を自分でまとめなければいけないのが面倒だった。

ネクロマンサーの魔法の応用範囲についての詳細なレポート——珍しく書類としての形式が整っていて、文章も読みやすい。執筆者がヒルトルであることを確認して、グスタフは流石に元医者の仕事が違うと嘆息した——に目を通してしていると、開け放っていた扉からヴォルテールが入ってきた。相変わらず生真面目な顔をしているが、どこか眠たげだ。

「やあ、將軍じゃないですか。この書類を片付けたら起こそうと思っていたところです、ちょうど良かった」

そう言って、グスタフは書類にしおりを挟んで脇に寄せた。書類の要旨をまとめていたものとは別の帳面を取り出し、インクに羽ペンを浸す。

「ああ、すまなかった。できれば帰還してからすぐに報告すべきだったのだろうが、あまりにも疲れていたのだな」

ヴォルテールは申しわけなさそうな口調でそう言うと、来客用の椅子に腰掛けた。椅子はマツマエの生産系プレイヤーが作ったもので、華奢な外見ながら結構な頑丈さを備えている。実際、大柄なヴォルテールが腰掛けても軋みすらしなかった。

「モンスターと戦っていて最初に思ったのは、コツさえつかめば以前より簡単に倒せるということだ。たとえば、人型のモンスターなら剣で心臓を突き刺すか首をはねるかすれば簡単に倒せる」

ヴォルテールは深みのある声で語り始めた。

「ほとんどのプレイヤーは平気だったが、中には耐性がないやつがいて、だいたいは食べたものを戻していたな。まあ、何回か戦ったら慣れたみたいだから問題はないだろう。防衛クエストでは遠距離攻撃が中心になるようだし、本番でも問題はないと思われる」

「死体の処理は？ 以前は死体が残らなかったから問題なかったようですけど、以前と同じペースの沸き立った場合は死体の処理が大変なことになるのでは？」

ヴォルテールの話を帳面に書き込みながら、グスタフが質問した。

「放っておけば消えないが、ネクロマンサーの魔法で操作すれば有効活用できるようだったし、彼らが使い終われば以前と同じように溶けて消えた。まだ実験が必要だが、それほど厄介な問題ではないだろう」

ヴォルテールの言葉を聞くと、グスタフは頷いてから帳面にペンを走らせた。

「次にモンスターの沸きについてだが、やはり以前よりは少なくなっているようだ……」

ヴォルテールが口頭での報告を終えて部屋から出て行くと、グスタフは帳面を机の引き出しにしまった。

仕事を再開しようと書類に手を伸ばした瞬間、扉がノックされた。

「開いてます、どうぞお入りください」

書類に伸ばしかけた手を引っ込め、グスタフは来客に声をかけた。どうせ書類を回収しに来た職員だろうと思い、決済済みの書類箱を手元に引き寄せた彼は、部屋に入ってきた人物を見て目を丸くした。

「やあ、少し時間を取れるかい？」

気さくに声をかけてきたのは、グスタフ自らがその頭脳と人脈を

買って兵站部隊の隊長に任命した女性プレイヤー、リリヤだった。

リリヤはいつものように快活な笑いを浮かべながら、目は笑っていない。どうやら彼女が怒っているらしいと看破したグスタフは、彼女を怒らせた元凶であろう弓兵隊の人事についてのいざこざを思い出し、面倒くさいことになったと小さくため息をついた。

13話（後書き）

主人公の性格がブレているのではないかという指摘を多数いただきましたが、それはあれです。コミュ障は相手によって激しく態度を変えるんです。その辺の描写が不足していたことは確かなので、順次修正しようと思います。

14話

グスタフの執務室に入ってきたリリヤは後ろ手に扉を閉めた。

「これは驚きました。僕ほどではないにせよ、あなたもなかなか忙しい身だと思っていたのですが」

兵站部隊の長であるリリヤは、防衛軍の物資の補給について取りまとめる立場にある。当然のことながらやるべきことは多く、わざわざ本部に来てまでグスタフと会うことなど、通常ではありえない。彼女の担当する職務についてグスタフは全権を委任しているし、仕事の話なら書簡をやり取りすれば済むことだ。グスタフに言わせればほとんどの防衛軍幹部は無能だが、彼女は唯一とっていいほどの例外だ。グスタフはその有能さを警戒して計画の存在を彼女に教えていないが、見破られている可能性も十分にあると踏んでいた。

「すべての仕事を自分で行う必要はないし、ありがたいことに親切的な友人たちが仕事を助けてくれる。そのおかげで、こうして君と直接談判できるというわけさ」

口元に薄い笑みを浮かべて、リリヤが言った。皮肉な笑みでなく一見人当たりのいい笑顔に見えるが、彼女の水色の瞳は笑っていないかった。

「ミーナさん、でしたっけ？ エクストラソードスキル 使いましたよね、確か」

「手伝ってくれるのは彼女だけじゃないし、君の『友人』と同じような伝手を持っているのさ」

リリヤは友人、という言葉強調した。その言葉がグスタフ独自の情報網のことを指すらしいと察し、思わず彼は顔色を変えそうになった。

「なるほど、どうやらあなたの友人と僕の友人はかなり似ているようです。たとえば、耳が早くて懐の暖かい相手が好きなところなどは、ずいぶんと似通っているようです」

この言葉はかなり危険な賭けだった。おそらく、リリヤはグスタフがマツマエの市民や役人に金をつかませて情報を集めていることを知っている。そして、彼女も同じようにして情報を集めているのだろう、とグスタフは考えた。この世界の住人を金づくで使っているプレイヤーがほかにもいるということは前から聞いていたし、彼女もそうだったのだろう。グスタフの問いを否定したところで、彼がその気になれば真実を確かめることはたやすい。リリヤはそのことを理解していたし、グスタフの問いに正直に答えざるを得ないことも理解した。すぐにばれる嘘をつけば、自分の立場を悪くするだけだ。

「ああ、確かにそうかもね」

素っ気なく肯定すると、リリヤはそれきり口を閉じた。グスタフのような油断ならない人間の前では、軽い気持ちで言った一言が命取りになることは珍しくない。自然と、口数は少なくなる。

二人の視線が交錯し、互いに探るような目つきになった。

「……そうですか。ところで、そろそろおかけになってはいかがですか？ 必要なら屋敷のものを呼んで、コートも預かりますよ」

「いや、遠慮しておこう」

グスタフは今、執務室の椅子に座っている。対するリリヤはグスタフの机の前に立つており、彼を見下ろしている。話し合いの際に相手に見下ろされることはプレッシャーを受けるということは有名な話だが、そのことを知ってか知らずか、リリヤは座る気はないようだった。

「ともかく、こんなところまでわざわざいらつしやるとはよほど大事な用事があるようです。まずは、忙しいにもかかわらず僕のような臭い人間に会いに来た理由を伺いましょう」

グスタフは目の前の女性プレイヤーについてのひととおりの情報を頭の中で点検し、整理した。トップクラスの熟練度を誇る 刻印術士 であること、ギルドに所属していないにもかかわらず高レベルの生産職プレイヤーに顔が広いこと、基本的に浅く広い付き合いを好むこと、プレイヤーの中でも特に美しい容姿でありながら浮いた話がまったくなくないことや、リアルでの彼女が抱える深刻な問題についてのいくつかの推測。さまざまな情報が一瞬にして整理され、グスタフはリリヤに視線を向けた。

「君の言うとおり、重大な用件があつてやってきた。時間をとるのは容易ではなかったけど、そんなことは問題にならないくらい、重要な用件だ」

真剣な表情でリリヤは言い切った。

「あなたにとって、彼はよほど大切な人物らしい」

グスタフが言った。

リリヤとグスタフの視線が交わる。静寂が流れた。

「否定はしないさ」

沈黙を破ったのはリリヤだった。落ち着いているかのように見えるが、声にはかすかな動揺があらわれていた。

「僕の見er限り、それほど魅力的な人間ではないようですが」

「彼の人間性に欠点があるのは分かっている。でも、だからこそ彼の見せる一途な情熱に惹かれるのかもしれない」

リリヤの声からは、先ほどの動揺は消え去っていた。

「噂で聞いたに過ぎませんが、今まではそういう感情とは無縁の人間だったとか。彼とは長い付き合いでしょうし、さまざまな情報を集約すると、きっかけはそのアバターが自分になったこと。合ってますか？」

グスタフは自らの推測を裏付けるため、リリヤに尋ねた。

「それを聞いてどうするんだ。君には関係ないし、個人的なことだ。詮索されたくは、ない」

リリヤの目が泳いだ。どうやら図星らしい、とグスタフは思った。グスタフの推測が正しければ、彼女はおそらく何らかの障害があって恋愛など考えられない状況だったのだろう。収集した情報と照らし合わせれば、そう考えざるを得ない。そして、彼女が最近になってそういう感情を抱き始めたということは、その障害は克服され

たとえていい。それだけの情報でも、グスタフにとっては大きな価値がある。

「これは失礼しました。それで、用件は弓兵隊の人事について、ですよね？」

湧き上がる笑みを押し殺しながら、彼は至極真面目な顔でリリヤに問いかけた。

「明らかに適切ではない人事だ。射手としての技能は随一だけど、臍臍目に見てもリーダーに向いた人間だとは思えない。いつたい、何を考えているんだ？」

「あなたに話したことはありませんでしたね。他言しないでくれるなら、彼について悪いようにはしないと誓いましょう」

うまく立ち回れば、リリヤを仲間に引き込めるかもしれないということにグスタフは気づいた。彼女に計画について話す危険と、彼女を味方に引き込める利益を秤にかける。

「つまり、どういうこと？」

「僕が防衛軍を組織した本来の目的と、現在進行形で推進している計画について話すということです」

「わかった。他言はしない、聞かせてくれ」

リリヤの探るような目つきは変わらない。だが、彼女の目の奥に一瞬だけ好奇心が輝いたのを、グスタフは見逃さなかった。

「彼が隊長に向かないのは分かった上での人事です。ほかの部隊には適任者が見つかりましたが、弓兵隊だけは適任者が見つからなかった。そこで、僕の計画のためにそれを利用することにしたのです」

落ち着いた口調で、グスタフは語り始めた。リリヤは黙っている。

「われわれ防衛軍は参加者の人数だけを見れば、十分な戦力を確保できています」

「実質的な戦力は回復職と魔法職、アーチャーだけじゃないか。本当に大丈夫なのか？」

「近接ダメージディーラーを出さないというのは重要な条件ですが、しかしクエストの達成が危うくなれば彼らを導入することもあります。將軍のヴォルテールと話し合ったところ、市民の命を最優先にするべきだ、ということになりましたから。これについては次の会合で話し合います」

誠実な表情でグスタフは答えた。リリヤは黙って頷き、話の続きを促す。

「そもそも、以前から防衛クエストは各人が好き勝手に暴れるだけでした。クエスト中はデスペナも緩和されていましたし、パーティ単位で行動するプレイヤーすら稀だったんです。つまり、人数が十分に確保できていれば本来は指揮官など必要ないということです。防衛軍の幹部は、クエストの開始や現状を告知する、本来は運営のものであるはずの役目を担っている、と僕は考えています」

「なるほど、運営のアナウンスがないこの世界ではクエストが始まってからもそれを察知できないプレイヤーのほうが多いということか」

リリヤが得心顔で頷いた。

「そういうことです。しかし、考えてみてください。各人が好き勝手に暴れるだけで殲滅が完了するなら、優秀な指揮官がプレイヤーたちをまとめあげれば殲滅速度は従来よりはるかに早くなるのではありませんか？」

グスタフが問いかけた。

「確かにそうかもしれない。つまり、君がやろうとしているのは……」

「ええ、多分あなたの考えている通りです。僕はディニンさんが隊長として上手く働けないいうことを利用して、最終的には弓兵隊の指揮権を剥奪し、僕が指揮を行おうと考えています」

なんでもないことのように、グスタフは言った。

「なるほど、君ならば彼よりは上手く指揮ができるだろうな。しかし、彼の立場とか世間体のことは考えてないのか？」

「彼の面子が僕にとってなんだというのですか？」

リリヤの質問に、グスタフは問い返した。

「まあ、それについてはあなたの協力次第では考えてみますよ。とりあえず、この件については後で話しましょう。まず、僕の計画について話さなければならぬでしょうから」

リリヤが黙っているのを見て、グスタフは続けた。

「僕の目的は、大雑把に言えば『建国』です。最終目標としては、エゾの地を魔物から奪還し、そこにプレイヤーを中心とした国を作ります」

グスタフは言い切った。リリヤは驚いた顔をして、グスタフに質問する。

「あまりにも大きすぎる話だ。だいたい、エゾ島にどんなモンスターがいるのかすらわからないんだから、無謀に過ぎる」

「ええ、これはあくまで最終目標でしかありませんから。当面の僕の目標は、自治組織の設立と中央政府との交渉です。マツマエの街をプレイヤーの治める街として幕府に認めてもらうつもりです」

「防衛クエストでプレイヤーの力を測ると同時に非プレイヤーに力を見せつけ、彼らと交渉するつもりなのか。しかし、自治組織の設立はそう上手くいくのか？」

「ええ、組織の設立については既にプレイヤーたちの間でも噂になっているはずです。防衛軍幹部の中でも、大手のギルドのリーダーには既に計画について賛同を得ています。それと防衛軍の広報を通じてそれとなく宣伝を行っていたりもするので、今の所は順調です」

グスタフは一息に話した。

「防衛クエスト終了後、防衛軍が主催するという形で2回の『選挙』

を行います。自治組織の設立に賛成するかどうかを問う選挙と、自治組織の議員を選ぶための選挙です。僕と大手ギルドのマスターがこれに立候補し、最初の議会を作るつもりです」

「そんな計画が上手くいくのか？　あまりにも都合が良すぎるように思うけど」

リリヤが尋ねると、グスタフは薄く微笑んで答えた。

「上手くいくという確信はありませんが、あなたの協力が得られれば上手くいく確率は上がります」

「どういうこと？」

「現在のマツマエのプレイヤーたちは、心の奥では不安を抱えています」

グスタフは話し出した。

「今の生活を楽しんでいるプレイヤーも多いでしょうが、今までと全く違う環境に放り込まれて不安にならない人間などいるはずがありません。それに、現実世界と違って警察機構も統治機構も、マスコミすら存在しないというのは現代人にとってかなりストレスを感じる環境でしょう。所属欲求という言葉がありますが、現在のマツマエのプレイヤーはそれを感じているでしょう」

グスタフの長広舌はなおも続く。

「現実世界では日本という国に所属し、家族の一員であり、職場の一員であつたかもしれません。しかし、この世界では彼らは何処に

も所属せず、所属していたとしてもギルドという小数の集まりでしかありません。防衛軍の参加者は日に日に増えています。これはどこかに所属したいと考えるプレイヤーが大勢いるためだと考えています。防衛軍に参加する1500人以上の人間が皆、市民を助けたいというお人よしであるはずはありませんから」

リリヤは時々頷きながら、興味深げな顔でグスタフの話を聞いている。

「さらに、決まった土地に住んでいるプレイヤーもかなり少ないはず。自分の家を持っていないというのは、案外大きなストレスになるものです。現在のマツマエには、自分の居場所を見つけられないプレイヤーが大勢いるものだ。僕は確信しています」

「なるほど、『どこかに所属したい』というプレイヤーたちが大多数なら、プレイヤーたちを纏め上げる組織の設立は歓迎されるはずだと、そういうことか」

「理解が早くて助かります」

グスタフは肯定した。

「君の話はよくわかったけど、協力というのは具体的に何をすればいいんだ？」

「デニンさんの面子を尊重した措置をとる代わりに、あなたにはいくつかの生産系ギルドの長から自治組織の設立について約束を取り付けてきてください。僕が出向きたいのですが、忙しくてなかなか機会が無いんです。それに、あなたは生産系プレイヤーの間ではかなり名前が通っているでしょうから」

グスタフが要求を述べると、リリヤは即答した。

「わかった。協力しようじゃないか」

リリヤが右手を差し出すと、グスタフは握手に応じた。

「では、ディニンさんの件はお任せ下さい」

「わかった。じゃあ、今日は失礼するよ」

リリヤはそう言って、グスタフの部屋を出て行った。扉を開けて部屋の外に出た彼女は、後ろ手に扉を閉めようとする。

「ああ、扉は開けて置いてください。風通しは良くしたいので」

グスタフがそう言うと、リリヤは扉にかけていた手を離してその場から立ち去った。

客人が立ち去った部屋で、グスタフは書類仕事を再開しながらつぶやいた。

「あんな美人に慕われるなんて、つくづくディニンさんが羨ましいな。そろそろ僕にも出会いがあっていいはずだ」

そう呟いてため息をつくと、グスタフは書類仕事を再開した。

リリヤがグスタフに直談判している頃、ディニンはアキヤマとドリストとともにマツマエの街を歩いていた。アキヤマとドリストは街で借りた馬を引いている。

「しかし、本当に出るのか？ 湧きが少なくなってるし、今までどおりの時間に湧くかどうかはわからないと思うんだけど」

ディニンがそういうと、アキヤマは自信満々で答えた。

「大丈夫だつて。知り合いが何回か見かけたらしいし、同じ場所で粘ってれば見つかるだろ」

彼らは今、マツマエ平原に隣接する砂浜に出るという時間湧きmobの討伐に向っている。強いことは強いが、一体ずつしか出現しないというのでかなり旨いmobだ。ドロップする品もなかなか高く売れるので、アキヤマが知り合いから聞いた噂がきっかけに今晚の酒手の足しにするために狩ろうということになったのだ。

門番に通交許可証を見せ、三人は街を出る。今日は雲ひとつない青空で、絶好の狩り日和だ。

「じゃあ、乗り物を準備しようか」

ドリストがそう言うと、ディニンは使い魔のナイトメアを召喚した。アキヤマとドリストはそれぞれの用意した馬に乗り、具合を確

かめている。ゲームの中ではレンジャー以外のプレイヤーは生き物に乗ることは無かったため、2人は不安げだ。

が、2人の不安は杞憂だった。特殊な方法で訓練されたマツマエ商人の馬は、乗り手を最大限に気遣って走るものだ。ディニンのナイトメアを先頭に馬たちが走り出すと、アキヤマとドリストは安堵のため息をついた。揺れはあるが、馬は暴れることもなく大人しくナイトメアについていく。大人しい馬だ、と2人は思った。

平原には、ちらほらと他のプレイヤーたちの姿が見える。ソロで狩りをしているプレイヤーはいないようで、ほとんどが3〜6人のグループで狩りをしていた。

10分ほど馬を駆ると、やがて海が見えてきた。

「砂浜では馬に乗れないみたいだから、ここから先は歩こう」

ディニンはそう言ってナイトメアから降りた。彼がナイトメアを送り返すと、2人の友人も馬を巾着にしまったところだった。どうやら、生物でも巾着にしまうことは出来るらしい。

3人が馬から降り、砂浜へと歩き出したそのとき——ディニンの目にありえないものが映った。

「おい、あれ——誰か知らないけど、襲われてないか」

ディニンが指差した先では、5人ほどのプレイヤーが複数の時間湧きmobに追い詰められていた。

14話（後書き）

番外的な話を書き始めました。「全裸くの一の辿る道」という作品です。よかつたら読んでください。

それと、設定に関しての質問などはツイッターで受け付けます。物語の根幹に関わる秘密でなければ気軽に答えするので、質問などはそちらでお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401x/>

弓使いの辿る道

2011年11月8日12時37分発行